

「龍王宮」の記憶を記録するために
－ 濟州島出身女性たちの祈りの場－

Recording the Memories of "Ryuohgu" :
A Praying Place in Osaka for the Old-generation
Female Migrants from Cheju Island, South Korea

こりあんコミュニティ研究会・龍王宮の記憶を記録するプロジェクト
第3（社会包摂）ユニット 編

GCOE レポートシリーズ 18 号の刊行にあたって

水都大阪の記憶を掘り起こすさまざまな試みが行われている。市内に網の目状にはりめぐらされていた、河港都市の生命である運河の埋め立てと、港湾部の防潮堤整備により、実感をながらく有せなかった水都の記憶の再生を大阪市と大阪府あげておこないはじめたのが、「水都大阪 2009」の各イベントであった。都市の重合する歴史の記憶を掘り起こすことは、都市への愛着を醸成するうえで大変重要である。決して博物館だけに閉じ込めない、そうした記憶を実際の空間で共有できることは、まさしく都市文化享受の真髄であろう。「水都大阪 2009」では多くのオーディエンスを呼び、大阪のもつ、特に水都の魅力が再発見されるきっかけになったのではなかろうか。

一方、大阪の水辺の公有地は、「隠れて住む、緊急避難的に住む」という意味で、自然発生的な無断居住、世間では「不法占拠」、バラック居住の場であった長い歴史を有している。淀川などの河川敷を除いて、脱ホームレスの支援により急速にその数は減ったが、近年の野宿生活者のブルーテントもまさに水都のもう一つの景観であったのである。今から 10 年以上前になるが、大川の水景観を代表する毛馬桜ノ宮公園にも多くのブルーテントがあった。私自身かつてこれらのテント居住者から「ここも不法占拠や、わしらとっしょや」と聞いたのが、本レポートの主演「龍王宮」であった。本レポートの編者「こりあんコミュニティ研究会」のメンバーたちは 2009 年 2 月から 2010 年 8 月の撤去までの間、「龍王宮」の記憶を記録するプロジェクト」として、様々なイベントを通してこの「龍王宮」の存在を世にアピールすると共に、その歴史や記憶を紡ぐ作業を行ってきた。本レポートは、その一部始終の生々しい報告であるとともに、「もう一つの水都大阪」の記憶をアーカイブ化する都市史の欠かせぬ作業となっている。

なお、大阪市立大学都市研究プラザにとって、「龍王宮」の記憶を残すプロジェクト」は社会包摂を研究のテーマに掲げた第 3 ユニットが全面的に支援する対象であったが、2009 年 8 月におこなわれた「もうひとつの「水都大阪 2009」龍王宮プロジェクト祝祭」のイベントでは、文化創造を掲げる第 2 ユニットとの連携も取り結ばれた。本書にはそのコラボレーションの様子も報告されており、ぜひご覧いただきたい。


大阪コミュニティ財団による助成金（西日本高速道路エリア・パートナーズクラブ地域活性化支援基金 B）をもとに、こりあんコミュニティ研究会が主導して、この報告書が都市研究プラザの活動の一環として生まれたことは、プラザの主旨からしても大変意義深いことと考えている。あわせて GCOE 特別研究員が主力となっている、平成 21-23 年度科学研究補助金新学術領域研究(研究課題提案型)「ITACO による新しい地誌学の創生と地域の人縁生成に関する試行研究」(課題番号：10514888、若松司 代表)も、こうした研究の追い風となったことも記しておく。

(文責 水内俊雄 (都市研究プラザ))



「龍王宮」の記憶を記録するために

— 濟州島出身女性たちの祈りの場 —



こりあんコミュニティ研究会

「龍王宮」の記憶を記録するプロジェクト

藤井幸之助・本岡拓哉・第3（社会包摂）ユニット 編

「龍王宮」の記憶を記録するために

— 濟州島出身女性たちの祈りの場 —

龍王宮へようこそ！ —「龍王宮」の記憶を記録するために—

藤井幸之助・本岡拓哉

(こりあんコミュニティ研究会「『龍王宮』の記憶を記録するプロジェクト」)

ここにみなさんに『龍王宮』の記憶を記録するプロジェクト（龍王宮プロジェクト）の中間報告ともいべき本書をお届けする。コリアン・マイノリティ研究会とこりあんコミュニティ研究会が共同で、2009年から2011年の3年間、取り組んできた成果をお伝えしたい。

龍王宮については、異郷の地の、故郷につながる水辺で朝鮮人が^{ツツ}（賽神・巫俗儀礼）をおこなう場所としての意味と“不法占拠”の立ち退き問題があると思う。特に前者は在日朝鮮人研究でこれまであまり扱われてこなかった問題である。

私たちと龍王宮とのかかわりは、さかのぼること3年前の2009年春、こりあんコミュニティ研究会のメンバー全泓奎・宮下良子・本岡拓哉の3人が龍王宮の中に入ったことに端を発する。

それからほぼ毎月のように、^{ツツ}をおこなう部屋を、発足間もないこりあんコミュニティ研究会の月例研究会の会場として、利用させていただいた。これによって、多くの人に龍王宮という場所を直接知る貴重な機会をもていただけた。夏は藪蚊の襲来に、冬はすきま風に悩まされながらも、数十年以上にわたる済州島出身の女たちの祈りの場としての龍王宮を肌で感じる事ができた。

藤井個人の思い出を書かせてもらおうと、大阪外国語大学で朝鮮語を学ぶ学生だった1980年代前半にJR環状線に乗っていて、天満駅をすぎて、大川の鉄橋を越えるといつも目に入る不思議な風景があった。木々の緑に囲まれたプレハブの屋根に「龍王宮」と書かれた看板が見えた。見慣れない名まえと水辺にあることから「龍宮城」かと思った。写真家の藤本巧さんのお仕事を通して、ここが朝鮮人の女たちの祈りの場であることがわかった。しかし、当時、解放（戦）後の朝鮮人学校を中心とした在日朝鮮人教育史を勉強していた私はそれだけでおわってしまった。私の中では四半世紀後の再会だった。

コリアン・マイノリティ研究会のメンバーも合流して、『龍王宮』の記憶を記録するプロジェクト」をたちあげた。専攻も地理学・建築学・社会学・

歴史学・言語学・民俗学・宗教学・文化人類学などの研究者や幅広い人々が参集してくれた。この3年間で、建物の実測調査や関係者への聞き取り調査を行い、そして2年目にやっと実際の^{ツツ}を何度か見る機会をもつことができた。この間、メンバーの金稔万さんが丁寧に撮影してくれた映像は貴重な資料である。しかしながら、龍王宮でおこなわれた^{ツツ}自体の研究は私たちの力量不足で、まだまだわからないことばかりだ。

また、イベントを通じて、多くの人に龍王宮の存在を伝えるために、2009年8月と2010年7月に「龍王宮祝祭」を2度開催した。サブタイトルを「もうひとつの水都大阪」としたのは、繰り返し立ち退きをせまり、その存在を認めなかった大阪府・大阪市の「水都大阪」キャンペーンの向こうを張ったわけだ。この他、新聞社からの取材も受け、紙面を通して龍王宮、そして私たちの取り組みについて広く訴えることもできたと考えている。

また、高田商店の許可のもと、龍王宮に残された祭器・屏風・神図・打楽器ほか、さまざまなモノを可能な限り回収することができた。現在は、大阪市立大学都市研究プラザの大淀プラザに保管させてもらっているが、今後、社会にひろく公開すべく展示の可能性を探っていきたい。

2010年8月に龍王宮はその役割を終え、高田商店自らによって建物は撤去され、フェンスで囲まれてしまった。この場所はおそらく公園整備されることだろう。ただ、この場所の景観が変わったとしても、「龍王宮プロジェクト」は継続する。龍王宮に関わった方々への聞き取りを中心に、今後とも学際的な知を集めて、調査・研究をしていきたいと考えている。本書を手にしたみなさんのご協力や情報の提供をお願いしたい。

(ふじいこうのすけ コリアン・マイノリティ研究会世話人 / こりあんコミュニティ研究会運営委員 / 神戸女学院大学非常勤講師)

(もとおかたくや こりあんコミュニティ研究会運営委員 / 同志社大学人文科学研究所)

高田商店と龍王宮

—在日同胞にパンを与えた象徴的な存在と、癒しを与え、エネルギーを与えたところ—

ハンズデジャ
韓秀子（高田商店 / 龍王宮）

여러분, 안녕 하십니까? (みなさん、こんにちは)。こりあんコミュニティ研究会とコリアン・マイノリティ研究会の主催による「最後の龍王宮祝祭—もうひとつの水都大阪 2010—」が、今日、こうして華やかに行われております「天神祭」と同日に龍王宮と高田商店での終焉の日を迎えました。私としては、日ごろから華やかに終わらせたいと思っておりましたので、よかったと思います。

何かの縁で私どもは三代に渡り、ここの管理をしてきましたが、改めて高田商店と龍王宮というものの意味を管理者として考えてまいりました。高田商店は仕事の内容としては廃品回収とリサイクルといったものです。戦争中または戦後、朝鮮半島から来られた方はたとえ一時期であっても生命を維持するために必ず関わった仕事ではないかと思えます。

そういう意味で、高田商店はそのころのみなさんにパンを与えた象徴的な存在であったと思えます。それから、やはり人間はパンのみで生きられず、精神的な問題もいろいろ抱え、そして苦しみながら生きていて、その精神的なものに癒しを与え、エネルギーを与えるというところで、この龍王宮が役割を果たしてきたと思えます。生命を支え、精神を支えるこの場所がこんな近くにあったということはたいへん貴重であったということが改めて感じられました。

今日、この場所にお別れを告げるわけですが、今日はまた出発の日でもあると考えています。時代の流れでこのように消滅してしまうのも仕方がないかもしれませんが、これからは「龍王宮」の記憶が記録されていくことになりました。今までたくさんの方々がみなさんが調査・研究されました。それから、ここで実際のクツに使われた祭器など様々なものが展示される予定になっているということなどを合わせますと、これから歴史的な意味合いが明らかにされていくことでしょう。

また、集まってくださったみなさまの今日の体験、そしてこの体験をまた話されるということか

ら、歴史として龍王宮と高田商店が在日コリアンの出発点として多大な貢献をしたことが語り継がれていくものと思っております。

龍王宮がこれではなくなるということには寂しい気持ちがありますが、その反面、期待もしております。いろんな媒体を通じて、龍王宮をどのように発展させていけるのだろうか楽しみにしております。今日はこういうご挨拶の場を設けていただきまして、大変ありがとうございます。

今日、最後の日を迎えることについては、実際の問題としては大阪府や西大阪治水事務所などの行政の方々の何度も話し合いをしてきました。しかし、話し合いを重ねていくうちに、相手の態度に、こちらはだんだんと怒りがふくれあがってしまいました。そして、ついにこの怒りが「私がこの解体・撤去を請け負う」と宣言することをさせてしまいました。

この怒りとは何かと申しますと、こんな感情に似ています。たとえば、家族で臨終というところにあるとすると、誰が最後を看取するのかということ。大阪府や治水からは「自分たちが看取ってもいい」という話もありました。しかし、彼らの話しぶりはたいへん無理解で、早くなくなってしまえばいいという願いを込めた“最後の看取り”のように感じました。

私どもは長年ここを管理してきて、やはり愛着もありますし、いろいろな思い出もあります。歴史的な意味合いも深いことを考えますと、身内として心ある者が最後を看取ってやらなければという心情に似たもので、この解体を請け負いました。

しかし、現実の話として解体と申しまして、今は環境問題なんかも昔と違って、随分細かく整理したり、仕訳をしたりして、費用が思ったより結構かかるものですから、少し困ったなという感じになってまいりました。もしよろしければ、ここに関心を持っていただき、何かのご縁で今日集まっていたいたみなさまに最後の龍王宮、そして高田商店、この場所に対するお布施というか、

見送る気持ちでカンパをしていただければありがたいと思っております。

管理者の私どもだけでなく、関心を持って来てくださっているみなさまがこの建物一つひとつを壊すそのところに参加して、歴史を一つ終わらせ、次の新しい歴史を作っていくことにみなさまも参加なさっているということも含まれると思います。

こりあんコミュニティ研究会、コリアン・マイノリティ研究会のみなさま、祝祭として、このように盛大にこのような場を設けていただき、ありがとうございます。今日はみなさまと最後に、天神さんと同じように華やかに楽しんで、わいわいを見送って、龍王宮にメッセージを送る日になったと思います。今日来られたすべてのみなさま方に感謝申し上げます。(2010年7月25日ごあいさつ)

目次

龍王宮へようこそ！

—「龍王宮」の記憶を記録するために—
(藤井幸之助・本岡拓哉)

高田商店と龍王宮

—在日同胞にパンを与えた象徴的な存在と、癒しを与え、エネルギーを与えたところ—
(韓秀子)

龍王宮、そしてそこで行われてきたこと	9
地図・空中写真からみる龍王宮周辺	14
かつての龍王宮周辺の様子 (高仁鳳・飯田剛史・塚崎昌之)	22
龍王宮の実測調査 (黒木宏一・平川隆啓・深田智恵子・増田亜樹)	27
龍王宮における儀礼時の空間利用 (近畿大学理工学部建築学科都市計画研究室)	31
龍王宮プロジェクトの活動の様子	35
在日一生女性の祈りの場所・龍王宮をめぐる歴史 (塚崎昌之)	41
龍王宮から濟州へ、そして再び龍王宮へ —濟州に関する「常識」と「在日二世的信憑」と「村落共同体の構造」— (玄善允)	52

龍王宮プロジェクトで書かれた文章

濟州島出身の女たちの祈りの場・桜ノ宮「龍王宮」 —遠からず姿を消す在日朝鮮人の心の拠りどころ— (藤井幸之助 (2009) 『書評』 132 号)	68
桜ノ宮龍王宮の報告その 1 (全泓奎 (2009) 『Koco-ken 研究会通信』 第 1 号、4 頁)	73
桜ノ宮龍王宮の報告その 2 (黒木宏一 (2009) 『Koco-ken 研究会通信』 第 1 号、5 頁)	74
桜ノ宮龍王宮の報告その 3 (全泓奎 (2009) 『Koco-ken 研究会通信』 第 2 号、4 頁)	75
龍王宮の研究に期待する (谷富夫 (2009) 『Koco-ken 研究会通信』 第 2 号、1 頁)	76
「龍王宮祝祭開催」 (龍王宮祝祭準備チーム (2009) 『Koco-ken 研究会通信』 第 3 号、1 頁)	77
「様々な立場からみる龍王宮祝祭プロジェクト」 (中川真・武井澄人・藤井幸之助 (2009) 『Koco-ken 研究会通信』 第 3 号、2-3 頁)	78

龍王宮・記録を残せなかった歴史に光を (塚崎昌之(2010)『Koco-ken 研究会通信』第5号)	80
竜王宮実測調査報告 (黒木宏一(2010)『Koco-ken 研究会通信』第5号)	81
龍王宮の空間が語るもの (宮下良子(2010)『コリアンコミュニティ研究』vol.1)	82
龍王宮・箱作・濟州島 一水辺の賽神一 (飯田剛史(2010)『コリアンコミュニティ研究』vol.1)	88
大阪濟州人の祈り 一ある濟州島出身女性の事例から一 (高正子(2010)『コリアンコミュニティ研究』vol.1)	95
濟州島出身在日一世の習俗の断片 (玄善允(2010)『コリアンコミュニティ研究』vol.1)	101
마지막 굿이 열리던 날 : 사쿠라노미야 용왕궁 이야기 (桜ノ宮龍王宮の最後のクッ) (전은휘 (全ウンフイ) (2010)『Platform』24)	106
最後の龍王宮祝祭・速報 (こりあんコミュニティ研究会ニューズレター編集委員会『Koco-ken 研究会通信』第6号)	112
「龍王宮」の最期 一形はなくなっても未来の記憶に生きる一 (藤井幸之助(2010)『書評』134号)	113
桜ノ宮「龍王宮」一在阪濟州島出身女性たちの祈りの場一 (本岡拓哉(2010)『居住福祉研究』10)	120
「ルポ・現場発 龍王宮：また姿を消した在日同胞の「場」濟州島女性たちのクッ堂」 (琴基徹(2010)『月刊イオ』9月号、33-35頁)	133
龍王宮プロジェクトに関する新聞記事	
退去迫られる在日祈りの場「桜ノ宮龍王宮」 (『民団新聞』2009年7月29日付)	135
濟州島出身の在日コリアン祈りの場「龍王宮」であす祝祭 (『毎日新聞』2009年8月21日付)	136
なにわアカデミー 53 こりあんコミュニティ研究会「龍王宮」記録に残そう (『毎日新聞』2009年9月11日付)	137
濟州島出身の在日コリアン女性祈りの場 龍王宮の「残し方」模索 有識者らがプロジェクト (『大阪日日新聞』2009年9月25日付)	138
在日の儀式の場「龍王宮」を紹介 (『朝日新聞』2010年7月23日付)	139
在日女性祈り半世紀 「龍王宮」後世に ドキュメンタリー製作 (『読売新聞』2011年5月12日)	139
龍王宮プロジェクト活動日誌	140
龍王宮に関する文献・映像リスト	142
執筆者・資料提供者	144

龍王宮、そしてそこで行われてきたこと

龍王宮の遠景



龍王宮の内部



龍王宮部屋の内部 1



龍王宮部屋の内部 2



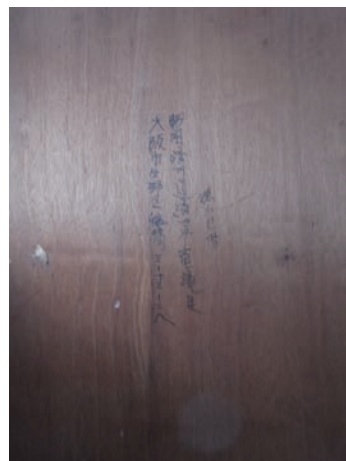
龍王宮部屋の内部 3



壁にはられた喫茶店の電話番号
(下に「コーヒ OK」と書かれている)



壁にはられた喫茶店の電話番号 2



壁に書かれたシンバンの連絡先

龍王宮の撤去



クツの様子

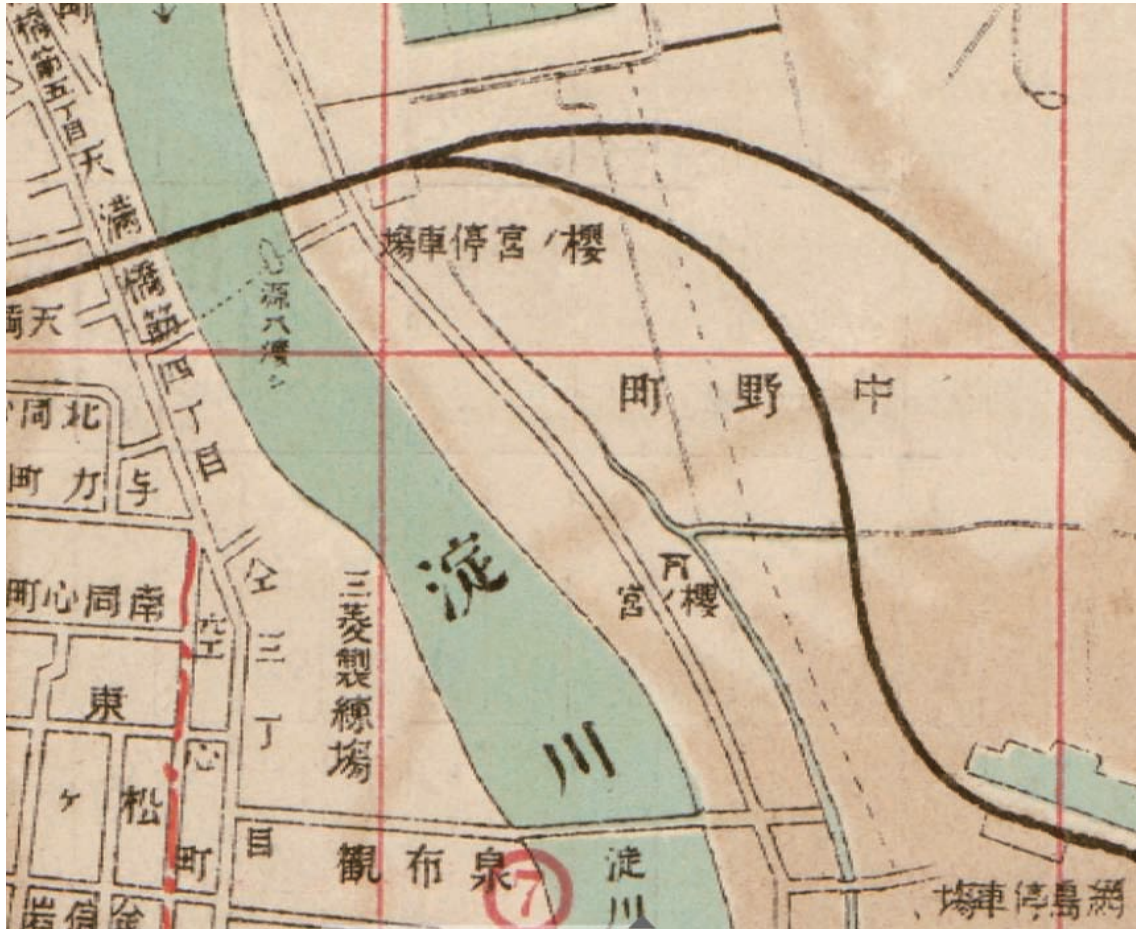




撮影：藤井幸之助・黒木宏一・本岡拓哉・全ウンフィ

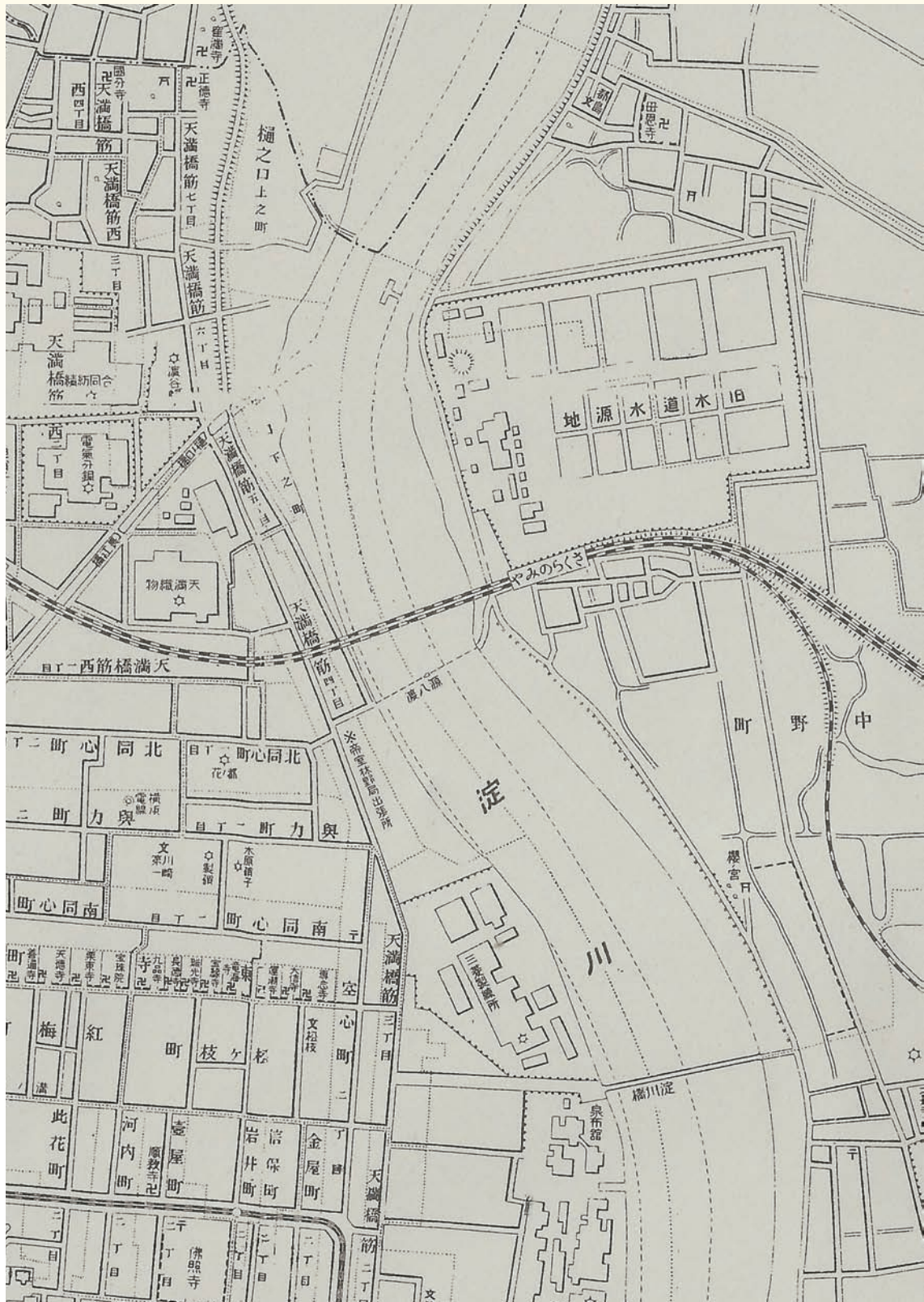
地図・空中写真からみる龍王宮

■ 地図



大阪市図 1903年

『日本近代都市変遷地図集成 - 大阪・京都・神戸・奈良』 柏書房 1987年



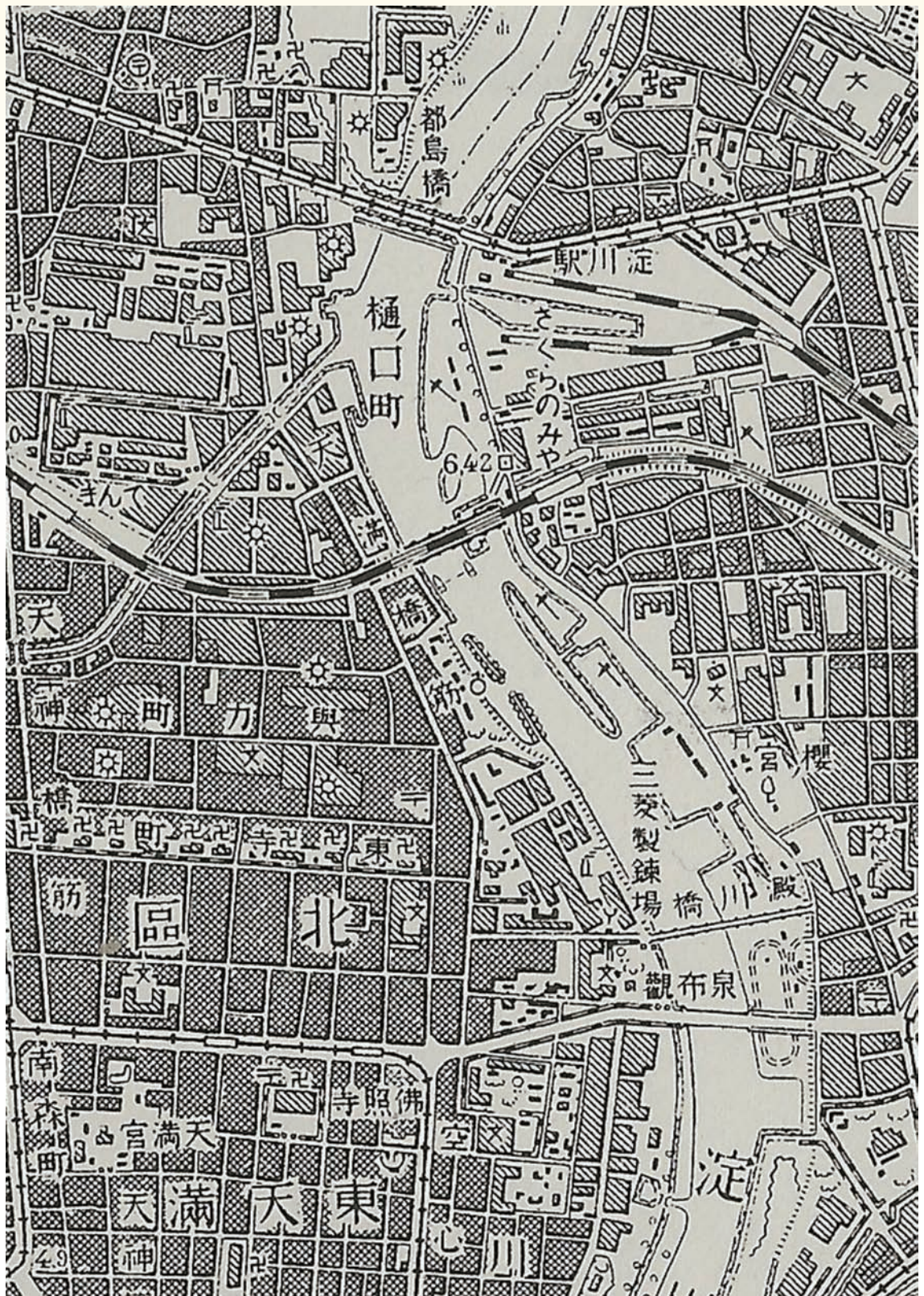
大阪市図 1914 年

『日本近代都市変遷地図集成 - 大阪・京都・神戸・奈良』 柏書房 1987 年



大阪市商工地図 1923 年

『日本近代都市変遷地図集成 - 大阪・京都・神戸・奈良』 柏書房 1987 年

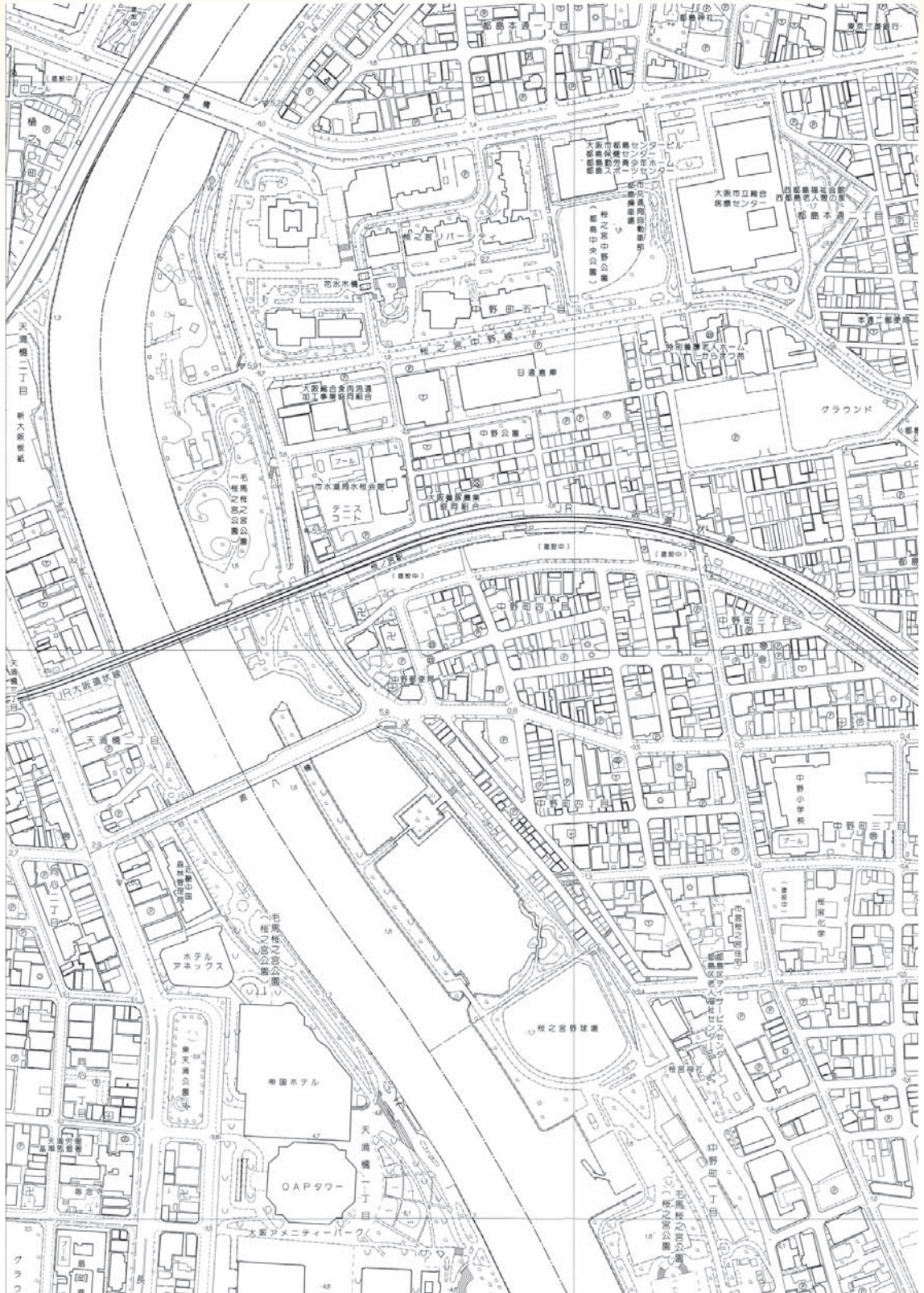


1934年

大日本帝国陸地測量部地形図 (1:25000、図幅名:大阪東北部)



1961年
大阪市都市計画図 (1 : 2500)



2000年
大阪市都市計画図 (1:2500)

空中写真



1942年



1948年



1961年



1967年

収集協力 : 地域・研究アシスト事務所・水内俊雄 (大阪市立大学都市研究プラザ)
出典 : 国土地理院国土変遷アーカイブ <http://archive.gsi.go.jp/airphoto/>



1974年



2010年

かつての龍王宮周辺の様子 (撮影・提供:高仁鳳・飯田剛史・塚崎昌之)

■ 昔の龍王宮写真

1963年 高仁鳳氏撮影





JR 線鉄橋からみた龍王宮 (1989年 飯田剛史氏撮影)



龍王宮敷地内
(1989年 飯田剛史氏撮影)



供物流しのあと
(1989年 飯田剛史氏撮影)



龍王宮と JR 桜ノ宮鉄橋
(1989年 飯田剛史氏撮影)



近辺の古鉄街
(1989年 飯田剛史氏撮影)

■ 龍王宮にまつわる写真



源八の渡し
(1937年「上方」7月号)



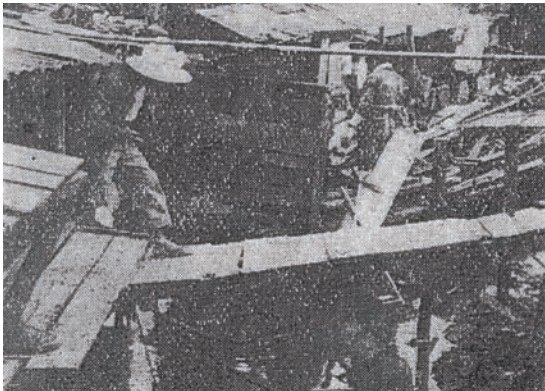
源八の渡し船頭
(1937年「上方」7月号)



1947年 桜ノ宮駅ホーム
(2004年 浦原利恵「終戦直後大阪の電車」
ないねん出版)



京阪乗越橋全景
(2010年 塚崎昌之氏撮影)



善源寺浜

(1937年 大阪市社会部報告「毛馬・都島両橋間に於ける家舟居住者の生活状況」)

龍王宮の実測調査 (黒木宏一・平川隆啓・深田智恵子・増田亜樹)

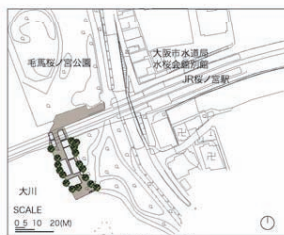


桜が咲き乱れる龍王宮

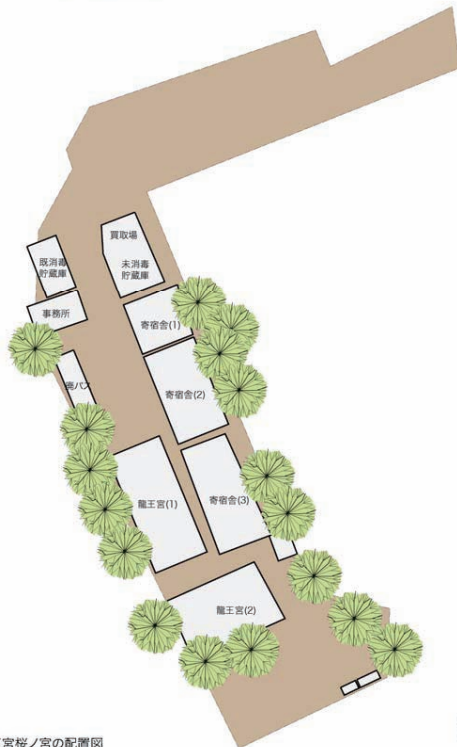
こりあんコミュニティ研究会会員の中の建築学を専門とする研究員が中心となり、2010年2月末から1ヶ月間、龍王宮プロジェクトの一環として、龍王宮の記憶をとどめるための建物の実測調査を行った。

実測調査には、本研究会会員である黒木宏一氏、平川隆啓氏、大阪市立住まいのミュージアムの学芸員である深田智恵子氏、大阪人間科学大学の教員である増田亜樹氏で行った。

これらの調査で書き留めた図面や写真を元に、「龍王宮の記録」として展示する。



龍王宮校ノ宮ノ立地



龍王宮校ノ宮ノ配置図



龍王宮の建物と寄宿舍



JR駅跡と寄宿舍



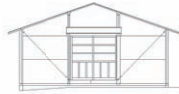
龍王宮に向かう通路

高田商店の看板

龍王宮(1)



龍王宮(1)西側立面図



龍王宮(1)南側立面図



龍王宮(1)北側立面図

SCALE 0 1m 2m



龍王宮(1)平面図・展開図



龍王宮 (2)



龍王宮(2)東側立面図



龍王宮(2)西側立面図



龍王宮(2)北側立面図

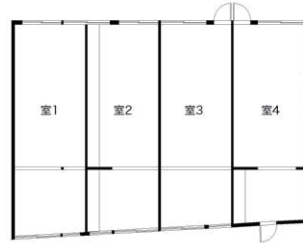


龍王宮(2)南側立面図

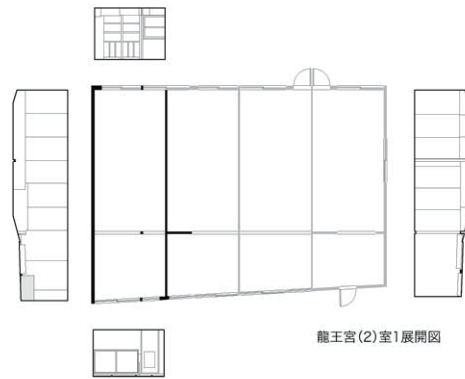
SCALE 0 1m 2m



儀礼のために貼られた仏画や幟(ばん)、棚に置かれた祭具



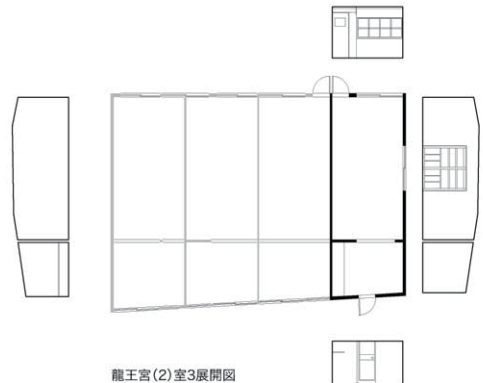
龍王宮(2)平面図



龍王宮(2)室1展開図



龍王宮(2)室2展開図



龍王宮(2)室3展開図

SCALE 0 1m 2m

寄宿舍



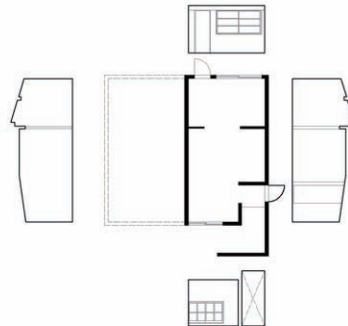
通りに並ぶ寄宿舍の戸



寄宿舍(3)平面図・展開図



ベニヤ板が敷き詰められた床



寄宿舍(1)平面図・展開図

SCALE 0 1m 2m



おろし金、炊飯器、ガスコンロ、壁掛け時計など、居住者の暮らしの面影が残された台所、居室



仏画、服軸の張り紙、カレンダーなどの設えが残る

実測調査・写真撮影：黒木宏一、平川隆啓、深田智恵子、増田亜樹
パネル作成：黒木宏一

龍王宮における儀礼時の空間利用

(近畿大学理工学部建築学科都市計画研究室)

龍王宮における儀礼時の空間利用

近畿大学理工学部建築学科都市計画研究室

1. はじめに

濟州島出身者の女性が行う「クッ」の行為の空間として、1975年の最盛期には1日150組もの儀礼が行われた。しかしこの龍王宮は、2010年に撤去によりなくなるが、この空間の記録として、儀礼時における利用の実態を調査する。本調査では、4月29日に行われた「クッ」の観測から、空間の使われ方、そして、継承されるべき空間を読み解いていく。

調査方法は、2010年4月29日に行われたクッを対象に、8時00分から17時30分にかけての龍王宮全体の図面採取による空間把握、そして、儀礼が行われた9時45分から17時30分の間、10分毎の儀礼を行った当事者のアクティビティ調査を記録した。

2. 空間利用実態

2-1. 儀礼のプロセス

儀礼の全体構成は、行為の変化から、17のプロセスに分けられる。「読経」「歌」「厄払い」など、神に向けての行為に関しては、祭壇前を中心に行われた。また、特徴的なプロセスとして「舞」「撒酒」「燃やす」があげられる。「燃やす」では、主シンバンにより広範囲の移動が見られ、祭壇から離れた東面では副シンバンと食母により、楽器の演奏が行われた。また、「撒酒」や「燃やす」、「流す」を行う際は、南面の戸に向かって行われた。

2-2. 儀礼の物品配置

儀礼を行うにあたり、まず祭壇が設けられる。祭壇の利用からは2つの場面が確認された。前半においては、果物やご飯などが供えられた。祭壇上のロープには、赤、青、黄色の幅30cmほど、長さ1m弱ほどの布も掛けられた。また、後半では、豚の解体がはじまり、それも供えられた。さらに祭壇に供えられたものは川へ流す、最後に食すなどされた。

他、太鼓やドラなどの楽器や神刀など、儀礼に使う道具も祭壇前に置かれるなどした。

3. まとめ

本調査において見出した特徴的な空間として、以下の6点があげられる。クッを進めるにあたり、①神の降りる空間としての「祭壇」、②神が祭壇へ降りるための「橋(タリ)」、③シンバンが儀礼を進めるための「祭壇前」の空間、④準備を行うための「作業空間」、⑤儀礼の中で見られる火を燃やす「広場」、⑥川へ供物を流すための「水辺空間」などである。

また、今回のクッは、17のプロセスで構成されており、その進行は主に主・副シンバンが行った。それぞれ、主シンバンは初めの「読経」から、「舞い」までを、副シンバンは神刀を用いた依頼者への「お祓い」から、最後の「酒お撒く」までを担当した。

その行為と場所の関係を見ると、儀礼を進行する人物は変わるものの、儀礼は祭壇前を中心に、作業は儀礼に影響されない余剰空間で行われ、計画的に進められていた。

表1 儀礼時の行為のプロセス(1)

	依頼者(依)	主シンパン(主)	副シンパン(副)	食母(食)
9:45	お金を祭壇に備える	読経		
9:55	主の言葉を聞く 全てのお米にお札を刺す 囃子を聞かれる (話すのは自由?) 南祭壇の前に冥銭を積む 冥銭のゴミ掃除 部屋を片付け始める	(依)に何かを預言する 太鼓を横へ除け、ベルを持ち、読経		冥銭を作る
10:05	東側の戸を閉める 船作成を手伝う		冥銭のゴミ掃除 部屋を片付け始める 祭壇上のロープの布を取り蛇腹折り 蛇腹折りした布をロープに再度かける	段ボール箱と竹の棒を用意 段ボール箱と竹の棒で船を作る
10:15		祈が依に預言し、衣が応える		手を止め、休憩
10:25	読経	読経を中断し衣・食・副と会話 ベルと読経の繰り返し	布をたたむ 布を裂く 竹の交差点に布の飾りを付ける 携帯に出る 依と話す	布を船の竹に結びつける 船の完成 栄養ドリンクのビンに水2本お酒2本、計4本を満タンに酌む ピンを4隅に掛ける 布を掛ける 箱を別の場所に移動 箱のうちにピンが4隅についていた 部屋を裏面戸から出て行く タオル、まな板を持って戻ってくる
10:35	練習を供える 祈が依に預言し、衣が応える			中央のテーブルに食事の用意 (漬物、おわん、しゃもじ)
10:45	主に問いかける	預言する	「水都2009」の資料を読む 立ち上がり外へ お酒を祭壇に供える テーブルの上の水を全てに入れる	キムチなど食事の用意 外へ(タオルもって)用意・器を拭く
10:45	目を瞑り読経を聞く	読経 鼻をかむ 携帯で何か見る(読経は中断)		助2とステージ2にお酒を供える 休憩
中断	南側の戸を閉める	会話 日本語で電話の相手と会話		会話
10:55	占い	占いに応えている 会話 携帯に出る 投げて占う 電話をかけ、先祖の男女の服1枚づつと、豚を注		
食事			昼ごはん	
11:50	踊る	祈が衣装を脱ぎ、布とベルを持ち、歌う(立っている)		
12:00	南祭壇に向かい、拝む 楽器が激しくなる ハイ、ハイと応える	舞は中止 携帯に出る 舞を再開 舞いながら、布に引き解け結びをつくり、布を振り回す事で、それを解く 解いた布を依に纏りつけ預言する たまに日本語の混ざる会話で盛り上がる	太鼓を鳴らし歌う	ドラを鳴らす
12:10	南側の戸を閉める	舞を再開 布を振り回す しゃがみながら歌う(布は持っている)		楽器を鳴らす
12:20	聞く 祈のチョッキを着る テーブルの前で正座で座る	引きとけ結びをしなが歌う 布を引っ張り結びを解く 何かを依に 歌いながら太鼓	ハッポーステロールの蓋の上に米とお椀線香を乗せテーブルの上へ ベルと依の服を持って歌う 歌いながら、ベルを鳴らす	話に加わる たまにシンバルを鳴らす
12:30	水を飲み服を着る 生米を食べ、手を合わせて拝む	布を一定のサイズに裂き部屋の中央に集める	左手にお椀、右に服とベルを持ち歌う 依に何かを吹き込む 依に水を飲ませ、語りかける 服を掛け、預言する 赤布を依の頭にかけ、頭上で舞と、神刀を振る	祭壇上の布を取り、祈も滅す
12:40	楽器を激しく	太鼓を激しく鳴らす		お供え物を青い布に包む(ご飯、草、卵)
12:50	中断	笑って聞く	副と主が依に話しかける 語る	
13:00	酒を撒く 船を流す	南祭壇のお供え物を船に入れる(果物、赤飯など、食と一緒に) 南側戸から歌いながら水をまく		お金を船に入れる 外で会場裏から船を川へ流す

表1 儀礼時の行為のプロセス(2)

		4人で会話(食母のみ立つ) 4人で布を広げる白を蛇腹に折る(話ながら)		
13:10	中断		話す	布、冥銭、お札で厄払いをつくる
			布を裂く	北祭壇上の布を全部主に渡す お札を広げる 裂いた布をたたむ
13:20	歌う	食にタバコを「厄払い」の上に置くように指示 裂いた布を広げて重ねる、裂くの手伝う	布を裂く(舞に使った赤布) 会話	厄払いに向かい先祖の名前見ながら 歌うベル、線香 畳んだ布でお札を数枚重ね、包む お札を広げるひたすら重ねる(数十枚で1束) お供え物のお酒(小皿、祭壇)を南戸から捨て、汲みなおす 白い布を主に渡す お供え物を青い布に包む(ご飯、草、卵) 炊飯器からご飯を山盛り、注ぐ
13:30		餅などを包丁で切り、食に渡す 食を手伝う	布を広げる	
13:40	布を織る	お供え物を布で包んだ塊を作る	裂いた白布を食に渡す 布を裂く	歌うのを止め、白布を蛇腹に織る 餅を食べさせてくれる(ワラビ、モヤシ、ほうれん草)食べる福をもらう
13:50	中断	副と依は塊作り	小豆餅を食べる(食事休憩)	
14:00			休憩	
14:10	歌う		豚の搬入	お皿を洗い東戸から戻ってくる
			再び赤布を蛇腹に織る 白袋果を畳んで置いておく 布を広げ、重ね、食に渡す お酒を開封	歌を再開・ベル 祭壇の線香を刺し直す 重ねた布を北祭壇上に掛ける
14:20	占い		食とお供え物を空の船に入れる	金属の小さい器を投げて占い 数千円を主に渡す
	厄払いを燃やす			厄払いは丸め食に渡す 厄払いを蓋を持って行き、燃やす
14:30	占い	占いに応えている 応える		前に先祖の名前だけ置き、同じ占い 占いを依に伝える(力入る) 小皿水を南側の戸から撒く 主、副、食は祭壇上を片付ける(依は休憩)
14:40	中断		先祖の服、布を広げる	
	冥銭等を燃やす		歌いながら、冥銭、お札布を纏め、 神刀の後ろで叩き、食に渡す	塊を鎌へ燃やしに行く コピーを勧めしてくれる 燃やしに行く 南側の戸の外で待機 塊を燃やしに行く
14:50		副と会話	歌いながら塊を作る	
15:00			歌いながら赤長布を裂き副に渡す	依と会話 塊の上に赤布を巻せ、食に渡す
15:10	中断		主、依、副で銀マット、茶色い紙、白い紙の順で重ね、マットを作る	
		マットの上に豚を広げ、塊を置く		マットの上に豚の入ったダンボールを用意
	読経	豚を乗せる皿を用意	ベルを取りだし、副に渡す 黒チョッキを着て鼻をかむ	豚の皿にお酒を注ぐ 周りを片付ける 豚のそばを始める 均等になるように、肉を盛って行く
15:20	中断		豚を乗せる皿を用意	
15:30		皿に盛り付け	顔を耳、頬とさばく	肝をさばく 豚の顔を舟に入れる
		盛り付けた皿は祭壇へ並べる マットを片付ける		
15:40		手を洗いに外に出る(戸1から)		
		戻ってくる	部屋に戻り、座る	
		副に少し近づく	衣、主、食で片付け 線に道具などを片付けている	洗った包丁を持ち戻ってくる 衣、主、食で片付け ゴミを捨てて行き、戻る 本銭、ドラを袋に片付ける 片付ける
15:50	読経	折とお金のやり取り	片付けながら食と話す お金を数える お金をしまふ	祭壇に向かい、先祖の名前を前に 置き読経、ベル 立ち戻り 南祭壇の2千円を主に渡す 余った豚を袋に入れる 豚の片付け お金の話 豚を細かくして袋につめる
16:00		豚を誰が持つて帰るかの話	お金の話	
			電話を掛けるため携帯をいじる	依に語りかけるように歌う 歌いながら、話を聞く
16:10		お経を聞く お米を食べる	電話を掛ける 携帯電話で話す	唱える 礼付お米を依に渡す 主の電話を掛けてあげる
16:20	米を撒く	預言を聞き、応える 豚の皿を祭壇からおろす	食と豚頭と祭壇のお供え物を舟に入れる 北祭壇を主、副、食で片付ける	依に預言し、生米を投げる 片付ける
16:30	酒を撒く	豚を盛り付ける	歌いながら、南戸から流すのを見る	お祈りを終え、南戸からお酒を撒く 豚を食べる
17:00	終了	依頼主はタクシーで帰宅		主、副、食で片付ける

※調査日時は、2010年4月29日8時00分から17時30分までである。また、クツの儀礼は9時45分から17時30分までで、願主(依頼者)1名、祈祷師3名であった。



図1 儀礼時の行為と場所

祭壇(南)	祭壇(北)	祭壇前机	床	中央机
オレンジ 4	オ・グ・リ 皿オ3グ1	バナナ 1房	酒パック 2	キムチ 1
グレープ 4	オ・グ・リ 皿オ1グ2	ゆで卵 3	ビール缶 1	キュウリキ 1
オレンジ 4	バナナ 1	オグリ オ2グ1	敷物 敷物	白菜 1
りんご 4	ろうそく 2	生米 1	ロウソク 1箱	ワラビ 2
バナナ 1房	饅頭 2	数珠 1	黄布 1	お膳 1
オレンジ 4	米大 3	酒 皿4	緑布 1	敷物 8
リンゴ・オ1	米小 3	もち 1	白布 1	しゃもじ 1
グレープ 4	酒 皿4チョコ	饅頭 1箱数ナ	先哲の名前 複数枚	削り屑 5
ロウソク 2本	ほうれん豆 1	神刀 1	タバコ 2箱	フォーク 1
生米大 3杯	モヤシ 1	寛簀 1	おハコ 多数	スプーン 1
生米小 9杯	ワラビ 1	揺鈴 1	宿物 多数	金属製深 1
もち 5	酒大 1	ロープ(南)	ドラ 1	金属浅 6
もち小豆 1	焼き魚 1	カラフル布 1	太鼓 1	冥銭 多数
焼き魚 2	もち小豆 2	赤布 1	椅子 1	
ほうれん草 1	酒パック 2	青布 1	ストーブ 2	
モヤシ 1	ピンク・水 一袋	黄布 1	鍋 3	
ワラビ 1	赤布 1	ロープ(北)	ヤカン 1	
お酒 11	etc	赤布 1	座布団 3	
ゆで卵 6		緑布 1		
饅頭指し 1		黄布 1		
オレンジ・リンゴ				
グレープ	オ4・リ1・グ2			

表2 儀礼時の物品配置(前半)

床	祭壇(南)
ストーブ 2	皿へ盛付 13
籠マット 1	ちれた豚 1
神刀 1	お酒パック 1
お酒パック 2	お酒缶 1
バケツ 1	お酒小瓶 10
テーブル 2	お米 1
敷物 一箱	お供え物 1
個人荷物	距離(器小) 1
鍋 3	距離(器大) 2
神刀 1	ロウソク 1
算盤 1	饅頭 2
揺鈴 1	
太鼓 1	祭壇(北)
ドラ 1	饅頭 1
座布団 3	鍋 2
	バナナ 1
ロープ(南)	オレンジ 3
綿襦袢布 1	リンゴ 1
白布 1	酒パック 1
赤布 1	ロウソク 1
緑布 1	酒缶 1
お札 1	あずき餅 1

表3 儀礼時の物品配置(後半)

龍王宮プロジェクトの活動の様子

定例研究会



管理人 韓秀子さんの挨拶
(2009年4月12日)



第2回定例研究会
(2009年4月12日 宮木謙吉氏案内)



第3回定例研究会
(2009年6月20日 高野昭雄氏報告)



第4回定例研究会
(2009年6月20日 本岡拓哉氏報告)



第5回定例研究会
(2009年7月19日 斎藤正樹氏報告)



特別研究会
(2009年10月13日 Jin Nye Na氏報告)

定例研究会



第 7 回定例研究会
(2009 年 10 月 24 日 塚崎昌之氏報告)



第 8 回定例研究会
(2009 年 11 月 21 日 柴田剛氏報告)



第 11 回定例研究会
(2010 年 2 月 27 日 森類臣氏報告)



第 13 回定例研究会
(2010 年 4 月 24 日 高敬一氏報告)



議論の場としての龍王宮
(2010 年 4 月 24 日)



第 14 回定例研究会
(2010 年 5 月 29 日 島村恭則氏報告)

龍王宮祝祭 2009 リレートーク (8月22日)



管理人 宋良恵さん挨拶



こりあんコミュニティ会水内俊雄代表挨拶



会場の様子



朴保さんライブ



リレートークの様子



リレートークの様子 2

龍王宮祝祭 2009 祝祭 (8月22日)



祝祭の様子



祝祭の様子 2



祝祭の様子 3



祝祭の様子 4



塚崎氏フィールドワーク案内



懇親会の様子

最後の龍王宮祝祭 2010 (7月25日)



パネル展示の様子



管理人 韓秀子さんの挨拶



朴明子さん一人芝居
「柳行李 (やなぎごうり) の秘密」



朴明子さん一人芝居
「柳行李 (やなぎごうり) の秘密」 2



天神祭を見ながらの祝宴



天神祭 船渡御をみながら

調査事業



クツ調査の様子



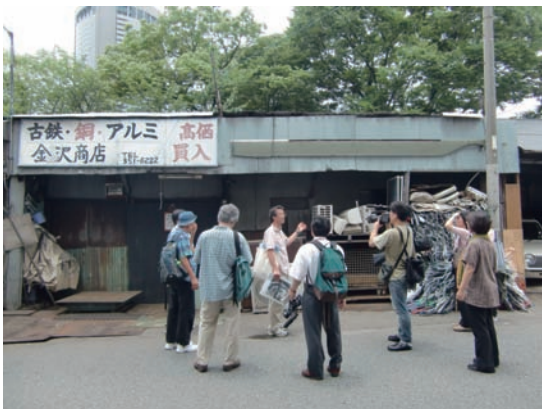
クツ撮影の様子



龍王宮備品保存事業 1



龍王宮備品保存事業 2



フィールドワークの様子



龍王宮撤去作業撮影の様子

撮影：藤井幸之助・黒木宏一・本岡拓哉・全ウンフィ

在日一世女性の祈りの場所・ 龍王宮をめぐる歴史

塚崎昌之

はじめに

2010年8月、在日朝鮮人1世、とりわけ済州島出身者の女性の祈りの場所、JR大阪環状線桜ノ宮駅の西側、大川の河川敷にあった龍王宮が閉鎖された。

龍王宮のあった大川沿いとその西側の天六周辺は、戦前期の在日朝鮮人にとって特別な場所であった。1923年にできた朝鮮人のための最初の教育施設である済美第四小学校夜学校、1926年に内鮮協和会が設けた最初の朝鮮人「救済」施設である豊崎共同住宅・隣保館、1930年にできあがった「遊興」施設である「朝鮮遊廓」、1931年にできた朝鮮人による朝鮮人のための医療施設である大阪朝鮮無産者診療所など、これらは最大の朝鮮人集住地域であった猪飼野・中道などの旧東成区（現生野区と東成区）ではなく、いずれもこの天六周辺にできあがったのである。そして天六周辺からほど近い大川沿いで、戦前期から朝鮮人の女性たちは、民族差別、女性差別など社会からの疎外に対する心の平安を得る手段としてクツ（巫俗式儀礼）を行っていたようである。戦時中、朝鮮人に対する「皇民化」政策が吹き荒れた時期には、民族的な色彩の濃いクツの儀式を表立って行えなくなったが、戦後にその行為は復活し、その数が多くなるとともに、建物を利用してのクツが始まり、龍王宮も成立したと思われる。

本稿では、龍王宮、そしてその周辺地域と朝鮮人との関係性に注目しながら、済州島出身女性の歴史、そして大阪での巫俗、クツの歴史、そして戦後の龍王宮成立の経緯について解説していく。

1. 1920年代半ばまでの大川・天六周辺の朝鮮人

龍王宮がある大川・天六周辺は、産業革命初期において此花・福島地域、大正地域と並ぶ、大阪の三大工業地域の一つであった。此花・福島地域には1894年に大日本紡績福島工場が、1901年には住友製鋼所¹が操業開始し、その後、西六社とよばれる大工場を中心として、日本屈指の重工業地帯が形成された。また大正地域は1883年に大阪紡績が操業開始、第一次世界大戦中に拡張された埋立地に中山製鋼所、大阪製鉄、藤永田造船などの重工業の工場が立ち並ぶようになった。

そして、毛馬から天満橋までの大川・天六周辺には、明治初期の1871年に造幣局（当時は造幣寮）が操業を開始したのを皮切りに、右岸周辺に中小の硝子工場や染色工場ができ始め、1887年には天満紡績、1892年に野田紡績、1899年に高瀬染工場、大日本製糖大阪工場が操業を開始した。しかし、本格的にこの地域で工業が発展するのは、1909年に淀川改修工事が終わり、毛馬閘門ができ、大川の水流が安定してからであった。その後、左岸の開発も進んでいき、大川沿いには1914年の帝国製紙淀川工場、1916年に王子製紙工場、1918年に鐘紡淀川工場などの大工場が立ち並ぶようになったのである。ちなみに、この地域と上記二つの工業地域との違いは、海岸から離れているために重工業が発展せず、軽工業が中心であったことであろう。

この大川・天六周辺に朝鮮人労働者が姿を現すのは、1913年6月のことである。1913年から大阪の紡績工場に集団募集の朝鮮人女工が働くよ

1. 西六社とは、住友電気、住友金属、住友化学、日立造船、汽車製造、大阪ガスのこと。

うになったが、その二つの工場のうちの一つが現在の京橋駅の西側にあった摂津紡績野田分工場であり、この工場には朝鮮慶尚南道から集団募集された33名の少女を含む女工が働いていた。ただし、この少女たちは1914年7月、募集人の甘言に騙されたと北署に駆け込み、長続きはしなかったようである。

1910年代後半、第一次世界大戦の好景気の中、朝鮮人たちの就労は確実に増えていった。1916年からの工場法の施行に伴い、従来、年少者の労働に多くを頼っていたガラス工場は労働力が窮迫し、工場経営者たちは工場法の適用を受けない朝鮮人少年たちや安価に使用できる朝鮮人青年たちを就労させるようになった。このことを証明する資料として、1919年2月2日には、善源寺の王子製紙、南長柄の粟津硝子の朝鮮人労働者80名が、高宗死去に際し、天六に集合、中之島に祭壇を設け、遙拝式を行った事を記載した『大阪朝日新聞』、『大阪毎日新聞』の記事も残っている。また、1923年4月26日の『大阪毎日新聞』の記事によれば、天六周辺には2,000名、天六の南東に隣接する玉造・城東練兵場付近の嶋野・鯉江・城東村の2,500名の朝鮮人が住んでおり、天六の北西に隣接する中津・十三・鷺洲には1,500名、そして鶴橋にはまだ1,000名程度しか住んでいなかった。この時期の朝鮮人たちの職業の5割は職工で、その筆頭が染色工、次いで硝子工、紡績工となっており、紡績工は女性だけで1,000人ということであった。大川周辺には、染色工場、硝子工場が多いと先述したが、朝鮮人労働者の渡来が始まった1910年代から1920年代前半にかけて、多くの朝鮮人たちがこうした工場に就労し、天六やその周辺に居住地を求めたのである。1923年3月の就労調査では（朝鮮総督府1924）、天六周辺で朝鮮人を30人以上使用している工場として、高瀬染工場男78名、徳永硝子男90名、山本硝子男63名、四谷硝子男59名、吉田硝子男37名、秦硝子男38名、粟津硝子男56名・女1名、溝崎硝子男37名、市居染工場男31名・女1名、浪速染工場男45名、大阪毛織男28名・女25名などがあげられている。30

人以下の工場でも多くの朝鮮人が使用されていたことは間違いない。

1920年代半ば前から、猪飼野地区では耕地整理が進み、農地であった土地に長屋が続々と建ち始め、多くの朝鮮人、とりわけ済州島出身者が住むようになるが、かれらの多くもこの時期には天六周辺に働きに行っていた。土木労働を避け、工場労働者になる傾向が強かった済州島出身者は大川・天六周辺に就労の場を求めたのである。なお、猪飼野の朝鮮人の就労場所として象徴的に語られるゴム工場が猪飼野周辺に本格的にできてくるのはもう少し後の1920年代末に近くなっていることである。

2. 龍王宮のあった「源八の渡し」周辺の歴史と朝鮮人

龍王宮のあった場所は、元々は「源八の渡し」の渡船場があった場所である。江戸時代元禄末期の1700年頃から、大川沿いのこの地で渡しが始まったと言われている。江戸時代の右岸(西側)には、今でも与力町、同心町という町名が残っているように幕府の役人の屋敷があり、左岸(東側)には農村が広がり、有名な「中野の梅林」もあった。18世紀半ばの俳人で文人画でも高名な毛馬出身の与謝蕪村は1778年に「源八をわたりて梅の主かな」と歌っている。

1895年に大阪鉄道の梅田一玉造間が開通し、源八の渡しの北側に鉄橋がかかった。その後、大阪鉄道は関西鉄道に吸収され、1906年の鉄道国有法に基づき、1907年には国有鉄道になり、城東線と呼ばれるようになった。また、西六社と大阪駅とを結んで1898年に開通した西成鉄道も1906年に国有化され、西成線となった。大阪城の東側には主に大砲とその砲弾を製造する東洋最大の兵器工場である大阪砲兵工廠があったが、西成線から城東線は西六社の住友製鋼所で作られた鉄鋼をこの砲兵工廠に運ぶという重要な軍事路線であったのである。城東線は1914年に複線化され、大川には鉄橋がもう一本架けられた(15頁、地図、空中写真を参照)。

そして、城東線が複線化された頃から始まった大川沿いの護岸工事は、1919年には完成したと思われる。そのときに、大川に半島状に突き出した渡船場もでき、渡船業者も私営ではなく、市の請負として営業することになり、さらに1932年には市の直営となった。

ところで、明治時代初中期の不平等条約下、明治政府はイギリス船などが南方から持ち込む伝染病をなかなか水際で上陸を食い止めることができなかった。そのため、当時の大阪ではコレラが度々流行し、多くの庶民の命が奪われ、特に1886年はひどく、約16,000人が命を失ったとされる。そこで、大阪市は上水道の整備に乗り出し、1895年、源八の渡しのすぐ北側に桜ノ宮水源地を設けた。しかし、大阪市としてはこの水源地だけでは手狭であったことから、新淀川の完成、毛馬閘門の築造に伴い、新たに柴島浄水場を1914年に完成させ、1915年に桜ノ宮水源地を休止させたのである。

1920年代に入ると、大川沿いの工業地帯はますます発展し、物資の流通において水上運送だけでは限界が訪れていた。そこで、1927年12月にこの空地を利用して淀川貨物駅が設置され、1929年に完成した城東貨物線を通じて、吹田操車場、そして全国の鉄道網に連結した。この淀川貨物駅で扱われた主要な物資は付近の工場の原材料・製品ではなかった。淀川、特に鳥飼付近で採取された川砂を、船で運んできて淀川貨物駅から運び出した。関東大震災で煉瓦造りの建物の危険性が分かり、鉄筋コンクリート作りの建造物が多く建てられるようになっており、川砂の需要が増していたのである。川砂の採取等は許可が必要であり、瀬戸内海周辺出身で船の扱いに上手い者たちがあっていたが、その川砂を淀川貨物駅に運び上げる仕事を請け負ったのが朝鮮人たちであり、かれらは貨物駅近くの淀川右岸で水上生活を行った（水上生活の様子26ページに写真あり）。『毛馬・都島両橋間に於ける家舟居住者の生活状況』によれば、1937年には都島橋周辺の2カ所で計25隻、47世帯、211人が暮らしていたようである。船の中は普通4、5畳、大きいも

ので10畳ぐらいであり、電気も敷かれ、郵便物も届き、集落には朝鮮料理の食堂まで存在した。子どもが水に落ちて死亡する事故もあった。その一部の朝鮮人たちが、源八の渡しのすぐ北側の入江の部分にも居住していた。1937年7月号の『上方』には、チマ・チョゴリを着た朝鮮人女性たちが渡し場の階段を利用して洗濯している様子の写真が残されている（25ページ参照）。しかし、この水上生活をした朝鮮人たちには済州島出身者は少なく、慶尚南道の出身者が多かったようである。

この水上生活者は、管轄の港水上署で、無許可で流水を専用することは水路取締河川法違反に触れ、衛生的見地からも好ましくないと問題にされ、1938年5月に水上生活場所にほど近い場所に作られた市営淀川住宅に「強制移転」させられた。その直前の1936年6月に、源八の渡しのすぐ南側に源八橋が完成、それに伴い渡船も廃止され、渡船場は空地となったが、門柱や柵などは残された。しかし、この時期には朝鮮人に対する「皇民化」政策が強まっており、戦前期に龍王宮が成立していたことは考えられない。

3. 済州島の朝鮮人女性の大阪への渡航

龍王宮でのクツは済州島の女性たちが主に行なった。では、いつから済州島出身者、とりわけ女性が大阪で暮らすようになったのであろうか。

大阪に朝鮮人が本格的に暮らし始めるのは1909年のことである。それまでは数人の域を出なかったが、1909年末には42人（大阪府1910）と増えており、このうちの多くは難波付近に暮らした朝鮮飴売りであった。そして翌年の1910年末にはさらに206人（田村1981）になる。この増加分は市電工事に従事した土木労働者が中心であった。1913年には、大阪電気軌道（現近鉄）の生駒トンネル工事にかかなりの人数の朝鮮人が従事しており、地元住民との「抗争」事件を起こしたという記録も残っている（田中1993）。しかし、この人たちが済州島出身者であった可能性は低い。

濟州島からの渡航は、紡績会社の募集で始まったと強調されることが多い。農商務省工場監督官であった吉阪俊蔵が、1917年に日本での朝鮮人使用場所を記した『調査報告書』（『社会政策時報』213号所収）を作成しているが、これによると最初の朝鮮人職工導入は1911年の摂津紡績木津川工場であり、最初に朝鮮で職工を集団募集した例は1913年5月の摂津紡績明石工場であると記されている。大阪の工場が最初に朝鮮人女工を募集したことがわかる資料としては、先述したように1913年春から三重紡績が試験的に使用したという1913年11月4日『大阪時事新報』の記事がある。しかし、ここにはどこで募集したかは記されていない。続いて、摂津紡績野田工場が同年6月に慶尚南道普州（ママー晋州）で女性19名、10月に慶尚南道密陽郡で女性14名を募集したという1913年12月26日『大阪朝日新聞』の記事があり、摂津紡績は濟州島で職工を募集してはいなかったのである。

戦前、濟州島に関する貴重な研究を残した榎田一二は1935年1月に著した論稿に「内地労働者及職工の不足と、高率賃金緩和策として大正3年大阪紡績工場の事務員、職工募集の為来島、引続き他会社の事務員の職工募集の為来島、好況は愈々続き、阪神工業地帯からの職工募集勧誘員の来島」と記している。しかし、それはおそらく男工であろう。というのは1913年12月時点で大阪での朝鮮人女工は摂津紡績の54人、三重紡績の40人で他は5、6人であった。1914年7月5日の『大阪朝日新聞』によると、摂津紡績野田工場の女工14名は、募集人の甘言に乗せられて来阪したが、会社は約束通り待遇しないと警察署に訴え出ており、その後すぐに帰国したと思われる。1914年末の大阪在住の朝鮮人数は男子212名、女子4名、1915年末には男子397名、女子2名であった（朝鮮総督府1924）。吉阪の『調査報告書』では、摂津紡績木津川工場では132名を雇用したが、1917年12月の段階では31名しか残っていないことが記されているように、募集した朝鮮人女工が大阪に定着することはなかった。また、女子の募集労働者は寄宿舎住ま

いであり、クツを行うようなことはできなかったに違いない。

1917年8月26日『大阪毎日新聞』の記事によると、1917年段階で多数の朝鮮人紡績男工を使っているのは、鐘淵紡績中島工場のみである。榎田の記述と照らし合わせると、1914年に鐘淵紡績中島工場が濟州島で最初に男工を募集した可能性が高い。ただし、吉阪の『調査報告書』には鐘淵紡績は掲載されていない。

だが、募集は渡航開始の引き金になったかもしれないが、募集で大阪に渡ってきた者はそれほど多数ではなかったし、その多くも定着もしなかった。渡来者の主流は「自主」渡航であったのである。濟州島から大阪への渡航者が増えるのは1915年4月に濟州島―釜山航路が開通され、釜山―下関経由で渡日しやすくなってからと考えられる。さらに1916、17年の第一次世界大戦の好景気が後押しをした。大阪の朝鮮人人口は、1914年末に男212名、女4名であったが、1915年末に男397名、女2名、1916年末に男749名、女13名、1917年末には男2030名、女205名と爆発的に増加するが、90%以上が男性であった（塚崎2009）。1917年5月12日の『大阪時事新報』にも「日韓併合後鮮人の内地に入り来る者頗る多く殊に大阪は最も多数にして千五百余名の多きに達せるが是等全羅南道慶尚南道の者多く就中濟州島より渡来せるもの過半数を占むる」とあり、半数近くが濟州島の男性であったことが読み取れる。

濟州島の女性では、早い時期から海女が季節労働者として、来阪していた可能性は高い。1923年8月10日の『大阪毎日新聞』夕刊には、「朝鮮濟州島からはるばる大阪築港へ稼ぎにくる海女」と見出しを付け、…今から十年前の夏大阪築港天保山の潜水夫請負業宇田屋の主人が朝鮮の濟州島へ潜水夫を雇ひ入れに行つた事がある、…最初の年に海士達の財布はずつしりふくらんだ、その味を占めて翌年から未だほの寒い六月の初めにやつて来て十月一杯働いて帰る」と記されている。しかし、あくまで彼女たちは季節労働であり、定着したわけではなく、クツとは無縁の生活であっ

ただらう。

しかし、1920代後半になると、家族で定着する人たちも増えてきた。その中には済州島で海女をしていた女性も当然含まれていた。彼女たちの間では、現金収入を目的に鶴橋・四貫島などから大阪築港に通う女性も現れた。1935年5月8日の『大阪毎日新聞』には「故郷での海女生活が懐かしく、朝十時ごろから四、五時間ばかり働いて一人当たり約一円四十銭を儲けるといふ」と記されている。本来の海女仕事以外にも、飛行機遭難・溺死者の捜索、台風で沈んだ船荷の引き上げなども行った。彼女たちは故郷を思い出しながら、故郷に残した親、兄弟の幸せを祈りながら、故郷の海につながる水辺でクツを行ったことであろう。

龍王宮周辺に済州島出身者が住んでいたことは、1937年9月8日の『大阪朝日新聞』の記事で、都島南通1丁目、中野町の済州島出身者が軍用機献納のために90円50銭を贈ったと記されていることから確認できよう。当時の朝鮮人の他の献納額から考えても、この額は50を超える世帯からのものと思われ、多くの女性たちもこの場所に住んでいたことが想像される。ちなみに、以前にこの地域の町会長をしておられた方の証言によれば、済州島出身者が集住していたのは中野小学校の北側付近であったようである。

4. 戦前のおける朝鮮人巫俗

大阪における朝鮮人によるクツはいつから始まったのであろうか。おそらく、渡航開始初期の段階から、私的な範囲では行われていたであろう。しかし、本格的にそれが朝鮮人に必要とされたのは、それまでの出稼ぎではなく、家族を呼び寄せる定着者が多くなり、女性人口も増え始めた1930年頃のことである。このことを示す資料として、1928年6月末調査の大阪市社会部調査課『本市に於ける朝鮮人の生活概況』には、僧侶男2となっているが、1932年12月末調査の大阪府学務部社会課『在阪朝鮮人の生活状態』では、僧侶2、神占師2、巫子1となっている。

朝鮮では仏教と巫俗の結びつきが見られるとい

う。朝鮮三国時代の4世紀後半に仏教が伝来し、新羅時代には護国仏教として、国家の手によって保護された。続く高麗の時代にも国家の庇護を受け、天台宗、曹溪宗が発展した。しかし、朝鮮時代に入ると一転して儒教が国家の支配原理となり、仏教は弾圧の対象となった。僧はソウルに入ることを禁止され、宗教的賤民階級に身分を落とされた。宗派は整理され、寺院は人里離れた山間部に移され、経済的にも困窮するようになった。国家の支配制度から排除されることにより、逆に民衆に目を向けなければならないようになったのである。宗教として民間信仰、つまり巫俗を取り入れつつ、民衆、特に女性に浸透し、民衆仏教としての基盤を固めることで命脈を保った。一方、男性は儒教原理に基づくチェサ(儒教式祖先祭礼)などを主宰し、巫俗とは一定距離を置くことが多かった。

大阪最初の「朝鮮寺」が1932年5月に東淀川区山口町の2階建借家にできたことが1932年5月27日の『大阪朝日新聞』に記されている。僧侶の鄭永達は忠清南道麻谷寺の僧籍であった。その後も多くの「朝鮮寺」や説教所の類ができていった。「朝鮮寺」で巫俗が行われていたことは、1941年1月の大阪府知事の「知事事務引継書」(大阪府公文書館1941)に、「朝鮮寺」の僧侶について「…鮮人僧侶ノ大部分ハ従来何等僧侶ノ経験資格ナク職工等ガ僅ニ巫覡方法ヲ習得シテハ僧侶ヲ偽装シツヽアル状況…擬装方法ニ依リテ僧侶的体裁ヲ保持シ居レルモ之ガ実質的内容ニ至リテハ噴飯ニ耐ヘザルモノアリ…教文知悉セザル結果如何ナル場合モ単ニ南無阿弥陀仏ノ念仏ヲ唱フルノミニシテ荒唐無稽ナル加持祈祷行為ニヨリテ無知蒙昧ナル信者ヨリ金品ヲ騙取シ或ハ医療行為ヲ妨害シタル等ノ事実アリ…」と書かれていることでもわかる。また、戦後、生駒山麓などに多く建てられた「朝鮮寺」のフィールド調査を行った飯田剛史(2002)は「朝鮮寺」を次のように定義している。『「朝鮮寺」とは、在日韓国・朝鮮人によって建てられたシャーマニズムと仏教の混交した宗教活動施設の仮称である」とし、さらに「生駒の朝鮮寺の宗教活動は…仏教寺院の側面と、巫

俗儀礼の場という側面との二つの顔からなっている」、「信者が寺に求めるのは先祖供養と攘災招福の祈願である。出家仏教である曹溪宗寺院も、この願いを無視してはやっていけない」とも記している。「朝鮮寺」は済州島出身者にとっては、故郷でクツを行う堂（タン）の役割を果たしたことと思われる。このような「朝鮮寺」以外にも広く巫俗は行われた。それは朝鮮集落の家にムーダン・シンパン・ポサルを呼んで行うこともあったろうし、水辺に出て行うこともあった。ちょっとした朝鮮人「密住」地には必ずシャーマンの役割を果たす人はいたと言われる。

しかし、1934年に大阪府内鮮融和事業調査会が発足し、従来の「融和」的な内鮮協和会の方針とは異なり、「同化」政策、「皇民化」政策が強められていく（塚崎 2007、2008、2010）。また、1935年8月、10月には国体明徴声明も出て、1935年12月には大本教への大弾圧が始まり、それとともに、巫俗への攻撃も起こる。1935年2月に、鶴橋矯風会は「旧正（正月）ニ際シ火ノ用心、巫女廃止等注意事項ヲ印刷配布」し、1935年8月の大阪府内鮮融和事業調査会第二回決議事項の「五、生活改善問題ニ関スル事項」の内には「七、在住者ノ宗教乃至ハ情操生活ノ指導訓練ニ関シテニ調査研究ノ方法ヲ講ズルコト」と記された（樋口 1991）。1935年12月の『特高外事月報』には、「大阪府に於ては、在留朝鮮人が巫覡（内地に於ける巫女其他神おろしの類）と称する迷信を慣行し、或は『ブンムリ』と称する特異の風楽を開演為す等朝鮮在来の悪習相当行はれ、各種の弊害を醸しつつある現状に鑑み、之が矯正の為特に警察上の障害を惹起すべき行為に対しては自今嚴重なる視察取締を加ふべく今回警察署長宛通牒を發したるが、此の種取締は時宜に適したる措置にして相当参考に供すべきものと認めらる」と警察が直接、弾圧にあたるようになる。権力者側は朝鮮人たちのこのような行為を民族的色彩が強く、「皇民化」の妨げになるものとして弾圧するとともに、総力戦を戦う上において「近代化」に反する迷信として弾圧したのである。1936年1月16日『大阪時事新報』には、

朝鮮人が奇怪な呪文の祈祷で病氣治しをして、金品を搾取したとして、検挙されたという記事がある。西成区出城通居住の朝鮮人二人が、西成区で巫俗施設を開いていたが、さらに郷里で知り合った普天教の信者を院主に祭り上げて、東大阪の額田に高野派古義真言宗薬師寺出張所と看板を掲げた「朝鮮寺」を開いた。その「朝鮮寺」でのクツが西成の朝鮮人街で大評判となり、検挙されたのである。

しかし、弾圧にあたったのは権力者側だけではなかった。知識階級や経済的に成功した朝鮮人にとっても、クツは非「近代化」／「遅れた朝鮮」の象徴であり、唾棄すべきものであった。

金文準は1920年代後半から1930年代初頭に朝鮮人ゴム労働者を組織し、大阪で最も活躍した共産主義者であり、1935年からは民衆の権利擁護を目指したハングルの新聞『民衆時報』を出した人物である。この『民衆時報』は度々、権力の弾圧の対象となったが、その『民衆時報』でも「巫俗」について攻撃を行った。1935年8月1日の第3号では、「迷信を打破しようカナダ生」という記事が掲載されている。「未開の時の迷信は自然に対する恐怖哀敬に根源していたが近代迷信の発足は生活苦にあることを知ることができる。現社会の生産性が現代人の成功失敗を宿命的に支配しているというので、吉凶禍福に対する射幸心が人間性の弱点を捕捉するようになった。…私はこのような意味において何よりもまず易占ト巫を為業する奴らを撲滅することを提唱する。この産業大都、科学文明の集合地である大大阪の白昼街路上で演出される醜態はここに一々記載する必要もないが甚だしい者は重病患者の前で膽大に死の宣言をし、一晩中二三日間式を継続して擾乱な舞楽で安眠を妨害することはただでさえ自宅難をさらに一歩加鞭する要因になっているし、経済的にも不当な消費を敢行し一回で三四〇円乃至二三百円の費用を捧げる等この弊端を全部記載する余裕がない…

一、巫女占術者は社会人心をむしばむ寄生虫である

一、〇（一字脱落）時でも速やかに寄生虫を駆

- 除しないと一身を亡くして一家を滅ぼす
- 一、この寄生虫を駆除する薬は一般人士特に婦女子の自覚にある
 - 一、我々はこの寄生虫に対する社会的制裁機関を持つ
 - 一、職場の若い女性は率先して寄生虫撲滅の先駆者になれ
 - 一、全朝鮮民衆は啓蒙運動特に迷信打破に参加しろ

また、経済的な成功者を中心に「親日派」としてふるまった人々が中心となって発行した『東亜新聞』も1939年7月29日の第197号に、「インチキ宗教家に当局の鉄槌下らん」と題し、「(大阪) 当局の邪教手入れが一段落を告げるや今度は市内彼処此処にチンピラ邪教が横行して始末に困る有様が続出する。先づ東成区はその根拠地であったが矯風事業の徹底化されるに伴はれ最近大半は消えてなくなった様に見えるがそれでも指導員や警官の警戒を潜つて愚夫連をたぶらかして金銭を搾り上げる妖女達か(ママ) 度々鉦や太鼓を鳴らして町内を騒がすものもないではない。就中西成は津守交番裏金某、鶴見橋六丁目の権某、等を始め四十余人の巫女連が我占ひ靈験あらたかなりと云はんばかりに鎬を削つて争ひ廻つて愚夫愚婦の争奪に火華を散して居り旭南通りの方某、金某の母等は既に各百円位づつも搾られてある新事実がある。彼等は何も(ママ) 以つて患者を弄絡するかと記者が潜行して見れば大抵奥の部屋に仏棚見度様な棚を設けて赤い糸青い糸、米等を供へて雑貨屋の店先よろしく飾り立てゝおいて私に神霊が付いてあるからとて占ひをしてやる。そして必ず祈祷せねば病氣や災難は逃れぬと言葉巧みに説き伏せてその手数料として多額の金銭を要求するがその祈祷の仕方たるや実にハテ(ママ) なもので近隣の迷惑言語に絶す。之を放任せんか、民心を擾乱し矯風事業にも一つの癌物になると云ふ見地から当局でも今後容赦なく掃蕩すると云つてゐる。巫女連よ転業せよ。」と攻撃した。

そのような弾圧体制とともに、1940年には大阪府下、全警察署を単位に協和会支会も成立し、

管理体制が確立したこともあり、表立ってクツを行うことはできなくなった。しかし、街中を離れ、秘かにクツが続けられていたことは次の記事からもうかがえる。1942年8月分の『特高月報』には、「大阪府にありては同府中河内郡南高安村不動ノ瀧、白糸ノ瀧妙見堂行場(生駒山中腹)に於て朝鮮人の大々的巫覡行為あるを探知し、一斉取締を為し、巫覡十二名被巫覡者四十六名を検挙し、首謀者と目さるゝもの四名を送還、其の他は厳戒釈放せり」とあるように、生駒の山中で秘かにクツが行われていたのである。この南高安村の不動ノ瀧とよばれる瀧は、現在の不動院がある場所だと思われる。この不動院は曹奎通(1991)によると1943年に金全良という高野山で修行を積んだ僧が開いたことになっている。不動の瀧は靈感があり、病氣治癒力があるということで、戦後も地元の日本人にも信者が多かったそうである。弾圧開始後も仏教の形を借りながら巫俗は続いたものと思われる。戦時中も秘かに続いたこのような動きが戦後の龍王宮や生駒山麓の「朝鮮寺」につながっていったのである。

5. 戦後、龍王宮の成立の経緯

源八の渡し跡に龍王宮ができたのは、1963年から1967年の間であったと思われる。1961年の空中写真には源八の渡し跡に建物がある様子はない。ところが、1967年の空中写真には、南北に長い2棟の建物らしい姿が見受けられる。ただし、龍王宮として使用されていた南の端にあったプレハブや鉄橋高架下のプレハブは見当たらない(空中写真は20ページ参照)。また、高仁鳳氏が1963年に環状線鉄橋上の電車の中から、源八の渡しの北側の島を撮った写真がある(22ページ参照)。当時、高氏はクツが行われていたので、その小屋を写真に撮ったのだが、源八の渡し側のプレハブの記憶はないそうである。

高氏やオモニに連れられてきた玄善允氏の記憶(玄2010)にあるように、渡しの北側の島でクツは行われていたことは確かである。旧町会長の話によれば、この島の小屋の持ち主は、源八の

渡しの船頭さんであった。娘さんの病気のために敢えて船で渡らねばならない島で暮らしたようである。戦後、クツが行える状態になったときに、それまで川沿いでクツを行っていた朝鮮人の誰かが、北側の島の船頭さんの小屋使用を頼みこんだと思われる。濟州島では先祖は海にいと考えられており、殊に海女の間では海に対する信仰は厚いものがあった。濟州島の海辺の堂（タン）に通じるものを感じ取ったこと、水を通して故郷の濟州島につながっていること、供物が水に流しやすいことなどが選ばれた理由であろう。朝鮮人女性の間に口コミで広がり、また、船頭さんも使用料等の収入を得られるために、使用回数も増えていったのではなからうか。そして、北側の島だけでは捌ききれなくなり、1963年以降に建てられた源八の渡し跡のプレハブ小屋でも行われるようになったのであろう。

では、なぜ龍王宮のプレハブの建物が建てられたのであろうか。龍王宮は元々クツを行うための場所として建てられたものではなかった。プレハブが建つようになった経緯を推測して見よう。

現在、桜ノ宮駅の西側、大川側の道路沿いには昔の城東線の橋梁の基礎となった二種類の煉瓦積みが残っている。北側の現在使用されている環状線の複線橋梁のコンクリート製の基礎は、1932年に城東線が高架化されたときの架橋のときのものである。中側の単線橋梁の基礎は1895年に梅田一天王寺間の大阪鉄道城東線開通時に架橋したときのものであり、フランス積みという煉瓦の積み方がされている。その後、大阪鉄道は1900年に湊町一奈良間を開業していた関西鉄道に吸収合併され、続いて1906年の鉄道国有法に基づき、翌1907年に国有化された。南側の単線橋梁の基礎は1914年の城東線複線化のときの単線用橋梁の基礎であり、イギリス積みという煉瓦の積み方である。1914年に複線化されてからは、1895年の橋梁、1914年の橋梁ともに使用された。ちなみに城東線が環状線になったのは、1961年に天王寺一西九条間が開通した後である。（大阪鉄道局1950）

第一次世界大戦の好況下、さまざまな会社が淀

川右岸の大阪一京都間に鉄道を敷設することを目論んだ。その動きの一つとして淀川左岸の現京阪本線を1910年に完成させていた京阪電鉄は、1918年に淀川右岸に本線の支線を作る出願をした。京阪本線の野江から分岐して赤川付近で淀川を渡り、山崎を越えたところで、再び淀川を渡り、淀でまた本線につなげるという計画であった。その後、山崎から四条大宮に出る延長線を追願した。1919年に京阪電鉄はその認可を得たが、その際にターミナル駅は京阪本線のターミナル駅である天満橋駅以外に設けることが条件になり、大阪市内に新しいターミナル駅とする場所を探し始めた。

折から城東線の高架化の計画が1919年から始まった。城東線高架の計画を知った京阪電車は高架化に伴い廃線となる在来の城東線の桜ノ宮一葉村町（中崎町西）間の地上線路の敷地を入手し、葉村を起点とし、桜ノ宮駅から赤川を抜け、淀川を渡り、上新庄あたりに出て京都まで結ぶ路線に変更し、1920年に払い下げ許可の内諾を受けた。京阪電車は城東線廃線地の払い下げを得る代わりに、高架化に伴う改築関係費570万円を負担することになり、土地だけでなく、レール・橋梁も手に入れることになった。ところが大阪府・大阪市がこの計画に対して自治権の侵害であると攻撃、また、京阪電鉄の後ろにあった政友会への攻撃も強まったために、高架化の話は立ち消えになってしまった。そこで京阪電鉄は別に起点を設けなければならなくなった。

1922年に淡路一千里山間を開通させていた北大阪電鉄は、淡路一天神橋筋六丁目間の敷設免許権を持っていたが、金銭的に淀川の架橋ができなかったことに京阪電鉄が目をつけた。1923年、京阪電鉄は淀川右岸線のために新京阪鉄道を新設した。その新京阪鉄道に北大阪鉄道を買収させ、淀川右岸線の始発を天神橋筋六丁目に変更することにし、淡路から淀川右岸線を京都に向けて建設することになった。新京阪鉄道は天神橋筋六丁目一京都西院間を1928年11月に竣工させた。現阪急京都本線である。これにより、城東線廃線敷地は当初の目的からすると不要になったが、将来、

梅田に進出することもあるかと考え、権利はそのまま保有することにした。

1928年、鉄道省は城東線の高架化にいよいよ着手した。京阪電鉄は淀川右岸の新京阪電鉄のための廃線地の用地は必要がなくなっていたが、京阪本線のために廃線地を利用しようとした。それは、本線の野江から桜ノ宮間に新たに支線を作り、桜ノ宮から梅田まで線路を伸ばそうという計画であった。梅田進出は京阪の悲願でもあった。現在の梅田のHEPファイブがある場所に駅を作る予定で土地も取得していた。工事費の負担は若干の計画変更により、366万円に減少しており、当初は京阪電車も予定通りに払い込みを続けた。桜ノ宮駅東側には京阪電車の支線が城東線の高架の下を通るための「京阪乗越橋」も1932年8月に竣工した(25ページ参照)。ところが、京阪電車はこの頃、経営が悪化しており、新線を作るどころか、工事費の支払いも不可能になり、318万円を負担した後の1932年7月に工事費支払猶予願いを提出し、梅田進出を断念した。

また、京阪電鉄は国道1号線の改修工事もあり、1932年10月に蒲生駅(現京橋駅の東側約400m)を西に270mずらし、現JR京橋駅北東付近100mに移転が完成した。大阪の人間にはテレビCMで有名なグランシャトーのすぐ北側の場所である。この移転により、城東線との連絡が図れるようになり、利用客が梅田へ出ることが楽になったことも梅田進出の断念にもつながったようである。移転後の蒲生駅が京橋駅に名称変更したのが1949年、さらに京阪高架化に伴い、旧京橋駅が現京橋駅の場所に移転したのが1970年のことである。

京阪電鉄は梅田進出を断念したが、しかし、覚書があるため、鉄道省はいつ京阪電鉄が建設を再開してもいいように土地、施設は残された。残された施設の一つに、大川にかかる1895年と1914年の複線化のときの鉄橋があった。京阪電鉄は1942年10月に路線免許を取り下げ、土地・施設は鉄道省に「納め」られた(京阪電気鉄道1960)。

1942年の空中写真には3本の鉄橋が写って

いる(20ページ参照)。北側から1932年の城東線高架時に作られた2本の線路が走る橋梁、続いて真ん中には1895年の城東線開業時に作られた地上線単線用の鉄橋、南側には1914年の地上線複線化の時に作られた単線用の鉄橋である。北側以外の鉄橋は使用されていなかったが、京阪本線の梅田延伸用に残されていたのである。

金属回収は1939年から始まったが、1941年8月には国家総動員法第8条が発動され、金属類回収令が公布され、本格化した。1942年に先述したように、京阪電車の梅田延伸関連免許が失効したため、使用されていない鉄橋も金属回収の対象となったようである。ちなみに通天閣が金属回収で撤去されたのは1943年であった。1942年の空中写真(20ページ参照)には北側の島には建物は写っていないようである。

戦後の1947年の桜ノ宮駅ホームから、大川方面を向けて撮った写真(25ページ参照)があるが、複線の鉄橋の横に1895年の鉄橋のみが写っている(浦原2004)。また、1948年の米軍撮影の空中写真に1932年の鉄橋、1895年の鉄橋の他、1914年の鉄橋の橋脚の半分だけが残っている様子が写っている(20ページ参照)。1914年の橋梁の上の部分と橋脚の一部を金属回収したところで、戦況が悪化したために中断したと思われる。

1961年の地図も、大川を二本の橋脚が渡っている(18ページ参照)。1961年の空中写真も同様である。しかし、この空中写真には1948年の写真にある一番南側の半分だけ残っていた1914年の橋脚は写っていない。この時期までに南側の橋脚は完全に撤去されたものと思われる。源八の渡し場跡には建物はまだない。北側の島の部分は不鮮明ではっきりとしたことはいえない。

1967年の空中写真には1895年の橋梁・橋脚はなくなる(20ページ参照)。つまり、1961年から67年の間に中央の橋脚が撤去されたことがわかる。1961年の環状線化工事の付帯工事として橋梁撤去が行われた可能性もあろう。また、源八の渡しと北の島にも建物があることが確認できる。源八の渡しのプレハブの建物、後の龍王宮が

建築されたのもこの時期であった。

源八の渡しの建物はこの橋脚を撤去したときの土建業者が労働者の宿泊や資材収納用に建てたプレハブだと旧町会長が証言している。この土建業者は龍王宮内部に放置してあったマイクロバスを所有していた会社（カワモトコウギョウ河本興業）と思われ、その会社名からして在日朝鮮人経営の会社であった可能性が高い。北の島でクツが行われていたことを見た会社関係者が、北の島に出入りしていたシンバンに話をもちかけ、工事終了後のプレハブを譲り、龍王宮を開いたのではなからうか。二代目もシンバンであったが、三代目は廃品回収業の高田商店が権利を買取った。高田商店主はシンバンではないため、クツを行う人々から入場料を取って、部屋貸しを始めた。プレハブの建物の一部を廃品回収の従業員の宿舎に使うとともに、東側のプレハブは従業員の宿舎、環状線高架下になる北側のプレハブは事務所として使用した。空地では廃品等の分別を行った。三代目が亡くなった後、その息子さんにあたる宋吉洙氏が高田商店を引き継ぎ、経営されておられたが2009年1月に亡くなられ、その後はお連れあいである韓秀子氏が経営をされていた。三代目のお連れあい、つまり宋吉洙氏のオモニは1940年頃に渡日するまでは、済州島で海女をしていたそうである。オモニのつながりで龍王宮を利用した人も多かったに違いない。

北側の島は1974年までの護岸工事の結果、間の水面が埋め立てられ、島ではなくなり、左岸と一体化、毛馬桜之宮公園の一部として整備された(21ページ参照)。その際に小屋も撤去された。北側の島の小屋で行われていたクツも龍王宮で行われるようになった。さらに1970年代には経済的な余裕を持つようになった1世が増えたこともあり、クツの回数も増え、龍王宮の南側のプレハブの建物が増築されたと思われる。飯田(2002)にも年中行事である1月15日の海を拝む日には150組、旧暦の6月7日、8日の夜通しに海の神を拝む日には200組も訪れた時代もあったという。また、出入りするポサル、スニム、シンバンも40～50人もいたとされる。

その後、1975～1979年頃までに源八の渡しと大川の護岸の間も埋め立てられた。その際に、源八の渡しの際の門柱と鉄柵はそのまま残され、今回、龍王宮は撤去されたが、門柱と鉄柵の一部は残されている。また、船着き場の木製の栈橋の下の階段は残され、その場所が供物を流す場所として使われた。

桜ノ宮駅の南側に通る道路のさらに南側の大川の土手の内面の傾斜地に、朝鮮人の寄せ屋が集まり、「不法占拠」を始めたのも戦後のことであった(24ページ写真下参照)。日本人が大阪府の敷地に勝手に小屋を建て、朝鮮人に売り払ったものである。

おわりに

以上、龍王宮の成立に至るまでの過程を中心に論を進めてきた。異境の地で必死に暮らさなければならなかった朝鮮人たちにとって、一家の収入の安定、家族の健康など、未来への希望を持ち、幸せを願わなければ、心の平安を保つことはできなかったろう。民族差別と女性差別に直面しつつ生活を支えた続けた朝鮮人一世の女性たちにとってはなおさらであったはずである。しかし、「近代化」から疎外された彼女たちにとって、その方法は巫俗的なものに頼るのは必然であったといえよう。また、故郷の習俗に接することも、彼女たちの故郷に対する郷愁を呼び起こし、心の平安を保つことに有効な手段であった。

龍王宮が閉鎖・撤去になった最大の原因は大阪府からの「不法占拠」解消への策動が強まったことであるが、その他の要因もあった。

龍王宮は1970年代後半頃に最盛期を迎えた。渡日1世の女性が子育ても終わり時間的余裕ができたこと、経済的に安定する者も多くなり、自分で自由になる小金をもったことなどが要因としてあげられる。しかし、次第に1世の老齢化の進行、建物の老朽化などで、利用者が減っていったことも要因にあげられよう。

さらに龍王宮の存続が窮地に立たされたのは、「仲間」であるはずの在日同胞からの強い「抗議」

も大きな原因であった。火を燃やしたり、供物を川に流したりすることを、安全上や衛生上、「同じ民族として恥ずかしい」行為であるとし、龍王宮に警察や消防車を呼ぶということまであったという。この構造は本文にも触れたように、戦前と同じものである。権力と闘う人間たちや社会的「名声」を得た人たちにとっては、朝鮮民族への差別を「合理」的に解釈・解決できない存在は足手まといになるどころか、民族差別を増幅させる身内の「敵」と映ったのだろう。また、「近代化」された2世女性たちの多くにとっても、「非合理」なことに「無駄金」を使うことにしか映らなかった。民族差別だけでなく、女性差別にもさらされ、多くは文字も習得できなかった女性たちが「巫俗」という形でカタルシスを得ていたことに想いを馳せることができなかつたのである。

社会から「疎外」された存在は、いつの時代にも少なからずあった。それを強引にマジョリティに同化させることは、根本的な解決にならないことは明らかである。「疎外」された人たちの想いに近づいていくことが、「疎外」された存在をなくしていくことにつながっていくのではなからうか。龍王宮の記憶を残していくことは、我々の重要な課題である。

【参考文献】

- 飯田剛史 (2002) 『在日コリアンの宗教と祭り』 世界思想社。
- 浦原利穂 (2004) 『終戦直後大阪の電車』 ないねん出版。
- 大阪市社会部調査課 (1929)、『本市に於ける朝鮮人の生活概況』。
- 大阪市社会部報告 (1937)、『毛馬・都島両橋間に於ける家舟居住者の生活状況』。
- 大阪鉄道局 (1950)、『大阪鉄道局史』。
- 大阪府 (1910)、『大阪府統計書』 明治四拾貳年版。
- 大阪府学務部社会課 (1934)、『在阪朝鮮人の生活状態』。
- 大阪府公文書館蔵 (1941)、『昭和十六年一月半井知事事務引継書』。
- 京阪電気鉄道 (1960)、『鉄路五十年』。

武田行雄 (1938)、「内地在住半島人問題」、『社会政策時報』 第 213 号、103 頁。

田中寛治他 (1993)、『旧生駒トンネルと朝鮮人労働者』 宇多出版企画。

田村紀之 (1981)、「内務省警保局調査による朝鮮人人口 (1)」、『経済と経済学』 46 号、51-93 頁。

曹奎通 (1991)、「生駒・宝塚の韓寺を歩く (後)」、『済州島』 4 号、24-39 頁。

朝鮮総督府 (1924)、『大正十三年七月阪神・京浜地方の朝鮮人労働者』。

塚崎昌之 (2007)、「一九二〇年代、大阪における「内鮮融和」時代の開始と内容の再検討」、『在日朝鮮人史研究』 37 号、23-52 頁。

塚崎昌之 (2008)、「一九三四年、『協和時代』の開始と朝鮮人一高級住宅街・東豊中住宅開発の朝鮮人労働者の動きから見えること」、『在日朝鮮人史研究』 38 号、31-58 頁。

塚崎昌之 (2009)、「大阪—済州島航路の経営と済州島民族資本—「済友社」・「済州島汽船」・「企業同盟」一」、『在日朝鮮人史研究』 39 号、29-60 頁。

塚崎昌之 (2010)、「戦前期大阪における朝鮮人住宅問題—『不法占拠』クリアランスと共同住宅建設を中心に」、『在日朝鮮人史研究』 第 40 号、91-127 頁。

樋口雄一編 (1991)、『協和会問題資料集IV』 緑蔭書房。

玄善允 (2010)「済州島出身在日一世の習俗の断片」、『コリアンコミュニティ研究』 vol.1.31-35 頁。

榎田一二 (1935)「済州島人の内地出稼ぎに就て」(『榎田一二地理学論文集』 第一部「済州島の地理学的研究」 弘詢社、1976 年所収)。

龍王宮から濟州へ、 そして再び龍王宮へ

—濟州に関する「常識」と「在日二世の信憑」と「村落共同体の構造」—

玄善允

1. はじめに

古今東西を問わず、常識の嘘なんてことは珍しくもない。しかも、調査・研究とはそうした嘘を明らかにすべきなのに、逆にその常識にもたれかかるばかりか、学問的な厚化粧を施して商業的、政治的に利用したりする場合もあって、ますます常識の嘘が膨れ上がったりすることもある。それに体験者や関係者の実感などが重なると、ほとんど神話的相貌を帯びることになる。

のっけから大層な物言いになったが、それは、筆者自身の自戒のためのものであるが、それと同時に本論の展開に重要な意味を持っている。大阪・桜ノ宮の大川（旧淀川）河川敷にあった巫俗祭儀用の貸会場であった龍王宮にまつわる拙文（注1）で、「在日」濟州人1世の習俗と、それに目を背けながら育ってきた2世である己を今さらながらに再確認したが、その一方で、腑に落ちない部分が多々あった。

そこで、1世が生まれ育った濟州へと探索の足を伸ばしたのだが、その過程で、濟州にまつわる「常識」と「在日」2世である筆者の体験的信憑とが相乗作用を起こして成立した濟州像、それを訂正する機会に恵まれた。そこで、その報告をしたい。それは直接的には龍王宮と関係がないように映るかもしれないが、濟州出身「在日」1世の巫俗祭儀のメッカであった龍王宮に関する調査研究に新たな目を要請するはずである。

2-1 三無神話と「在日」的信憑

さて、濟州には「三無」、つまり乞食と泥棒がいなくて、それゆえに門は不要だから、それもないという話があり、「三多」（女、風、石）とセットにされて「観光用に売られ」てもいる。さらには、その三無が、濟州の共同体社会の緊密さを言い募る学問的常識にもなれば、「三無精神の継承」といった形で、伝統と未来をつなぐ標語になったりもしている。

そうした影響は当然のごとく、在日濟州人にも及び、例えば、濟州には門がないという話は在日濟州人2世の筆者にも思いあたる。我が家は日本の大都市大阪にありながら、40年ほど前まで、つまり1970年半ばまでは家に鍵をかける習慣がなかった。帰宅してみると、家のものはだれもないのに、父母の知人や親戚が気楽に座ってテレビを見ている姿に遭遇するといったことが頻繁にあって、周囲の日本人の家とは全く異なっているように思えた。もっとも、実際のところ、その思い込みの真偽など分かるはずがない。筆者は日本の一般的家庭の内部に入り込んだことなどないからである。がともかく、そんなわけで、家に鍵をかけないのは朝鮮人の習慣なのかなと思ったものだった。そして長じて後に、濟州の三無の話を目にし、さらには、現在の濟州でも、そうした習慣が続いていることを目のあたりにした。例えば、濟州在住の筆者の従兄の一人は、今は故郷の村を離れて濟州第二の都市の中心街に暮らしているのだが、その彼の家は昼夜を問わずいつでも開いて

いる。濟州も昔と違ってずいぶん物騒になったと口々に言いながら、いまだにそうなのである。こういう体験や見聞によって、筆者などは「それと知らないままに、日本の大阪で濟州の伝統に則って暮らしていたのだなあ！」などと文化的連続性の感慨にふけり、そのあげくには、濟州の村落の共同体的牧歌性の言挙げに同調したりすることになる。

しかし、その濟州の門がない、泥棒がないを含めた「三無」の実態は本当のところ、どうだったのだろうか。

2-2 乞食がない？

まずは「乞食がない」という話から入ろう。必ずしもその「乞食」とは重ならないのだが、現在のソウルなどではホームレスの人たちが大量に見受けられるのに、濟州では目にすることがない。そんな印象を濟州の人に話すと、昔は今以上に、「乞食」がいなかった、という返事が戻ってくる。

ただし、その昔とは、実は解放つまり1945年くらいまでのことらしく、それ以後は次のような事情で「乞食」があふれることになったという。まずは①外地（島外）からの帰還者の波（人口の3割にあたる人々が一挙に日本その他の外地から帰還した）、次いで②解放直後の凶年やコレラ騒動、しかも③「陸地」と濟州との間の往来は厳しく制限がなされていたから、食糧事情はどんどん深刻さを増したうえに、4・3事件の勃発である。④政府は「北半部からの難民」青年組織である「西北青年団」という右翼の「ごろつき集団」を大量に導入し、政治的に投入・利用した。さらには⑤朝鮮戦争の際に、陸地から大量の避難民が濟州に押し寄せた。こうして濟州は濟州人だけのものではなく、乞食も泥棒も一挙に増えた。以上が濟州の人々の体験談だし、学問的にもそれにお墨付きが付いている模様である。

しかし、甚だ杓子定規な言い方になるが、「増えた」というのは、それ以前にもいなかったわけではないということなのだろうし、しかも、「韓国の他の地域と比べて」という相対的な話の気配

もある。したがって、三無の一つとしての「乞食がない」というのは、あくまで、事態を単純化したキャッチコピーのようなものではと想像するに至るのだが、その種の統計資料がありそうにもなく、即断するわけにはいかない。

2-3 泥棒がない？

しかし、その一方で、「乞食がない」とセットになっている「泥棒がない」については、少なくとも解放後に関しては、明確な反証材料を見つけた。濟州にも泥棒がいたというのである。

濟州の代表的な民俗学者・神話学者である玄容駿^{ヒョンヨン}さんは濟州の民俗、特に巫俗に焦点をあてたフィールドワークの際に自ら数多くの写真を撮っており、それに短文を添えて、『靈』という写真集を刊行されている。（注2）

それを読んでみると、「순막^{スンマク}（巡幕）」なるものの写真数点に遭遇した。それは村の夜回り詰め所のことである。玄容駿さんは、その写真に関していかにも民俗学者的「常識」の知恵を発揮して、次のように記しておられる。

「三無のひとつとしての泥棒がないという濟州にも泥棒がいる。その泥棒はもちろん、その村の人ではない。冬が深まり、食料がなくなると、食料がなくなったほかの村の人が夜にこっそりと麦や粟をくすねていくということがなかったわけではない。そうした泥棒が隣村で起こると、その噂が周辺の村に伝わる。そんな噂を聞くと、村では会議を開き、防犯活動を始めることを決議し、村の最長老である郷長の指示に従って、「순돌기^{スントルギ}（夜回り）」をするようになる。

まずは、各家から木と綱を出し合って、村の入り口の道路わきに、共同作業で穴倉をつくる。この穴倉を「순막^{スンマク}（巡幕）」と呼んだ。そして村の青壮年3、4名で組をつくり、順番を決める。その順番にあたった「순꾼^{スンクン}（当番）」たちは、夜になると、「巡幕」に集まり、火をおこし、寒さを堪えながら、夜も深まると、各家を巡回する。各家に行くたびに、「お休みなっていますか、巡回しています、お気をつけてください」などと大声

で叫び、住民を起こし、警戒心を起こさせた。これを「夜回り^{スントルギ}」という。この「夜回り」を一晩に3回繰り返さなくてはならない。済州の民家は門がないので「当番^{スンクン}」たちが自由に出入りできた。こうした「夜回り^{スントルギ}」は、麦が食べられるような生活水準になると、終息した。」

この写真集に収められている写真は1960年代末から70年代にかけてのもので、その「巡幕^{スンマク}」も既に不要になって壊れかけているものばかりである。だから、1960年代後半にはその種の泥棒はいなくなった、つまり深刻な飢餓は既に昔の話になっていたということになりそうである。

要するに泥棒は特定の村の人々にとっての「外部の者」であり、「村内」には泥棒はいなかった、ということらしい。ただし、その直線上で、牧歌的な済州の村落といったものを思い描くのは慎むべきであろう。自分の村の他人の家に盗みに入るような者は、その村にはいられないし、その一族郎党も、その共同体にはいられなくなるような厳しい規制があったのではといった風に、想像力を働かせる必要があるだろう。現に例えば、漁村契の徹底した相互扶助を称賛する文章の中にさえ、相互扶助と裏表になった厳しい排除のシステムがあったことが窺われるのである。たとえば、こういう記述である。組合員は海女証を発給されると病院で無料治療も受けることができる。組合を脱退したとたんに、海産物を一切取れなくなる。(注3)

2-4 「門がない」起源としての済州神話

では、「現に泥棒がいたのに何故に門がなかったのか」といったように三無の三番目にたどり着くのだが、これについても玄容駿さんは、さすがに足で現場を歩く民俗・神話研究者らしく、生活者の健全な常識と、神話学者としての本領を発揮して、済州神話に起源を求めるといふ仮説をたてておられる。

「済州島では道から家に入って行く路地を「^{オル}례」という。「オルレ」が長ければ金持ちになる、という俗言も伝わる。この「オルレ」の入り口に

は両側に木や石でできた幅広の柱が立てられている。そこには丸い穴が二つ、三つ、さらには4つも開けてある。おそらく元は木で作られていたのだが、長期間もたないので、石で作られるようになったようである。その穴が穿たれた柱を「^{チュン}주목(亭主木)」と言う。最近では木でできたものと石でできたものを区分して、前者を「亭主木」、後者を「^{チュン}주석(亭主石)」と呼んで区別している。

その「亭主木^{チュンチュモク}」の穴には長い木がかけられている。それを「^{チュン}낭(亭木、^{ナム}낭は標準語^{ナム}の済州方言)」、或いは「^{チュン}살(語源不明)」という。その本来の目的は、放牧している牛馬がうろつきまわって家に入ってくるのを防ぐためだったことは間違いない。それが門の代わりとされて、門がないので、済州島の三無のひとつと見なすようになった。

ところで、「亭木^{チュンナム}」を数本横にわたしておけば、牛馬の出入りを禁じるだけでなく、村の人は、主人が家にはいないことが分かるから訪ねてこず、盗人も入ってこないという。だから美風良俗のひとつとして自慢するようになった。ところが考えてみれば、木が数本かけられているからといって入ってこない善良な盗人などいるはずもなく、おかしな話である。そこで、「^{ムン}전(門前)^{ホン}플리(本解、つまり神話)」という巫俗神話を思い起こす必要がある。その神話によれば、ある人物の後妻は、先妻が生んだ7人兄弟を殺す計略が露見すると、逃げようとしたが便所で死んで神になり、父は面目がなく「オルレ」に飛び出そうとして「亭主木^{チュンチュモク}」にぶつかって死んで「^{チュン}주신(牧神)」になり、先母は台所の「^{チュン}왕신(竈王神)」になり、息子達6人は後門神と五方土神になり、賢い末息子は前門の「^{ムン}전신(門前神)」になったという。その神話によれば、「亭主木^{チュンチュモク}」は単純な実用物ではなく神の存在の象徴である。だから、「亭木^{チュンナム}」がかけられていると、神が通行禁止を命じていることになり、「亭木^{チュンナム}」が下りていると出入りが許可されていることになる。だから盗人もこの神の懲罰を恐れて出入りしないということではないだろうか。

また、この「亭木」^{チョンナム}がすべてかけられていると、主人が遠くに行ったしるしで、ひとつだけかけられていると、近所にすこしだけ出かけているしるしというように、通信手段になっていると説明されたりもしている。」(注4)

こうした神話的解釈が真実を言いあてているのか、あるいは、少なくとも学問的常識程度には定着しているのかどうか定かではないので、それについては後述することにして、ここでもまた、筆者の在日2世の経験と符合する部分があるということだけを付け加えておきたい。我が家の祭祀では、いつでも祖先の膳(亡き祖父と祖母の膳)と別途に「門前」^{ムンチョン}の膳を用意し、礼を捧げ、それを片付けてから祖先の膳に拝礼していた。それが何か訳がわからないままに踏襲してきたのだが、老年に差し掛かった今になって遅まきにその謎が解明されて、嬉しい気分になるのである。

2-5 三無についてのまとめ

さてそろそろ、三無についてのとりあえずのまとめをしてみたい。

三無というのは、あくまで「言葉の綾」、つまり、他の地方と比較しての相対的な事実を、単純化あるいは誇張を交えてできあがったキャッチコピーに過ぎないようである。そんなことは端から分かりきったことだと、健全な常識を備えた人なら言うであろう。しかし、少なくとも筆者のような人間にとっては、そんなありきたりの常識にたどり着くのに、こうした面倒な手続きを踏まねばならない。「在日」2世の経験に由来する情動の束縛とでも言おうか。「切実さ」はしばしば、特殊化、最上級の言辞をもたらす。特殊化、最上級化は比較を伴ってこそ意味を持つはずなのに、その前提を欠いたままに独り歩きしてしまうといったことがよくある。「在日」というマイノリティーとして生まれ育ってきた筆者としては、「在日」内部でそういうことをうんざりするほどに経験し、それが肉体化する一方で辟易もしてきたから、アレルギー反応というわけで、反発もついつい激しくなりがちなのである。しかも筆者には、それは

必ずしも在日2世に限られたものではないので、といった感触もある。たとえば龍王宮の「発見」にまつわる人々の対応に、「在日」であるか日本人であるかを問わず、類似の現象の気配を感じないわけにはいかなかったのである。何かを発見し、驚きや喜びを覚える。その後のさまざまな実態調査によって、そうした発見時の驚きに彩られた生き生きとしたイメージには修正がなされて、「散文化」の道をたどるべきなのに、当初に発見した「詩的」イメージの残像が付きまとして実態把握の足かせになる。

もっとも、その程度のことならいつか修正がなされるに違いないのだが、たとえ「三無」がキャッチコピー的な性格を備えていると認識するに至っても、そこに留まるのではなく、それを今一度、広い視覚から見直す必要があるのではないかと、筆者は考えるのである。三無を済州の特殊性に結びつけることが本当に可能なのか、三無は果たして済州独自のものなのかどうか、それが問われるべきではないか。たとえば、韓国の他地域の農村、さらには日本の農村でも、さらには、その他の国の農村でも、ある時期までは三無は当然のことだったのではないかと、そうした問いを一度は発してみるべきではないのか、と。

閉鎖的な村落社会では、外部の者がそこに入り込めばただちに露見する。外部からの脅威に対する防衛機制が浸透している。しかも、それは決して外部にのみ向けられているわけではなくて、内部における相互監視システムとしても機能する。村落内のある家から同じ村の他家に対して盗みを働くような人間が出れば、その家、そしてその血縁者たちの連帯責任が問われるはずで、そのような羽目に陥らないための自己規制、制御システムが発達する。だから、村内部には犯罪者が発生しにくく、戸締りといったこともほとんど必要でなくなる。

では、「乞食」はどうであろうか。共同体的な村では「乞食」が発生しにくい。飲み食いができなくなったものは、例えば、先にも触れたような村の相互扶助システムの恩恵を被るか、それも無理なら、村を出て流浪民となったのではないかと。

したがって、村では「乞食」的な存在があったとしても、可視化されにくい。

といったように、「乞食」、盗人は、閉鎖的共同体内部では存在、あるいは可視化する可能性が薄まる。それはおそらく、古今東西を問わない普遍的な現象で、済州の村落に独自のものではあつたはずがない。要するに、済州の三無は、前近代的な閉鎖的村落構造が長らく残存していたというだけのことではないのだろうか。

だがそれにも関わらず、三無にまつわたる済州の独自性を語るうとするのであれば、済州の前近代的な閉鎖的村落構造の残存の問題として、さらには、そうした閉鎖的な共同体の一つとしての済州の独自性の一環として語られるべきものだろう、ということになる。

3-1 牧歌的共同体？あるいは共同体の階層構造

では、済州の村落の特徴としてしばしば言挙げされる「緊密な共同体」とははたしてどのようなものであつたのだろうか。それについては数多くの言及がなされているのだが、その代表的な語りは次のようなものである。

「100戸程度の^{カキム}共同体。どの家のスプーンの数までお互いに知っていることとされるほどの家族のような共同体。」(注5)

まるで家族のように小規模で緊密な共同体としての村落という指摘である。ついでは、それを必然ならしめた自然条件、そしてそれが済州の村落にもたらした社会構造は、例えば次のように語られる。

「済州島は陸地と比べて、資源が乏しく、資本の蓄積、再生産が困難であつた結果、貧富の格差が少なく、同質的で緊密な共同体が成立していたという。自然と戦うほかならず、そのためにも、超越者に頼る巫俗的生活態度を身に着けていた。朝鮮朝時代に、堂が500、寺が500あつたという記録は、済州人の巫俗的世界をよく説明している。……農地が狭くて土地がやせているという条件もあつて、儒教の影響にもかかわらず、小家

族制度を維持し、農村の営農組織を形成してきた。生産力が低い状況下で家族は生産人口であるよりも消費人口としての意味を担う。したがって、済州社会の場合、長男分家原則に立脚して、家族を小規模化する必要があつた。……」(注6)

ここでは、自然条件に制約されての緊密な共同体の核に、巫俗的信仰の存在が指摘されていることに着目しておきたい。共同体は物理的な必然がもたらしたのだが、その結びつきを支えるものとして、巫俗信仰があつた。

さらには、そうした済州の村落の緊密な共同性は政治的な事情にも根ざしていたことが、次のように説明される。

「朝鮮王朝^{インテョ}仁祖7年(1629年)済州女性は(済州からの)出陸を禁止され、以後250年間、島に閉じ込められて生きねばならなかつた。継続する凶作、過重な進上品、賦役のために、済州人が陸地に続々と移住する現象が生じ、人口が急減するのに対して取られた処置だつた。母や妻、娘である女子を連れていけないように人質とみなしたのである。出陸禁止が実行されていた250余年間、公式的に済州島の外に出ることができた女性は金万徳だけであつた。」(注7)

ここには済州全体が歴史的に強い閉鎖性が明らかなのだが、その閉鎖性は、済州全体のものであると同時に、個々の村落共同体のものであつたことが次のように示唆される。

「歴史的記録によれば、済州社会は官吏の横暴に苦しめられて、それに対する抵抗の努力も強力なものであつた。その際に済州人たちは地域共同生活圏を単位として相互結束する協同的生活体系を形成して外部勢力に対処した。」(注8)

地域共同生活圏とは先ずは各村落と考えるべきで、その集合としての済州全体の共同体という言い方ができるのは、個々の村落同士をつなぐ媒介は何であつたのか、済州全体において、各村落の間にどのような共通の絆があつたのか、そしてそれによって構成されたものに、済州共同体という言葉を使えるのかどうか、を検討した後のことである。要するに個々の村落共同体の連合体としての済州の共同体の論理や構造へ探索の旅をしなく

てはならないのだが、筆者はそうした村落間の関係構造に先だって、緊密な村落共同体の内部の方に舵を取りたい。それについても、たとえば日本に限っても蓄積がないわけではないが（注9）、そうした研究では全く触れられていない側面、いわば死角に焦点を据えて、村落内部の共同性の構造を考えてみたい。

3-2 共同体の下部の存在、「하인（下人）」なるもの

かつて済州の村落には「하인（下人）」と呼ばれる人たちがいたという。筆者の母が一年ほど前に筆者と話しているうちに、筆者が聞いたことも想像したこともないその存在について語り出した。大筋は次のとおりである。

大阪の我が家の近くに暮らしていた済州出身のある人が、しきりに自分の家系が「양반（兩班）貴族」だと自慢していたが、その近隣には母を含めて済州でその人と同じ村の出身者が幾人かいて、その人が村では「하인」と呼ばれる家の人であることを知っていて、陰では笑っていた。

まずは、以上の証言の引用について、誤解のないように釈明しておきたい。まず何よりも、この証言の差別性を看過してはなるまい。こうした証言の引用によって差別を増幅するつもりなど、筆者には毛頭なくて、そうした「差別」があったという事実を確認できる証言として取り上げたのだが、それ以上に、本文全体で、その「하인」と呼ばれた人々が、差別されながらも村落共同体を支えていたというように、その功績を明示しつつ、済州の村落共同性の内実に迫りたいというのが主旨である。後に引用する証言についても同じである。ご理解いただきたい。

さて、初めて耳にした「하인」という言葉が気になっていたところに、前掲の『靈』を読んでいると、その語に関する説明に遭遇した。婚礼にまつわる写真と記述の中で、「豚をつぶす日から村民たちが集まって助けてくれるが、村には共用の하인이いた。하인夫婦はその日からやってきて豚をつぶして準備を急ぐ」（注10）とさりげなく記述さ

れていた。

そこで辞書で調べてみたのだが、大阪外国語大学朝鮮語研究室編『朝鮮語大辞典』（角川書店）では、「下人：下隷の類義語」と記され、下隷をみると、「下人の類義語」と記されている。『朝鮮語辞典』（小学館）では、「下男、下女、召使い」と記され、韓国の辞書でも同様で、はかばかしい進展はなかった。また、参考文献がほかにあるようにも思われず、済州在住の方々に問い合わせてみた。しかし、そんな存在のことなど全く知らないという返事しか戻ってこなかった。それらの人々はすべて50歳以下の方たちであった。後に気づいたのだが、その年代なら、「하인」と呼ばれた人々は既にほぼ無くなっていたのだから、当然のことであった。

だが、辛うじて次のような証言を得ることができた。Kさん、1970年代生まれである。

「私が知っている限り、1960年代～70年代ならそのような「하인」は存在していたと思います。ただしその「하인」は「백정」とはまた違って、彼らを雇う家と昔からある強い関係で結ばれている可能性が高いです。ですが、「하인」という呼び方はしていなかった。済州島では彼らのことを「장남（長男）」という呼び方を聞いたことがあります。つまり家のすべてのこと（農業、牛、馬の世話）を世話したりする。」

ただし、ここで云々されているものが、筆者が問題にしている「하인」と同一のものなのかどうか疑わしい。玄容駿さんの記述では、「村の共用の」とされているからである。だからこの証言を鵜のみにするのではなくて、母の証言や『靈』の記述に現れた「하인」とは別に、「장남」、日本であれば「下男」のような存在が済州の村落にあったというように理解すべきだろう。もっとも、そんなことはその証言に依拠しなくてもある程度想像可能なことだし、辞書の定義にも合致している。したがって、ここでもほとんど前進はなかったということになる。ところがちょうどそんな頃に、テレビを見ていると、韓国の現代ドラマの一場面で、若い女性が恋人である男性に「私はあんたの하인なんかじゃないわよ」とわめいている場面に出

くわした。字幕スーパーでは「下人」とは記していなかったが、それは日本の放送コードによるものなのか、あるいは、字幕の字数制限、さらには、翻訳者の知識の欠如によるものなのだろう。一般に韓国のテレビドラマでは日本ほどには「差別語の禁止（逆に言えば、差別的実態の隠蔽）」が厳格でないようなのだが、しかし、現にそのように差別される階層の人々が存在しているならば、いくらなんでもそうしたセリフが使われるはずもないだろう。したがって、それは今ではなくなった存在を指示する言葉で、実態としては殆ど死語になっているのではなからうか。つまり、インフォーマルな状況で自らの意識、感情を託すコトバとしてのみ辛うじて残っており、それによって社会的に差別を再生産する懸念はないという理解が成立しているのだろう。

しかも、そのドラマでの「下人」がはたして、済州のそれと同じものなのかどうかも疑わしい。僕の印象では、それは上記の「下男、下女」といった含みを持っているもので「村の共用」のそれとは異なりそうなのである。つまり、このドラマのセリフも済州における「^{ハイン}下人」について新たな情報とはなりえないようなのである。

ところが、さらにいるんな方に問い合わせをしているうちに、^{ハイン}「下人」という存在はとっくの昔になくなったであろうという推測を大きく揺るがしかねない証言が現れた。

日本人研究者Iさんは済州の村でフィールドワークをしていた90年代半ばに、下宿していた家の女性に村を案内してもらっていた時に、「あのあたりは下人の住まい」だと村はずれの場所を指し示されたことがあったと言う。

「私が通っている〇〇里でも、集落から少しだけ外れたところに数件の家が固まっていて、彼女がその人を「下人だよ」と言っていたことを覚えてます。そこで、「下人って何？」と聞いたら、「どこか他人の家の仕事でもして食べている人だ」と言っていました。自分のところの畑がないともいっていました。1995年頃の話です。しかし、現在では自分の畑も持っているかもしれません。」

この証言を額面通りに受け取ると、90年代半

ばになっても「下人」が済州の村に存在していたということになる。しかし、その証言は実は幾通りもの解釈を許しそうな気配がある。例えば、「今でも下人たちがその仕事を続けてそこに住んでいる」、あるいは「かつてはあそこに村の下人をしてきた人たちが住んでいて、今や下人の仕事はなくなったが今でも住み続けている」、あるいはまた、「昔はあそこに下人と呼ばれる人たちが住んでいたが、今では空き家になっている」という意味、といったように。

実際のところ、その証言の真意を確認する材料などなくて、済州の一般的な状況を考慮に入れて、筆者としてはとりあえず、昔はあそこに「下人」と呼ばれる人たちが住んでいた、という解釈に信憑をおいたのだが、その後、今回の拙文で以上の証言を引用してもいいかどうか確認のメールを本人にお送りしたところ、Iさんは筆者の信憑を裏付けるばかりか、新たな情報を付け加えてくださった。

「村のなかで家屋が集まっているところから50メートルほど山手に、彼女が指した「下人の家があるところ」があり、そこは3、4軒でした。昨年行ったときも家の数は同じでした。そのうちの1軒の家の女サムチュンとは朝鮮人参畑などに一緒に行ったことがあります。その女サムチュンは少なくとも私のわかる範囲では親の代からその家に住んでいたようです。村にはシンパンの家もありましたね。よく日本へ出稼ぎ^{サムパン}神房をしていました。神房の家の畑にもオモニや近所の女サムチュン達と一緒に「^{インブ}인부(人夫)」として仕事をしにいったことがあります。」

今や消滅したとされているこうした「被差別集団」について記述すれば差別を蒸し返して、再生産しかねないといった懸念もあるだろうから、そうした人々の実態を明快に解き明かしてくれそうな文献資料が容易に見つかるとは思えない。そこで、当座は上記の証言に基づいて頼りない探索を続けるしかないのだが、このあたりで「下人」に関してのとりあえずのまとめを試みることにする。

いつからのことか定かではないのだが、おそら

く60年代、70年代前半くらいまでは、「下人」と呼ばれる人々が各村にいて、村民の共通の下働きに加えて個人の下働きで生計を立て、村民に「下級の人」、あるいはその家族とみなされていた。

これはあくまで想像なのだが、よそから流れ着いて、耕す土地がなく、村のさまざまな行事や個人の雑用の手伝いをして生計を立てていた人たち、言い換えれば、村民共同体の下働きをして生計を立てることで、下から村の共同体を支えていた人たち、ということになるのか。

といったわけで、済州の村の共同体には、通常の村民とは異なる資格で、村を下から支えていながら、村の人々からは異種の存在として認識されていた存在がいたのだから、済州の村の共同体の構造の中に、いわゆる「常民」とは異なる範疇に分類されたその人たちをも組み入れて、その共同体について考えるべきではないか、ということになる。

3-3 村の階層構造とその変化

そんな思いがあったからこそ、ある書物の一節に筆者は直ちに感応することになった。済州の中でも巫俗信仰の厚いことで有名な村の祭祀についての記述である。その大筋は以下のとおりである

その本郷堂でのお祭りでは、信仰民を「上단골 (一般には「店の常連」くらいでよく用いられるが、ここでは日本で言うところの檀家くらいの意味か)」、「中단골」、「下단골」、というように3分類し、いつの時代からその村に住んでいたか、あるいは、村への貢献度などでその位置づけが決まっており、祭の際の席まで厳格に決まっているという。祭りに際しては、その村の創始者の一族の来歴がまず語られ、その一族の祭りという性格もあって・・・

巫俗信仰と密接に結び付いた共同体の内部における厳格な階層システムの存在を示唆している。階層の格差が「陸地」と比べてはるかに少ない平等社会という、それなりに妥当性を持っているに違いない通説に対する微かなノイズともいうべきものである。(注11)

さて、この祈りの場における3分類の中に下人^{ハイン}ははたして含まれているのかいないのか。いるとしたら、どこに位置しているのだろうか。そうした階層付けの外部、あるいは、その下、あるいはまた3階層のもっとも下(下단골^{ナンゴル})であったのだろうか。もしそうであるとすれば、その階層での「常民」と「下人」との関係はどうなっていたのだろうか。

相変わらず、確実なことは何も分からないのだが、ともかく、済州の村あるいは共同体を云々する際には、そうした階層秩序を含めて考えてみる必要を改めて強く感じるのである。

ところで、そうした「下人^{ハイン}」という階層は今ではほとんど痕跡がないらしいのだが、そうした変化の事情に想像を巡らしてみた。

それはおそらく、1970年代後半から80年代にかけての済州の経済構造、社会構造の変化の一環ではないかというのが、当座の見方である。まずは、1960年代には韓国全土に朴正大統領肝いりの「새마을운동 : 新^{セマ}しい村^{ムン}運動」の嵐が吹き荒れ、迷信打破、近代化というわけで、かつての村落共同体の核をなしていた巫俗信仰の聖地である堂が次々に破壊された。当然、その場を生計の中心にしていた「神房^{シムバン}」も大きな打撃を受ける。そして、済州にも遅まきながら貨幣経済が浸透し、なんでもお金で片付く社会が押し寄せる。その過程で「下人^{ハイン}」は、少なくとも村の共用の下働きといった居場所を失う。

その後、その人たち、あるいはその後裔はどうしたのだろうか。村を離れて都市社会に紛れ込んだのか、あるいは相変わらず同じ村に住みながら、今では他の村民と同じように土地を耕したり、漁業をしたり、あるいは、個人の下働きをしているのだろうか。あるいはまた、村に住みながらどこかに働きに出ているのだろうか。これについての証言は上述のIさんのものがあり、そのまま村に留まっているというのだが、自前の畑を持っているのかどうか定かではないし、また、それが済州の村に普遍的な現象なのかどうか判断するには現時点では材料不足である。

4. 下人と심방 (神房)

そこで、少し迂回を試みる。「下人」と同じく、村に必須でありながら「差別」の対象となっていたらしい「神房」も合わせて考えておきたい。

またしても筆者の母に登場してもらおう。錯綜した彼女の話を書きながら要約したのが以下である。

2000年ごろに、生駒の朝鮮寺で知り合いのシムバンに「굿 (巫俗祭儀)」をしてもらいに行ったところ、たまたまクツをお願いにきた人が、その人に対して「神房」と呼ぶと、気分を害して、「今の時代にはそんな呼び方をするものではない。승侶 (僧侶) と呼べ」と随分怒っていた。昔は「神房」は、そんなことを言える立場ではなかったのに。今ではお金をもうけて、格式もやかましく言うようになった。

これはあくまで「在日」の話なので、済州でも同じようなことがあるのかどうか、以下のような質問を済州在住の知人たちに送ってみた。

「神房」という呼称を当地人達が嫌がるというのは一般的なのかどうか、もしそうなら、いつごろからそうなったのか。今でも「神房」が「被差別身分」であることに変わりはないのか。例えば、その家の子がそれ以外の家系の人と結婚するなどのときに障害は残っているのか。以上の質問に対して、先の「長男の存在」の証言者でもあるKさんの返事は以下の通りであった。

「神房」という呼び方は確かに差別語として認識され、神房本人もそのように呼ばれるのを嫌う傾向もあり。でも1990年代から伝統文化、特に巫俗研究が進み、「クツ」などが地方文化財として登録されるにつれて、研究者たちのあいだで巫に従事する人を「神房」と呼び、呼ばれるのが正しいと主張しています。その結果、神房と呼ばれるのを気にしない神房もいます。ただし、彼らと呼ぶとき、ただ「神房」と呼ぶのではなく、その後上の人であることを意味することばかり「오른」を付け加えて丁寧呼びます。つまり「神房오른」ですね。このように研究者と「神房」の間では呼び方がうまく成立しているの

に対して、日常社会では「神房」はまだ差別され、その家系の子ともたちも学校や職場などで、あの人の母は「神房」であるとかという言い方をしながら、微妙なニュアンスを放ちます。」

村にとって必須の存在であった神房にまつわる実に微妙な事情、さらには、共同体と階層構造、差別構造とが絡み合った状況が少しは窺われる。文化財的価値と人々の心性に深く食い込んだ差別意識の共存そして読み直しの実践ということになるのか。

さらには、こうしたしどろもどろの探索行に力強い味方が現れた。1970年代中盤の生まれで、済州の巫俗および神話研究で精力的にフィールドワークをしている研究者である。それまでの筆者の探索の過程を話し、それに答える形で話していただき、多くの謎が解けた。以下では、証言を箇条書きで括弧つきで紹介し、その各々に筆者のコメントを加えることにする。

- 呼称について：「下人」には、他に、用人、奴婢、召使などの呼称がある。一般的には소사 (召使) が中心ではないか。」これは先に引用した呼称に対しての新しい情報を含んでいる。
- 「下人」の消滅について：「各村でかつて下人がしていた仕事を70年代以降は、そのころに作られた青年会などがするようになったこともあって、下人の役割は不要になった。冠婚葬祭の際に、豚を漬したり、その他、共同作業が必要なことは青年会などがしている。つまり村落の近代化の波をうけて、その階層の必要性がなくなったということ。」下人の消滅が済州の近代化、消費社会化に連動していたという筆者の想像の傍証になりそうである。
- 「下人」の来歴と位置：「下人とはおそらく、村に新しく入ってきた人、財産がなくて貧しくて、畑も無い人たちのことで、村の共同の、あるいは村民個人のいろんな用事を引き受けて、なんとか暮らしていた。」筆者の想像と変わらない。
- 「下人」の仕事：「豚を殺したりするというの

は、別にその種の人だけでなく、誰でもやっていたが、冠婚葬祭ともなると、当事者の家族、一族は、不浄になるので、その他の人がする必要があって、そんな人がそれをした。」^{ハイ}「下人」が濟州の不浄観念に関連し、冠婚葬祭の際には、当事者である村民が不浄にならないように、その代理業務を行っていたという新しい指摘である。

- 神房と^{ハイ}「下人」の関係：「^{シムバン}神房」の中には、その^{ハイ}「下人」の役も果たしていた人もいるに違いないのだが、そのことを当人たちが口にすることはしない。^{シムバン}神房も、^{ハイ}下人も、村の共同の役に立つという意味では仕事が重なっていたから、両者が重なるのは当然のことである。ただ、^{シムバン}神房は今や伝統文化の見直しで地位が上昇し、崇められることもあるのに対し、^{ハイ}下人にはそうした上昇の契機がないままに消えてしまって、差別的な感じが残る、まるでそんなものは存在したことがないかのよう^{シムバン}に、だれも口にしなくなっている。」^{ハイ}神房と「^{ハイ}下人」とを一括しての筆者の議論を補強してくれる証言である。
- ^{シムバン}神房という呼称の語源：^{シムバン}「神房の意味は諸説あって、神の刑房（これが一般的な解釈）、その他、神をつかむ（^{シム}つかむという動詞から来ている）など。」^{シムバン}神房の呼称に関する新しい情報である。
- 村の階層構造：「上タンゴル、中タンゴル、下タンゴルなどの区分けは今でも残っているが、村を作った家系を中心に村を運営するという意味で、有力者の家系、あるいは、神が最初に出会い、その村を運営するように命じた家系と言う意味がある。^{ハイ}下人も当然、その下タンゴルの一員である。」先に記した筆者の疑問に答えてくれている。
- 差別感情：「^{ハイ}下人、^{シムバン}神房に対する差別意識は、今でも残っているとさえいえないこともない。」筆者の信憑をほぼ裏付けている。
- 門がない：「三無の一つとしての門がない、ということについて玄容駿さんが神話から解釈しているらしいけれど、それには疑問があ

る。門がないというのは、自然環境がもたらしたのではないだろうか。たとえば、濟州独自の、村道から家までの長い路地「オルレ」は、濟州独特の風を防ぐ意味が強かったのと同じで、家に鍵をつけるにもその材料がないといった物理的な障害の故だったのでは。そもそも村の内部の人間が盗みに入るわけもないし。濟州島にも全く門がなかったわけではなくて、成邑（昔は濟州の行政区画は三つ、濟州城邑、大静懸、そして旌義懸、この後者の中心が成邑であり、官庁と郷校などがあり、今でも人が暮らす民俗村となっている）のように、きちんとした大門を備えている金持ちもいたわけで、その種の家は門と鍵をつける財力もあつたし、大した財力などない村の家とは異なって際立った金持ちだから、命をかけて盗みに入る人間がいたとしても不思議ではないだろうし。」^{ハイ}「門がない」に関する神話的解釈に対する異議である。

以上の証言にいかほどの信憑性があるのか定かではないのだが、現時点では、それを手掛かりにするしかなく、それに依拠すれば、これまでのふらふらした探索に関する当座の結論を導き出せようではある。

^{ハイ}「下人」の位置については、ある程度の推測ができるようになった。^{ハイ}「下人」の消滅に関しては、不浄観念と祭儀の際の禁忌に関わっており、近代化の成果として出現した村の青年会組織などがその役割を受け継いだ。^{シムバン}神房と^{ハイ}「下人」に対する差別感情は残存しており、それが故に、隠蔽されているなどである。

その結果に一定の満足を抱えて、それを再確認するためにさらに数人に尋ねてみると、付加的な情報が得られた。

まずは、1950年代半ばに濟州の海岸村に生まれ育った方である。

^{ハイ}「下人という存在は聞いたことがあるけれど、自分の村では、むしろ^{ヨンガム}「영감（令監）」と呼んでいた」。新しい呼称である。

次いでは、1940年前後に濟州で生まれ育ち、

濟州の巫俗、伝承文学、濟州文化論などに関する著作もある小説家で、1980年頃以降はソウル在住の方の証言である。これについても、証言を箇条書きの括弧つきで紹介し、筆者のコメントをつける。

- 「^{ハイン}「下人」は公的な呼称ではないから、様々なバリエーションがあって当然なのだが、それにしても、^{ヨンガム}令監というのは、普通は偉い人というのだから、理解に苦しむ。」これは時代と地域の差というもので考えるしかない。ひょっとすると、令監というのは、^{ハイン}下人という言葉につきまとう差別感を緩和するための、一部の村での工夫の産物だったのかもしれない。
- 「^{ソサ}召使というのも、聞いたことがない。」これは、証言者の濟州時代がほぼ80年代くらいまでなので、その後一般化したのかもしれない。或いは地域的な差異なのかも。あるいはまた、^{ハイン}「下人」につきまとう差別感の緩和のためという先の想像と同じ範疇のものかもしれない。
- 「少し話はそれるが、「クッ」を濟州の文化の根という言い方には違和感がある。濟州の文化は複合的で多様であり、その一つとして巫俗信仰があるが、それが伝統文化の復興の流れで脚光を浴びるのはいいのだが、それが度を越して濟州の文化伝統の根というように言われると、甚だ一面的で、違和感が否めない。」これは証言者が熱心なキリスト教徒であること、また韓国文化全体を相対化しようという証言者の志向性のもたらすものかもしれない。証言者はその作品で、濟州の土俗性をしばしば活用しているのだが、その一方で、濟州の多様性への着目の故に、伝統復活の運動に見られる伝統の神話化としての巫俗信仰に違和感を抱いているような気配がある。

といったわけで、ある程度先が開けたと思うと、またしても新たな障害が浮かび上がる。あるいは、信憑の一部が瓦解するといった按配なのである。証言は、証言者の世代、居住経験の年代、出自、

経歴などの多様な要素が絡み合って相互に大きな差異があって、その検証・総合には道遙か遠し、というのが筆者の現状なのである。

5. まとめに代えて

いまだ何一つ確たるものはない。しかしその一方で、この先に立ちほだかる問題の輪郭だけは浮かび上がってきたので、それだけでも成果だと見栄を切るしかない。

まずは、最低限の前提作業として、以下のようなことを肝に銘じる、あるいは、調査すべきであろう。

1. 差別の助長、再生産になりかねないことを絶対にしない為の細心の配慮の必要性、そのための工夫。
2. 朝鮮の被差別民である白丁解放の歴史と^{ハイン}「下人」、^{シムバン}神房との関係の有無。
3. 陸地における^{ハナム}「下男」と濟州の^{ハイン}「下人」との違い。濟州における^{ハイン}「下人」の位置とその変遷。
4. 陸地と濟州の村落の関係構造の差異
5. ^{シムバン}神房（巫堂）の個々の村落における位置
6. 村落における人間関係の構造の歴史的变化
7. 日本における被差別民、そして昔の^{ハイン}下人の位置と濟州の^{ハイン}「下人」との相違。

それ以外に、今回の探索の過程で今さらながら気づいたことは次のようなことである。

8. 証言の検証の問題：あまりにも当然のことだし、既に述べたことなのだが、この種の事柄については特に世代や育った集落によって証言に大きな差異があるということを前提にして、証言者の世代、生まれ育った地域、職業などの属性に鑑みて、得られた証言の意味を厳しく検証する必要がある。
9. 歴史的限定の問題：濟州の共同体にまつわる議論には、歴史的な限定が希薄な印象が強い。濟州のいわゆる共同体なるものが、果たしていつまで続いていたのか、その時期区分が甚

だ曖昧なままに「済州の共同体」なるテーゼがひとり歩きしているといった気配さえもある。尤も、いくつかの時代区分がなされていないわけではない。一つは、日本の植民地化、つまり1910年頃を、或いは、解放を、さらには、1960年代の朴政権の近代化政策の浸透が一応の画期とされているが、おおむね、この最後のものが暗黙裡に前提とされているようである。つまり、植民地化による統治の効率性の要請から行われた一定の近代化、そして解放以降の主権国家による近代化にも関わらず、済州の村落の共同体は大きな影響を受けずに1960年代後半まで生き延びたとされている。共同体の中核にあった巫俗信仰が急速に廃れたのもその時期だったから、そうした時期区分には一定の信憑性が認められる。

しかし、日本の植民地統治下では、それ以前の封建王朝支配下とは異なった近代的な行政システム、教育システムの浸透があったから、それが村落の共同体に影響を与えなかったはずはないのだが、そのあたりについては詳細な研究を見つけられなかった。心性にまつわる研究調査というものは、事件性を中心にした歴史記述と異なって、比較的長期のスパンが要請され、それだけに茫洋とした印象が付きまとうのは致し方ないという側面もあるのだろう。しかし、筆者が見るところでは、むしろそれ以上に重要なのは、共同体を云々する際の姿勢の問題ではないだろうか。姿勢とはつまり、運動的側面のことを言っている。済州では4・3事件以降、現在の海軍基地問題に至るまで、激しい軋轢の種はつきず、そうした状況下で、済州全体の連帯の絆を探し出し、辺境でありながらその独自の文化を維持発展させると同時に、それを資源として経済的な上昇を図るのに恰好のスローガンのものとして、いつかあったに違いないとされる緊密な共同体が持ち出されるといった傾向があるのではなからうか。そうした「運動」

の意図はよしとしても、もう少し歴史的限定を施す努力なくしては、内容空疎なスローガンに化してしまう懸念がある。

といったわけで、筆者の探索は「ないものづくし」に加えて「腰砕け」が明らかなのだが、最後にこうした頼りない探索を反面教師として参照しつつ、龍王宮について少しばかり考えてみたい。

まずは何よりも相対化の視点を徹底する必要を痛感する。済州の緊密な共同体なるものを相対化することなしに、その独自性が明らかにならないのと同様に、龍王宮での祈りを、「在日」の巫俗祭儀の多様性の中に、さらには、その巫俗祭儀を「在日」の「祈り」一般の中に位置付けるばかりか、その「在日」の「祈り」を「在日」の歴史総体に位置付ける作業が必須ではなからうか。

例えば、「在日」の巫俗祭儀が最盛期を迎えたのは、70年代、80年代であったようなのだが、1世の渡日からは既に25年以上の時を経ており、故郷で親しんだ信仰を持ち込んだという因果関係だけでは、そのタイムラグが説明できないのである。もっとも、それを個々人のライフサイクルとの関連で説明している例もある。1世の女性たちが一定の年齢になり、子どもも手を離れ、少しは余裕ができるようになって、それを始めた、あるいは盛んにしだした、といったように。そしてそれはなるほど、事態の一面を言い当てていると筆者も同意しはするが、それだけではやはり合点がいかず、そうした巫俗信仰の一時的なルネッサンス現象を、「在日」総体の内面の歴史の変動、そして上記の個々人のライフサイクルという二つの関数とに関連づけたい誘惑にかられるのである。というのも、60年代には、「在日」の精神史が大きく動いたという経験的な信憑があるからである。

既に拙文でも触れたことがあるのだが（注12）、筆者には、「在日」の聖なるものは、1960年頃までは政治的運動、とりわけ左翼的民族解放運動の潮流が代替していたように思えるのである。1960年前後にその最大で最後のイベントと言うべき「祖国帰還運動」が繰り広げられた。し

かし、それは在日の祖国に対する幻想からの覚醒をもたらす厳しく悲しいイベントだった。民族解放、独立、統一といった熱気の中に吸収されていた「個々人の祈り」は、その幻想の虚妄性が明らかになるにつれて、束縛から解き放たれ、噴出する場と時とを求める状態になる。その一つとして、1世の女性たちは、まるで先祖帰りでもするように巫俗信仰に祈りの場を見出していった、これが筆者の描く経路なのである。1960年代から1970年代にかけては、日韓条約の締結、その延長としての誘導・強制の結果、朝鮮籍から韓国籍への大量変更があり、ある側面では近代主義的でありながらその一方で儒教的教条主義の色濃い朝鮮総連の影響力の著しい弱体化が表面化した。また、他方では、入管法反対運動の盛り上がりに見られるように、「在日」の権益擁護運動があり、民族差別と闘う運動があり、いわば「祖国」とは一定の距離を置いた「在日」を生きるという方向性が明確に形を現した。そうした政治的変動と運動した内面の変化と巫俗信仰の盛行とが無関係とは思えないのである。それにまた、その時期には、長年許されなかった祖国往来が始まるばかりか、常態化し、故郷の人々の巫俗祭儀を目にしたことを契機にして大阪の地でのそれに合流を始めたという人もいるに違いない。

もちろん、ほかにもさまざまな要素があるだろう。既に述べたように、世代、年齢である。オールドカマー1世は70年代には、50歳を越え、子どもが手を離れた。また60年代の高度経済成長は、少し時間的なずれを伴うが、「在日」にとっても経済的な上昇の契機となって、経済的な余裕が少しは生まれだす。こうして、個々人にとっての悩み、苦しみが「再発見」される。経済的貧困状況での生き抜くための戦いから、大小さまざまな心配事に女たちの思念は向かう。そしてそれと連れ立って、彼女たちの抑圧されてきた個人的な生の奪還といったことも表面化する。巫俗信仰と彼女たちの夜間中学通いとは、方向はまるで正反対のように見えるだろうし、少しの時期のずれはあるけれども、ほぼ同時に盛行するのである。文字を読み書きできない「^{ハン}恨」、それが近代、前

近代と正反対の文化の産物である両者である程度は満たされる。妙な言い方になるが、日本の高度経済成長が「在日」の巫俗祭儀の盛行をもたらすのに寄与したと言えないこともないのでと、筆者には思えるのである。

そうした多様な方向からの「在日」の精神的見取り図が描かれれば、「在日」の巫俗信仰の輪郭ももう少し鮮明になるのではないか。逆に言えば、後者が前者を照らし出すということにもなる。

そうした見取り図を描くために、いくつかの実践的な方法がある。ひとつは、朝鮮総連、あるいは「在日」組織と巫俗祭儀との関連である。そうした民族組織の積極的な運動家たちが巫俗祭儀をしていたとは思にくいだが、濃淡の差があれ、その影響下にあった人々の巫俗祭儀への対応の変遷に関する証言を収集すれば、先に述べた、「在日」を取り巻く社会変動によって、政治的運動から個的（あるいは家族）救済の祭儀へといった筆者の図式の真偽がある程度は検証可能であるに違いない。

もう一つは、これまでには注目されてこなかったようだが、巫俗信仰に距離を置いたり、嫌悪したり、唾棄していた1世女性、そしてその後裔の証言に着目することである。彼ら彼女らは、何故そちらに向かわなかったのか。「大宗教」に向かったり、日本の数々の新興宗教に向かったり、あるいは、社会的上昇をまるで信仰のように抱えたりと、その方向は実に多様なのだが、それらの視点から、「在日」1世の巫俗信仰の位置を見定めることが可能なのではないだろうか。それは同時に、巫俗信仰に向かわなかったそうした人々の「祈り」の意味をも照らしだすかもしれないのである。

最後にもう一つ、「在日」2世である筆者に直接関連することである。今後は証言の収集は主に2世以降に限られてくるだろうが、その際に、その証言の限界性に対する認識をしっかりとっておく必要がある。筆者の済州における調査でもそうであったが、とりわけ「在日」の巫俗祭儀については、今後はさらに、当事者の証言を得ることが難しくなるだろう。但し、それが致命的な欠落と

いうのではない。そういうことを言いだすと、研究など成立しない。したがって、当事者でない人々の証言をいかに限定的に理解して活かすかという問いを立てるべく努める必要がある。その際に、当事者に最も近いという資格は当然のごとく2世ということになるだろうが、その2世の巫俗信仰に対する愛憎という要素を視野に取り込んでおく必要があるだろう。証言はいつだってそうなのだろうが、巫俗祭儀に関する2世の証言は決して客観的なものではない。たとえば、2世である筆者の目は体験による歪みを否定しがたい。それを今回の頼りない探索ばかりか、龍王宮プロジェクトに関わりながら、いまさらながらに痛感した。しかし、今後の龍王宮その他の「在日」の精神史の探索にその歪んだ目でも一助なるとしたら、それにしっかりとした限定をつけたうえで、積極的に活用しない手はないのである。筆者は今後、それらを他ならぬ自分自身の問題として、その探索の一翼を担っていきたいと念じている。

注

注 1: 玄善允 (2010) 「済州島出身在日一世の習俗の断片」『コリアンコミュニティ研究』vol.1、こりあんコミュニティ研究会、31-35 頁

注 2: 현용준 (2004) 『靈』、각、49-51 頁

注 3: 유덕상 (2009) 『제주여성 문화유적 100』 제주발전연구원、155 頁

注 4: 현용준 (2004) 前掲書、77 頁

注 5: 현용준 (2004) 前掲書、33 頁

注 6: 済州道教育研究院 (1994) 『済州의 書堂教育』、済州道教育研究院、12 頁

注 7: 제주발전연구원 (2009) 『제주여성사』 1、 제주발전연구원、298 頁

注 8: 済州道教育研究院 (1994) 前掲書、12 頁

注 9: 伊地知紀子 (2000) 『生活世界の創造と実践—韓国・済州島の生活誌から』、御茶ノ水書房、263 頁。

注 10: 현용준 (2004) 前掲書、120 頁

注 11: 유덕상 (2009) 前掲書、250 頁

注 12: 玄善允 (2004) 「書評、飯田剛史著『在日コリアンの宗教と祭り—民族と宗教の社会学—』、『アジア・フォーラム』27号、大阪経済法科大学アジア研究所

付記

済州島での調査に関しては、その経費の一部を大阪経済法科大学アジア研究所研究部会費から援助して頂いた。また、調査滞在に関しては、済州大学校耽羅文化研究所の許南春前所長、安幸順氏をはじめとする皆様方に過分な便宜を図ってもらった。さらに、済州伝統文化研究所の朴京勲理事長、研究所機関誌編集長の高暎子氏には、資料・情報提供などで多大な協力を頂いた。末筆ながら記して、謝意を表したい。



龍王宮プロジェクトで書かれた文章

チエヂェド 済州島出身の女たちの 祈りの場・桜ノ宮「龍王宮」

— 遠からず姿を消す在日朝鮮人の心の拠りどころ —

藤井 幸之助

本誌『書評』は年二回の発行のため、前号とのつながりをつけようとしつつも、新たにいろんなことが起こってきて、ついついそちらにひっぱられてしまう。

ということで、今回は今春、新たに知ることになった立退き問題(大阪市桜ノ宮「龍王宮」)とそれに対する取り組みについて紹介したい。

いつになったら御旅町の「もみの木保育園」に帰り着くだろうか？

ちなみに、前回紹介した東淀川区西淡路「チロリン村」の朝鮮人飯場街は現在、解体が進み、間もなく跡形もなくなる。立退きの理由とされた、二〇二二年度完成を目

指していたJRおおさか東線(放出・新大阪)は用地買収などが難航し、二〇一八年度末に再延期となった。

女たちの祈りの場「龍王宮」に立退きの危機

一〇〇年の歴史を持つ在日朝鮮人は日本社会から異民族・日本国籍を持たない者として排除されてきたが、在日朝鮮人社会では女たちは男たちから疎外されてきた。儒教的祖先崇拝のチエサ(祭祀/祭事)が男の文化だとすれば、クツ(天・養神)は女の文化だ。身にふりかかる不幸や恨みをこらいつた場所で晴らそうとした。

「龍王宮」はJR環状線桜ノ宮駅の大阪寄りホームの

西側、大川(旧淀川)にかかる鉄橋の下に当たる河川敷(桜之宮公園内)にある。大阪に暮らす済州島出身者の女たちの祈りの場として長く営まれてきた。現在の住居表示は大阪市都島区中野町四一五十八。一九二〇年代頃からここにあり、建物ができたのは解放後(戦後)のようである。現在何棟もあるアレハアの建物が貸し室として利用されている。基本的には部屋の中には何も無い。祈りをする際に飾りつけをし、祭神を置く。敷地内には高田商店という再生資源集荷業が併設されていて、一時

期は従業員が一〇人以上いて、寄宿舎にすんでいたという。現在も営業中で、従業員が一人住み込んでいる。

ここは在日朝鮮人の女の文化や民間信仰が奇跡的に残されている場所といつてもいい。一九八〇年代の最盛期は毎日のようにクツがおこなわれ、一世が少なくなった現在でも週二、三回おこなわれている。そこが「不法占拠」を理由に、時期ははっきりしないが、近々立退きになる。法律的にみた場合、裁判しても勝ち目はない。

一九八二年に父親から管理人を継いだ宋吉夫(高田義男)さんは、これまで何度も河川敷を管理する大阪府の治水事務所から立退きを言われてきたが、条件が合わず、感じなかった。今年一月に吉夫さんが亡くなったことで、大阪府は遺族に対して立退きをせまってきた。吉夫さんは生前、家族には龍王宮についてあまり語らなかったという。遺族は事情がよくわからない状態だが、歴史ある宗教施設だけに、あつさり立退きに応じられない。

江戸時代、朝鮮通信使は大川(旧淀川)を通り、京都を経て、江戸へ行った。現代になって、大川の両岸には「不法占拠」状態で暮らす人々が多くいた。時代とともに景観の変化があつただらう。一九八〇年代初頭でも五〇〇人ほどが暮らしていた。朝鮮人も多く、毛馬開門から下流では砂利採取も盛んに行われていた。すぐ下流に



【写真1】現在の龍王宮を大川対岸から眺める。(2009年4月筆者撮影)



【写真2】 龍王宮の南側から撮影したもの。環状線の鉄橋を電車が通るたびにすごい騒音がする。
提供：飯田剛史（1989年2月12日撮影）



【写真3】 高田商店の看板は「応募 素私（ママ） 証あり 古紙 ○○ ○○ 其他 一式 KK高田商店」と読める（○の部分には白く塗られている）。この当時はまだ環状線の電車の中からもよく見えた。
提供：飯田剛史（1989年2月12日撮影）

パンを呼ぶと音が大きすぎて、近所迷惑になることから、生駒山系にある韓寺や龍王宮のような場所でおこなうことがおおい。また、山でおこなってから、水辺に移っておこなうこともある。

龍王宮は龍を名称の一部にしているが、祭神は龍である。龍王宮の場合、重要なのが水辺にあるということだ。それは故郷の済州島の海にもつながっていることを指す。クツを終えた後、お供え物を燃やしたり、水に流したりする場所が必要なのだ。



【写真4】 龍王宮にて。「クツの光景。あらゆる不幸から解放されるシャーマンの儀式である」（写真：森昭）
出典：梁石日著「魂の流れゆく果て」 2001年刊・光文社

は貯木場もあった。

一九八二年から大阪市・大阪府・国が共同事業としてクリアランスにとりくみ、住民の府営住宅への斡旋も行った。立退き裁判も集団ではおこなわれず、個別におこなわれ、すべて住民側が敗訴した。現在も再生資源集荷業者が龍王宮より下流に何軒かあるし、上流の都島橋のたもとには朝鮮人集落も残っている。その中の一つが龍王宮である。河川敷にあるため、台風や大雨の時に冠水したりすることもあるという。

龍王宮をより知るために

生野区に行く立ち並ぶ民家のそこそこに出（まんど）のマークを掲げたところがある。そこには朝鮮シャーマニズムと仏教・修験道などが習合した韓寺（朝鮮寺）があり、お祓い・占いをしてくれるシンパン（神房／じんぱん）（済州島）・ムタン（巫堂／むどう）（半島郡）がいる。お祓いをしたい者はシンパン・ムタンに依頼し、自宅が、そこか、それ以外の場所（韓寺や龍王宮など）でクツをおこなってもらおう。クツを行うときはボサル（菩薩／ぼさつ）と呼ばれる人が朝鮮の打楽器を打ち鳴らす。短いもので数時間、長いものになると泊りがけで、三日とか一週間以上もおこなわれることもあるという。自宅にシン

また、龍王宮をめぐる人々のネットワークにも注目しなければならぬ。母親について龍王宮に何度か行ったことのある玄善九さんは次のような指摘をしている。

「余談になるが、そのおばさんたち（引用者注：龍王宮の利用者の女性たちが後の母の夜間中学のクラスメイトにもなるし、そもそもそのおばさんたちの誘いもあって、母は夜間中学に通い始めたはずである。ということ）は母にとっては、夜間中学はこうした大川の龍王宮を含めた済州島ネットワークの付き合いの延長上にあつたということになりそうである。このネットワーク、いろんな意味で、面白いし、文字の読めない一世の女性たちにとっては、いろんな情報がそこから得られるわけだから、すごく重要なものである。」玄善九「済州島出身の在日二世から見た、在日の卑い形、或いは、習俗に関するメモ」（未刊行、四月四日）

また、一九七〇年代頃の龍王宮について、次のように証言している。

「その現場は河川敷から一〇メートルばかり離れた島にあつて、河川敷の水際と離れ島の水際の両方に竿がたてかけられてあり、それらの竿が紐で結ばれている。河川敷の竿を振ると、離れ島の竿に伝わり、小舟が迎えにやってくる。母はその船に乗り込み、僕が抱えていた包

みを受け取り、「もうええから、あんたは帰り」と言っ
て向こう岸へ向かう」(玄善允「在日二世から見、濟
州島出身一世の習俗の断片」【龍王宮祝祭】配布資料)

このような記憶の断片を集めることがいま必要だ。今
はまだ詳しくはわからないが、龍王宮をより知るために、
関係者の話を少しずつつないでいって、全体像に迫りたい。
本国とは違う形で継承される、大阪における濟州島
出身の在日朝鮮人の有形・無形の文化財として、龍王宮
をとらえることはできないか考えている。



【写真5】中央が龍王宮。環状線の鉄橋の北側が
小島が見える。現在は埋め立てられて
公園になっている。
国土地理院空中写真 (1961年6月19日)



【写真6】龍王宮での第5回定例研究会(7月19日)
の様子。ここがまさに祈りの場である。
(筆者撮影)

住の作家元秀一は小説「猪飼野物語—濟州島からきた女
たち」(一九八七年刊・草風館)の中で「龍王宮」を登
場させ(この小説を原作として、NHK大阪放送局が一
九九〇年五月に放映したスペシャルドラマ「李君の明日
(脚本:田中晶子・九〇分)で、オモニ役の李礼仙(現
在は麗仙)が龍王宮でクツを上げてもらうシーンが出て
くる)、大阪市生野区出身の梁石日は「魂の流れゆく果
て」(二〇〇一年刊・光文社)の中で、若い頃、オモニ
のお供で龍王宮へ行ったことを書いている。学術研究で

「こりあんコミュニティ研究会」と龍王宮の接点

今年三月に、大阪市立大学都市研究プラザの日本人・
韓国人の教員・研究員・大学院生を中心として、「こり
あんコミュニティ研究会」が結成された。筆者も運営委
員として参加している。目的は「こりあんコミュニティ
における生活と文化への理解を高めつつ、当該地域コ
ミュニティの再生のあり方について議論しながら、日本
国内に限らず共同調査及び研究を行っていく」としてい
る。在日朝鮮人コミュニティへのフィールドワークを中
心に、活動を行っている。

メンバーの一人がひよんなことから龍王宮の立退き問
題を知ることになり、まずは龍王宮に足を運ぶことから
始めようと、龍王宮の協力を得て、四月の第二回定例研
究会から毎月、龍王宮を会場に、だれでも参加できる研
究会を開いている。龍王宮を知るための具体的なアク
ションを考えている。

これまで龍王宮については、地元都島区の郷土史はも
とより、在日朝鮮人史の中でもほとんど記録されずにき
た。なぜか。在日朝鮮人史の中でも女の営みであったか
らか?

参考にできるものが本当に少ない。大阪市東淀川区在

は宗教社会学の会編『生駒の神々—現代都市の民俗宗教』
(一九八五年刊・創元社)が最初だろう。これからの蓄
積が必要だ。

「水都大阪2009」

「淀川改良工事竣工二〇〇年」を迎えた今年、大阪府
と大阪市は八月二日から一〇月二日にかけて「川と
生きる都市・大阪」をテーマにして、「水都大阪2009」
という一連のイベントをおこなっている。キーワード
は「連携・継承・継続」、基本コンセプトは「水都
大阪の魅力を生み出し、世界に発信・市民が主役となる、
元気で美しい大阪づくり・開催効果が継続し、都市
資産や仕組みが集積されていくまちづくり」という。

大阪市長の平松邦夫さんを会長に「水都大阪2009
実行委員会」をつくり、構成団体として、経済産業省近
畿経済産業局・国土交通省近畿地方整備局・国土交通省
近畿運輸局・大阪府・大阪市・(社)関西経済連合会・
大阪商工会議所・(社)関西経済同友会・(財)大阪二
世紀協会・(財)大阪観光コンベンション協会が名を連
ねている。「市民が主役」とはほど遠い。

気になる予算だが、大阪府は二〇〇八年度一億三千万
円・二〇〇九年度一億七千万円、大阪府も同額の三億円、

それに大阪の経済界から協賛金三億円、計九億円の事業規模だ。経済的にも、政治的にも、文化的にも地盤沈下の激しい大阪で、起死回生を狙ったものなのだろうが、莫大な金を使って果たしてその効果はあるのだろうか？

日本人だけが川とともに生きてきたわけではない。ここには、済州島出身の在日朝鮮人の故郷につながる水辺で大阪の文化をともに育んできた龍王宮のことはまったく抜け落ちている。龍王宮自体、在日朝鮮人が育んだ、まぎれもなく大阪の文化のひとつである。

なぜ、大阪市・大阪府は在日朝鮮人と「連携」しようとしませんか？ 予算もない中で龍王宮の研究をしようという私たちには税金の無駄遣いにしか見えない。



【写真7】「水都大阪2009」を宣伝する初期のチラシ。大阪市長と大阪府知事が少々オオママスな顔を映っている。

龍王宮祝祭

「もうひとつの「水都大阪2009」の開催

八月二日(土)に、こりあんコミュニティ研究会とコリアン・マイノリティ研究会主催で、「龍王宮祝祭—もうひとつの「水都大阪2009」—と題して、大阪リバーサイドホテル・桜之宮龍王宮・桜之宮公園を会場に、三部構成の催しを行った。偶然だが、官製の「水都大阪2009」の初日と同じ日になった。「もうひとつの」



【写真8】「龍王宮祝祭」リレートークで、済州島四・三事件のつらい経緯を語ってくださった金時鐘さん。(筆者撮影)

ちなみに、今年六月に「大阪なるほど再発見—なにわなんでも大阪検定」が始まった。橋爪紳也編「大阪の教科書—大阪検定公式テキスト—」を見ても、大阪をつくるのに大いに貢献した古代の朝鮮からの渡来人や近現代の朝鮮人についての言及はほとんどない。

私たちの力不足を痛感する。

「水都大阪2009」開催趣旨

「私たちの大阪は、東に遡る川筋によって、大和と、そして京の都と結ばれていた。西に伸びる海路は、瀬戸内を經由して全国の港と、さらにはアジアとの交流を約束した。

難波津の時代、「天下の台所」と呼ばれた江戸時代、そして「東洋のマンチエスター」と称した近代に至るまで。縦横に開削された堀川から、どれほどの恩恵を私たちが受けたのか、はかりしれない。(中略)

川の存在は人々の活動を豊かにし、新しい都市景観を創出し、産業・文化を創造する。川と人の強い絆を取り戻すことから、大阪の都市再生は始まる。

「水都大阪2009」は、都市再生の成果を伝えると同時にまちづくりの起点となる、美しい「水の都」の復興をひろく伝える市民協働のプロジェクトである。」

(「水都大阪2009」ホームページより)

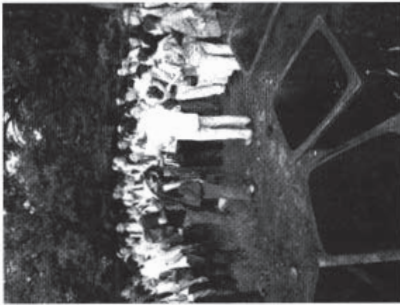
としたのはもちろん「水都大阪2009」を強く意識してのことである。

研究会からの趣旨説明、龍王宮の先代の管理人の娘で、あとをつぐ宋良恵さんのあいさつに続いて、第一部として、在日一世をうたう歌をたくさん作り、デビュー三〇周年をむかえたミュージシャンの朴保さんがミニライブで龍王宮祝祭にふさわしい選曲で歌を歌ってくださった。つづくりトークでは「大阪の済州島人と龍王宮」をテーマに、一九八〇年代に龍王宮を調査した宗教社会学者の飯田剛史さん(大谷大学)、在日二世としてオモニのお供をして龍王宮へ通った経験のある高正子さん・玄善允さん、最後に済州島四・三事件で親族を虐殺された金時鐘さん(詩人)のお話をうかがった。第二部として、在日朝鮮人の歴史に詳しい塚崎昌之さんの解説を聞きながら「龍王宮」をフィールドワークした。第三部は龍王宮の北側、桜之宮公園内特設ステージで、中川真さん(大阪市立大学)率いるパフォーマンス集団による野外ライブをおこなった。ガムランの演奏を中心にして、舞踏や詩の朗読という、龍王宮とは一見何の関係もない即興的コラボレーションであった。

そこここで参加者同士の新たな出会いがあり、民族や国境を越え、人としてのつながりの可能性が感じられた。

龍王宮は「迷惑施設」？

龍王宮祝祭が終わってしばらくして、六年前から対岸のマンションに住むという男性から電話をもらった。当日の朝の新聞で龍王宮の記事を見たということだった。「一日に三回もお供え物を燃やすことがあり、窓を開けていると臭いがきつくて大変迷惑している。時間も朝昼晩問わずやっている。炎が高く上がることもあり危険だ。これまで何回も公園管理の部局や消防署に連絡したが、宗教儀式の一環なのでどうしようもないと言われた。催しにも参加しようと思ったが、行くと苦情を言つてし



【写真9】【龍王宮祝祭】で塚崎昌之さんの解説による「龍王宮」フィールドワーク。手前はお供え物などを燃やすのに利用されるバススタブ。(筆者撮影)

まいそうなので行かなかった。黒煙も上がっているので、有害なものも燃やしているのではないかと。人の迷惑も考えてほしい。同じ同胞としても恥ずかしい。宗教行事というのはわかるので、常識の範囲でやつてほしい。民団にもお願いしようかと思つたが、もうすぐなくなるといので我慢はする」といような主旨であった。

二〇〇七年二月に、龍王宮のある環状線桜ノ宮駅のガード下で火災が発生したことがある。このため、環状線は一時運行をストップした。

しかし、こんな話もある。毎年七月下旬におこなわれる「天神祭」の際には花火が打ち上げられる。龍王宮は花火を見るにはまさに絶好の場所で、ここ何年か、龍王宮が場所を提供して、近くの特別支援学校の生徒たちが教員の引率で花火を見に来ていたという(宋良恵さん談)。

役所にはたびたび周辺住民から「ゴミを捨てている」「火をたいている」「きたない」「危ない」という苦情があるそうだ。龍王宮を「迷惑施設」のようにとらえられている。これまで周辺住民との交流がほとんどなかったことや龍王宮がどのような施設であるかを知らずにいることも関係していると考えられる。まずは知ることが必要だと感じた私たちは、【龍王宮プロジェクト】を立ちあげることになる。

【龍王宮プロジェクト】参加者・アイデア募集中！

私たちは二〇一〇年の「韓国併合」一〇〇周年を前に、【龍王宮の記憶を記録するプロジェクト】として、【龍王宮祝祭】ほか、宗教学・歴史学・社会学・地理学・建築学・言語学など、学際的な知を結集して、一連の取り組みをおこない「龍王宮」の歴史やここにある意味を知つて、多くの人に伝えていきたいと思つている。これまでの取り組みの中で少し誤解があつたようだが、【龍王宮プロジェクト】は龍王宮の立退きを阻止・反対しようという運動ではない。現状では存続が難しいので、龍王宮の歴史を最後まで見届けようというのである。

今後、龍王宮内の施設の実測や記録・史料収集、利用者やシンパに聞き取りをおこない、実際のクツの様子を撮影したりする予定である(実は私たちメンバーのだけ一人として、まだ実際にクツを見ていない)。また、当事者のみならず、龍王宮周辺の日本人の目にはどう映つていたのかの聞き取りも重要である。撤去が決まれば【龍王宮祝祭】パート2を催す予定だ。みなさんにもご参加いただき、アイデアを出していただければ幸いである。詳細は「こりあんコミュニティ研究会」までお問い合わせを。kocoken2009@gmail.com

参考文献

『生駒の神々―現代都市の民俗宗教』宗教社会学の会編
一九八五年刊・創元社
『続阿蘇物語―済州島からきた女たち』元秀一著
一九八七年刊・草風館
『魂の流れゆく果て―渡辺日著 二〇〇一年刊・光文社
『在日コリアンの宗教と祭り』飯田剛史著
二〇〇二年刊・世界思想社
『龍王宮祝祭』配布資料(二〇〇九年八月二二日)
インターネットサイト
『仏教と仏教美術の日』http://dhatenane.jp/ragaraja/
新聞
『過去とされる在日の祈りの場「桜ノ宮龍王宮」(「貴重文化遺産」借しむ声も)』『民団新聞』七月二九日付
『済州島出身の在日コリアン祈りの場「龍王宮」であす祝祭』『毎日新聞』大阪市内版 八月二一日付
『在日の儀式の場「龍王宮」を紹介 きょう都島でイベント』『朝日新聞』大阪市内版 八月二二日付
『龍王宮の記憶次代へ 済州出身同胞祈りの場』『民団新聞』八月二六日付

(ふじい こうのすけ 関西大学非常勤講師、コリアン・マイノリティ研究会世話人、こりあんコミュニティ研究会運営委員)

【お詫びと訂正】

前号、写真1と2のキャプションが入れかわってしまいました。お詫びして訂正します。



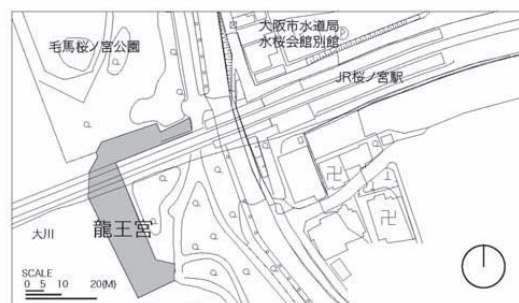
桜ノ宮龍王宮の報告 - その1

全 泓奎

大阪市立大学都市研究プラザ・准教授

在日の文化、その中でもシャーマニズムの習俗には不思議な気持ちにさせられる。その背景を知らない僕のようなニューカマーの韓国人には、いろいろと戸惑わされることばかり。だが幼い頃のおぼろげな記憶がどこか刺激される。小学校の通学路、梅雨の度に水没する小さな橋を渡ると、物凄い金属音と太鼓を鳴らす、「ムダンジップ」があった。ムダンは、いわゆる「ボサル」である。通学には避けられないこのムダンジップの前を僕は、いつも彼女らに気付かれぬよう逃げるように通り過ぎていた。子供心に、「シンドウリン」(神に仕えた)女たちの異様な服や化粧、騒がしさが内心怖かった。そのムダンジップが来日10年の大阪で再び目の前に現れた。それが「龍王宮」である。現代の韓国では身近なところでは見られなくなった風景。「ハン」(恨み)を祓う儀式、祈りを込めた女たちの拌み…。あるいは、在日を生きる支え(「…そのおばさんたちの誘いもあって、母は夜間中学に通い始めたはずである。ということは母にとっては、夜間中学はこうした大川の龍王宮を含めた濟州島ネットワークの付き合いの延長上にあったということになりそうである。このネットワーク、いろんな意味で、面白いし、文字の読めない一世の女性たちにとっては、いろんな情報がそこから得られるわけだから、すごく重要なものである。(玄善允)」)でもあったのである。その龍王宮が今危機に瀕している。「不法占拠」であるため、行政による立ち退き勧告を受けているためである。そこで、みんなのための「龍王宮」として蘇らせる儀式(=プロセス)が求められている。研究会のメンバーからは以下のような提言も聞こえてくる。「たとえば河川敷にある公園の一

部として、濟州島を思わせる石垣や韓国風の開放的な東屋、川に面したスペースなど、行政と折衝して何かを代わりに作る、残すということもあるかなと思います。(S.M氏)」。いろんな方面からの知恵と協力が切実に求められている。



龍王宮桜ノ宮・Site



龍王宮の配置図



桜ノ宮龍王宮の報告 - その2

黒木 宏一

大阪市立大学都市研究プラザ・特別研究員



高架下のエントランス



寄宿舍



龍王宮に向かう路地

龍王宮のある敷地は、JR桜ノ宮駅の高架下から、大川の河川敷に広がっている。「水辺」は、韓国における独特の宗教性のある場所であり、竜王宮は、在日の人々の祈りの場としてつくられた。この場所には、廃品回収の管理・販売の場、廃品回収に携わる労働者の寄宿舍などもあり、それらの建物は、トタンや鉄板などでつくられ、木々に囲まれるように建っている。

この敷地の入り口である、高架下の販売所と事務所には、今でも鉄くずや廃品が高く積み上げられている。エントランスを抜けると、左手に寝起きを行っていた寄宿舍、炊飯場の建物が目に入ってくる。廃品回収の仕事が全盛期であった時代には、12~3人の労働者が暮らしを共にしていたそうである。右に視線を移すと、大川に面した場所にちょっとした広場がある。広場を通り抜け、屋根のかかった狭い路地を歩いていくと、一番奥に竜王宮が見えてくる。龍王宮では、現在でも月数回の儀礼の場として利用されている。

これらの場所は、「祈りの場」・「住まい」・「仕事場」と、在日の人々の暮らしのベースとなる場が集約され、現在でもその機能や空間がそのまま残された貴重な場所といえるであろう。



龍王宮



桜ノ宮龍王宮の報告 - その3

全 泓奎

大阪市立大学都市研究プラザ・准教授
こりあんコミュニティ研究会・運営委員長

3月に研究会が発足して以降、第2回目(4月)からの研究会を毛馬桜ノ宮公園内の「龍王宮」にて開催している。我々がここ龍王宮を訪ねることとなったきっかけは、本当に偶然としか言いようがない。最初、研究仲間からJR桜ノ宮近辺のバラックのことを聞かされ、それを好奇心半分で探しにきたのが、敢えて言うならばことの始まりであった。

その後我々は、龍王宮が現在不法占拠ということに立ち退き勧告を受けていることを聞き、府の治水事務所を直接訪ねてみることにした。そこで聞いた話からは、龍王宮が位置する大川沿いには、昔から砂利業などに従事していた人々による不法占拠居住地があり、80年代の半ばに府営住宅への斡旋補償に伴って立ち退きの経験があるという新たな事実を知ることができた。しかし、治水の方からは、「龍王宮やその他の不法占拠地に関連した行政書類などない」の一点張りです。それと云った成果を得られずに帰ってきた。なお、撤去後の利用については、管轄が大阪市のゆとりとみどり振興局に変わるので、自分たちは関知しないということであった。

このような不法占拠の問題には、色々対応を考えることができるのだが、現在この土地が、人が居住している場所ではない、という面ではいわゆる国際人権条約でいう居住の権利(housing rights)には訴えられないところがある。しかし他方、この場所が形成される背景には、「旧植民地出身者およびその子孫」としての在日の生活があったことは忘れてはならない。つまり不本意に連れて来られたり、あるいは母国での取奪で行き場を失い、海外への「流民」となることを選択せざるを得なかった人々の悲しい歴史の傷跡が、ここ龍王宮には刻まれている。

るのである。

龍王宮は、彼ら・彼女らの息の吐き場所であり、恨みを祓う場所であり、同じ出自の人々の苦悩のコミュニケーションの場でもあり、故郷の記憶と帰郷できなかった悔恨の涙を拭い合う場所でもあったのである。しかし、現状として不法占拠ということもあり、負の歴史として残す、という積極的な歴史認識をこの日本社会が持たない限り、現実問題として龍王宮を残せる選択肢が我々にはない。このまま人の記憶から失せていくのは納得のいかないことでもあって、私たちが今できることは、より多くの人々に龍王宮を知ってもらい、龍王宮の最後に立ち会ってもらおうことと考えている。

70~80年代の全盛期には、拝みに来る人々が1週間に数十組あり賑わっていたらしいが、最近では週2~3回で数的にも少なくなっており、この場所の存在すら知らない人々が増えている。旧植民地出身者やその子孫としての在日の民族的なアイデンティティの変容が進んでいくなかで、この場所の含意を問うていく作業は必要である。

その第一歩として、今後も引き続き、この場所で研究会を開き、それを通じた様々な絆が広がることを願っている。なお、活動のみならず、龍王宮の持つ意味についても色々調査を進めていながら、資料としても残せるような形で考えていきたい。それらをもとに行政や市民・我々のみんなが頷けるような形の共通解を探っていきたい。そのための特別イベントを8月22日(土)に予定しており、より多くの参加者および賛同者を募っている。詳細は、最終頁のお知らせを参考されたい。(次回に続く)

龍王宮の研究に期待する

谷 富夫

大阪市立大学文学研究科・教授
こりあんコミュニティ研究会・運営委員

こりあんコミュニティ研究会が龍王宮やウトロの問題に取り組んでいるというので、この研究会に目が向きました。1980年ころ関西の社会学・人類学の若手研究者を中心に「宗教社会学の会」という研究会ができました。当時は若かった私もメンバーの一人で、『生駒の神々』（創元社、1985年）という研究成果をみんなでまとめています。私は「朝鮮寺」を担当しましたが、生駒山中だけでなく、大阪市内も調査しました。私たちが初めて龍王宮を訪れたのは1983年6月のことです。上の本の中で、私は当時の龍王宮についてこう記しています。

「龍王宮は河川敷の市有地に建てられている。戦後の混乱期に不法占拠してそのまま居座ったわけで、これまで度々市と立ち退き交渉をもっている。だが代替地の条件で折りあわず、そのたびに物別れに終わって今に至っている。『賽神センター』としての機能を果たしている限り、しかもそれが近年衰えるどころか栄えているとすれば、龍王宮は、この中洲の上で今後も活発な活動を続けていくことが予想されるのである」（296頁）。

たしかに当時はたいへんな盛況で、毎日最低1組は賽神（クッ）に来て、年3回の年中行事には100組以上がお参りに来ると、当時の経営者、高田義雄さん（故人）はおっしゃっていました。

こうした在日韓国・朝鮮人たちの信仰の歴史を後世に残すことはとても意義のある事業だと思います。ぜひ成功させて下さい。私も、本会監事として及ばずながら協力させていただきます。

なお、「宗教社会学の会」は世代交代を繰り返し、現在も若手中心に活発に活動しています。近々生駒調査を30年ぶりに再開させると聞きました。当然ながら「朝鮮寺」も視野に入っています。

龍王宮祝祭開催

龍王宮祝祭準備チーム

こりあんコミュニティ研究会は立ち上げ当初から桜ノ宮龍王宮の存在を広く社会に訴えることを企図して、この場所を定例研究会の会場として利用してきた。そして、龍王宮の存在をより多くの市民に知ってもらうことを意図し企画されたのが、2009年8月22日に行われた「もうひとつの水都大阪 龍王宮祝祭」であった。当日は、新聞報道もあり、研究会会員以外にも多くの市民が集まり、募集定員80名を超える参加者があった。

大阪リバーサイドホテルを会場に行われた第1部では、朴保氏の熱のこもったミニライブを皮切りに、飯田剛史氏(大谷大学教授)、高正子氏(神戸大学非常勤講師)、玄善允氏(関西学院大学非常勤講師)、金時鐘氏(詩人)を講演者に、「大阪の濟州人(チェジュサラム)と龍王宮」にまつわるリレートークが行われた。それぞれの語りは龍王宮やそれに関わる人々をめぐる微細ではあるが、重厚な記憶を呼び起こすものであった。そして、第2部の龍王宮フィールドワーク後の第3部は、毛馬桜ノ宮公園内に設置された手作りステージで、中川眞氏(大阪市立大学教授)が主宰する「マルガサリ」(ガムラン合奏団)の演奏を中心とした野外ライブが実演された。ガムランの音色と詩の朗読やジャワやタイの舞踏の融合は静寂さを象徴していたが、朴実氏(東九条CANフォーラム)のアクセントのある独特のリズムのチャングが加わると、いつの間にか参加者の踊りの輪が出来上がった。

「龍王宮祝祭」は龍王宮をより多くの人々に周知させるとともに、新たな人縁形成のきっかけにもなったと思われる。こりあんコミュニティ研究会はこれらの新たな繋がりを活かし、今後も龍王宮の存在の意義や歴史性の探求、それをめぐる記憶の記録化を行っていく予定である。そこではもちろん会員の方々の積極的な関与も期待されよう。(文責:本岡拓哉)



様々な立場からみる龍王宮祝祭プロジェクト

パフォーマーからみた龍王宮祝祭プロジェクト

僕が演奏を引き受けたのは、川のほとりに祈りの場があり、現在も生きて機能している、しかしそれが存廃の危機に瀕している、と聞いたからである。ちょうど5月末に京北町のマンガン坑道と記念館の閉鎖イベントがあり、それに参加した者として、同じ水脈を感じたこともある。さっそく現場に行ったところ、たまたま儀礼が行われていて、何度と打ち鳴らされる金属の響きに、心が揺さぶられた。僕が演奏するガムランも金属の響きであり、それが龍王宮とどのような必然の関係を結び得るのか、多少の危惧を抱いていたのだが、祈りの音は不安を消し去り、どのような音とダンスでこの場を顕在化させることができるのか、そのデザインづくりへと一気に気持ちを駆り立ててくれた。僕は、敢えて「在日」とか

中川 真

大阪市立大学大学院文学研究科・教授
ガムラングループ・マルガサリ・主宰

「コリアン文化」という視点にこだわらなかった。それは、龍王宮を在日の方々の祈りの場としてだけでなく、もっと広く開放された場、可能性の場として捉えたかったからである。つまり、こっち側とあっち側という二元的な思考に蓋をし、「誰でも、ともに」というふうに考えたかったのである。そして、声をかけ集まったのが、日本、インドネシア、タイ、中国、韓国、アフリカの音楽やダンスを担う、実に多彩な人々であった。リハはなく、1時間以上の即興パフォーマンスを紡いでいった。その評価は他者に譲るとして、「場」に触発されたパフォーマーたちが、「龍王宮のための協働」の意味を120%理解してくれていたことは確かである。

新聞記者からみた龍王宮祝祭プロジェクト

名は体を表す、というけれど、「龍王宮祝祭〜もうひとつの水都大阪」というイベントの名前は、実に絶妙と感心している。そこには、大阪弁で言う「いちびり」の精神が見えてくる。いちびりこそ、このプロジェクトにとって肝要であると思うからだ。

お上は「まちを美しく」という題目にとって不都合な存在は排除し、隠してしまう。大阪でも07年、世界陸上を前に長居公園から野宿者のテントが強制撤去された。だから一見、さわやかで華やかそうな「水都大阪」にも、何やら胡散臭さを感じていた。

そこへ、今にも朽ち果てそうなバラック小屋をシンボルに「もうひとつの水都大阪」を開こうという知らせが。「祝祭」だなんていちびりながら、龍王宮がたどっ

武井 澄人

毎日新聞 社会部 記者

た歴史の事実を無視しようとするお上への皮肉がたっぷり。どんないちびりたちが集うのか、確かめたくて足を運んだ。

「祝祭」の質疑応答では、「龍王宮の『今日的意味』は何か」と質問した。後で「言葉足らず」と指摘されたので、補足すると「今を生きる私たちが、龍王宮を通じて考えるべきことは何か」ということ。その答えを求める過程が、プロジェクトが進む方向性にもつながっていくと信じる。

プロジェクトの拠点が「大阪市立大」にあるという事実もまた、いちびりの町・大阪の懐の深さを体現していて面白い。時間に限りはあるだろうが、これからのいちびりにも期待している。

ヨン ワン グ
龍王宮って何? 「龍王宮プロジェクト」をやっています!

藤井 幸之助

神戸女学院大学非常勤講師

朝鮮語を学ぶ学生だった1980年代初頭、JR環状線で大阪駅から鶴橋駅に向かう途中、あるいはその帰りに、桜ノ宮駅西側の大川にかかる鉄橋から南側を見ていると、いつも「龍王宮」という看板が目に入ってきた(今のように木が生い茂って^{りゅうおうじょう}いなかった)。「龍宮城」なら^{りゅうおうじょう}わかるけれど、「龍王宮」って何だろうと思っていた。

韓くにのひとを撮り続けている写真家の藤本巧さんと知り合って、彼の作品の中に「龍王宮」があった。巫女が舞い、お祓いをしている写真だった。当時のぼくはそこで止まっていた。

それから20数年たった今年、思いもよらず、再び「龍王宮」と向き合うことになった。

そして、「龍王宮の記憶を記録するプロジェクト(略称:龍王宮プロジェクト)」として、龍王宮でのここ研

^{ヨシワラジノチュクキョ}
開催、龍王宮祝祭をはじめ、一連のとりくみをおこなっている。知らないことはおそろしい。しかし、知らないから開き直って、いろんな人の力を借りながら、龍王宮の存在そのものに今、迫っていつているのだと思う。

河川敷にある龍王宮は「不法占拠」ということで、行政から立ち退きを迫られている。その一方、大阪市・大阪府・関西財界はこの夏から秋にかけて「水都大阪2009」というイベントを9億円(3分の2は税金)もかけておこなった。何か大切なものを忘れてはいないか?

長い間、済州(チェジュ)島(ド)出身の人々が心のよりどころにしてきた龍王宮をこのまま終わらせてはいけな
い。「龍王宮プロジェクト」は走りながら考えていく。
みなさんのご参加をお待ちしている。



朴保氏のミニライブ・リレートークと、積極的に質問を投げかける参加者



龍王宮でのフィールドワーク



毛馬桜之宮公園での野外ライブ。踊り手と参加者がともに踊り始める

龍王宮・記録を残せなかった歴史に光を

大阪府立高校 社会科教員 塚崎 昌之

龍王宮の存続が窮地に立たされたのは、大阪府からの「不法占拠」解消への策動が強まったことだけではない。「仲間」であるはずの在日同胞からの強い「抗議」も大きな原因である。火を燃やしたり、供物を川に流したりすることを、安全上や衛生上、「同じ民族として恥ずかしい」行為であるとし、龍王宮に警察や消防車を呼ぶということまであったという。

1935年12月、大阪府は朝鮮人が巫覡と称する迷信を慣行するなど朝鮮在来の「悪習」を行い、各種の弊害を生んでいるので、今後、厳重な視察取締を加えるよう警察署長宛に通牒を発した。また、大阪府協和会の『昭和十二年度事業計画』でも、朝鮮人の絶対矯正すべきことに「迷信ニ基キ而モ他人ニ迷惑ヲ及ボスガ如キ行事…」、「特異ニシテ異様ナル感ジヲ与フル習俗」があげられた。

大阪で高名な朝鮮人労働運動家であった金文準によって1935、36年に新聞『民衆時報』が発刊された。在日朝鮮人の生活権・教育権などを要求し、何度かの発禁処分を受けながらも日本帝国の政策意図に反する主張を掲載し続け、民族に対する限りない愛情と誇りを持った新聞と高く評価されてきた。しかし、この新聞も巫俗に対する批判記事を度々掲載した。例えば、1935年8月1日号の「迷信を打破しよう」という記事では、「何よりもまず易占ト巫を為業する奴らを撲滅することを提唱する。一、巫女占術者は社会人心を蝕む寄生虫である…」と主張した。

権力と闘う人間たちにとっては、朝鮮民族への差別を「合理」的に説明・解決できない存在は足手まといになるどころか、民族差別を増幅させる身内の「敵」と映ったのだろう。民族差別だけでなく、女性差別にもさらされ、多くは文字も習得できなかった女性たちが「巫俗」という形でカタルシスを得ていたことに想いを馳せることができなかつたのである。記録を残せなかつた歴史、想いを少しでも掬い取り、後世に伝えていく仕事の一端を担えたらと思っている。



龍王宮実測調査報告

黒木 宏一

KUROGI Hirokazu

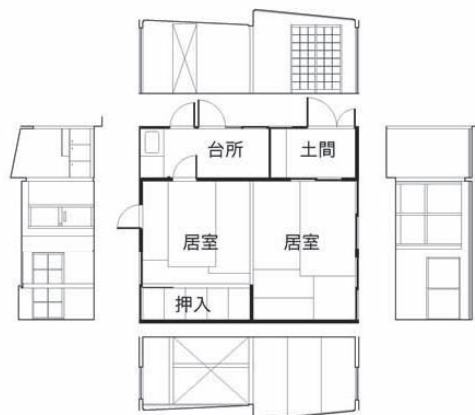
大阪市立大学 都市研究プラザ 特別研究員

こりあんコミュニティ研究会運営委員

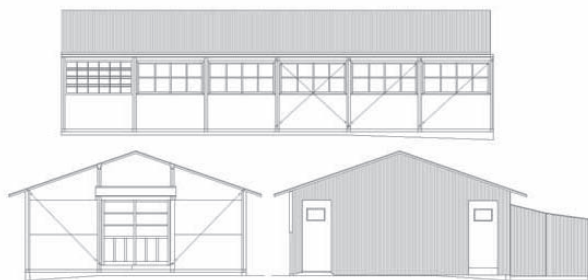
コリアンコミュニティ研究会会員の中の建築学を専門とする研究員が中心となり、2010年2月末から1ヶ月間、龍王宮プロジェクトの一環として、龍王宮の記憶をとどめるための建物の実測調査を行った。実測調査には、筆者をはじめ、本研究会会員である平川隆啓氏、大阪市立住まいのミュージアムの学芸員である深田智恵子氏、大阪人間科学大学の教員である増田亜樹氏で行った。龍王宮には、研究会やイベント等で幾度となく足を運んだことがあるが、細かく建物を実測していくと、様々なものが見えてくる。龍王宮は、クツを行う龍王宮の建物以外にも、廃品回収の業務に携わっていた人々の宿舍が共存しており、生活していた当時の痕跡・記憶が様々な場所から垣間見ることができる。龍王宮の建

物自体は、プレハブの鉄骨造で、日本の伝統的な住宅のモジュールである一間(1820mm)で構成されている。そうした簡素な建物の中で、儀礼を行うために造作された棚や、壁に貼られた幡(ばん)、仏画、壁や柱の各所に書かれた電話番号、居住者の暮らしが伝わってくる日用品の数々などが随所に残っており、この龍王宮や寄宿舍で人々が過ごした歴史を感じることができる。

大阪の都心部の中で在日コリアンの儀礼の場の記憶が時代を超えて継承されてきた建築文化的含意を、在日コミュニティを始め、日本社会に対しても伝えていくことは、龍王宮プロジェクトの持つ重要な使命とも言えるのではないだろうか。



寄宿舍の平面図・展開図(1/200)



龍王宮の立面図(1/200)



くらしの痕跡が残る寄宿舍



クツの際に使用されていた菩薩絵と幡(ばん)

特集

マイノリティ空間の記憶をどう伝えるか

本特集は、2009年8月22日(土)に開催された「もうひとつの『水都大阪2009』 龍王宮プロジェクト祝祭」において、リレートークに参画していただいた講演者の方々の「大阪の濟州人(チェジュサラム)と龍王宮」にまつわる内容を再構築していただいたものである。飯田剛史氏には、在日コリアン特に濟州島出身者にとっての水辺のクツの意味について(「龍王宮・箱作・濟州島-水辺の賽神²-」)、高正子氏には、大阪で暮らす濟州島出身女性が日常生活の中で行ってきた「祈り」の実践とその変遷について(「大阪濟州人の祈り-ある濟州島出身女性の事例から-」)、玄善允氏には、在日二世の視点から、宗教的儀式を通して見た濟州島出身の在日一世の習俗を覚え書きとして(「濟州島出身在日一世の習俗の断片」)、それぞれ寄稿いただいた。

また、本特集のテーマである「龍王宮」に関わる「こりあんコミュニティ研究会」の活動を中心とした拙稿を、導入部として当てることを付記しておきたい。

こりあんコミュニティ研究会 運営委員 宮下良子

龍王宮の空間が語るもの

宮下良子 ◆ 大阪市立大学都市研究プラザ 特別研究員

はじめに

本特集のテーマでもある“龍王宮”は、JR環状線桜ノ宮駅近くの大川(旧淀川)の河川敷にある。知り合いから、宗教施設のようなバラックとその周辺の様子を聞き、2009年2月4日、研究者仲間とその地に足を踏み入れたのが、龍王宮との出会いである。同年3月11日に、大阪市立大学都市研究プラザを中心としたさまざまな分野の研究者が集まり、国内外のコリアンコ

ミュニティに関する調査・研究を行うことを主な目的とした「こりあんコミュニティ研究会(以後、ここ研¹⁾)」を発足し、2010年6月現在に至るまで、活動の中心は龍王宮の調査・研究が主軸と言っても過言ではない。しかし、一方で、河川敷を管理する大阪府の治水事務所から、龍王宮及びその周辺の再生資源集荷業者たちが、不法占拠を理由に立ち退き勧告を受けているという事実がある。その事実確認のため、2009年3月、

研究会のメンバーが治水事務所を訪れた際に聞いた話では、大川沿いの砂利採取業などに従事していた人々による不法占拠居住地があり、その立ち退きのため、80年代半ばに府営住宅への斡旋補償を行ったという。さらに、龍王宮及びその周辺の不法占拠居住地の撤去後の利用を尋ねると、管轄が大阪市のゆとりとみどり振興局に移譲されるため、関知しないという返答であったということだ（全 2009:4）。

しかし、上記の場所が形成された背景には、「日本の旧植民地出身者で戦前から日本に在住している人々およびその子孫」（宮下 2000）の歴史的、社会的な要因がある。限られた誌面であり、わずか1年余りのここの研の活動ではあるが、これまでの調査・研究経過をおおまかに時系列に整理し、そこから見えてくるものを考察することが本稿の目的である。なお、本稿の構成は、1章－大川周辺と龍王宮に関する先行研究－、2章－宗教的職能者の語りから－、3章－まとめ－となる。

1 大川周辺と龍王宮に関する先行研究

1-1 大川周辺の朝鮮人

1922年頃、大川周辺の東淀川区長柄濱通りに小舟を繋いで最初の水上生活者が生活を始めたのを機に、その辺りの砂利採取に従事する世帯が次々にこの地区に繋船するようになった（大阪市社会部庶務課 1937:234）。同年7月のその地域の水上生活者人口は、9,858人中、朝鮮人が195人であったということだ（塚崎 2009）。砂利採取者の日本人の出身地の多くは、愛媛県、香川県、鹿児島県であるが、同一地方から集まってくる背景には、砂利採取で成功した者が故郷に帰ったことで、小作争議やその他の事情により疲弊していた同村居住者に「成金」の夢を抱かせたということがある（大阪市社会部庶務課 1937:234）。大阪市社会部が1937年に実地調

査したデータ²⁾によると、その出身地は変わらず、砂利採取者の日本人の73.15パーセントを占めていた。水上生活者の朝鮮人においても同じ傾向があり、主として慶尚道出身者が多く、その内訳は朝鮮人の83.72パーセントを占めていたが、水上生活者の朝鮮人の過半数は、一旦大阪市にきた後に水上生活者となっている。その理由として、土木、手伝い、仲仕等の日雇い労働者が多いことから、住宅難のために水上生活者となったと推測される（大阪市社会部庶務課 1937:239）。上述した1980年代半ばの立ち退きが実施されるまでは、少なくとも、砂利採取者はいたということであるし、それに関連する日雇い労働者の存在もあったと推測する。

また、塚崎（2009）は、1937年の前後に龍王宮南側の貯木場前の寄せや街、JR桜ノ宮駅の崖下辺りに50世帯を超える済州島出身者の部落が形成されていたのではないかと言及している。確かに、1922年以来、君が代丸や尼崎汽船が大阪済州島に就航していたことにより、済州人が大阪に流入していたことは検証されている。その後、「33年前後のピーク時には、年に3万人近い済州島人を大阪へと運んだ」ともいわれている（宮下 2009:40）。その背景には、日本の植民地支配による生活の経済的不安と商工業都市である大阪の低賃金労働力需要が拡大したということがある。また、1948年の四・三事件⁴⁾、1950年の朝鮮戦争がそれに拍車をかけたことは想像にかたくない。しかし、済州人の多くは、1922年の平野川改修工事や綿織物・石鹸・ヘップサンダル等の中小工場の職工として大阪へ流入しており、大阪における済州人の連鎖移民の集住地としては、特に生野区が挙げられる（原尻 2000:40-44）。かつては、上記の場所に済州人の集住があったのかも知れないが、現在、上記の場所周辺には済州人の集住は見られない。また、2010年2月に筆者たちが聞き取りを行った龍王宮周辺の不法占拠居住地に住む再生資源集荷業

者Sさんは、出身が慶尚道であり、都島の知人を頼って1958年に山口県から来たという経緯を見ると、1937年当時から現在に至って、大川周辺の朝鮮人の出身地は主に慶尚道が多かったのではないだろうかと仮定できる。これについては、今後も調査を継続していく予定なので、何らかの検証を得ることができるであろうし、上記の済州人の集住の形成と分散過程を調査することも重要と考えている。

以上のように、大川周辺の朝鮮人について、その歴史的経緯をまとめてみたが、彼らが川周辺の水上生活者となった要因として第一に挙げられることは、日雇い労働者であった朝鮮人たちが、上流で採取した砂利を荷揚げする就労場所が都島橋付近であったこと（大阪市社会部庶務課1937:239）、第二に、家賃の支払い能力を持たないという経済的理由が考えられる。そして、第三に、慶尚道出身者であるという地縁のネットワークが機能していたことが挙げられる。同様に、一時期、済州島出身者の集住地が周辺に形成されていたらしいことから、散住の場合は別として、同郷単位のコミュニティがそれぞれ棲み分けられていたのではないだろうかと推測する。

1-2 龍王宮

龍王宮というのは巫俗⁵⁾信仰のクッ堂（巫儀の場）であるが、龍王宮に関する先行研究としては宗教社会学の会（1985）や飯田剛史（2002）の論考がある。それによると、大川沿いで朝鮮人たちが賽神（クッ）を始めたのは、1923～24年頃で、建物の中ではなく、川べりにむしろを敷いて行っていたということだ。戦後になって、便利の良い桜ノ宮の河川敷に拝み屋がバラックを建てて住み始めたことが発端だが、2代目はシンバン（済州島のシャーマン）、3代目は管理人であった高田氏の父が寄せ場をやるために売買で土地とバラックの権利を買い取り、現在の建物に造り変え、4代目の高田氏が父の死後、1982

年にこれを継承した。従って、1974年以降、ここでは再生資源集荷業である高田商店の経営とその従業員の宿舎、祈祷専門の貸会場の管理が行なわれていた（宗教社会学の会1985:293-294、飯田2002:178-179）。しかし、筆者たちが初めて龍王宮を訪れた時は、高田氏が亡くなって1カ月が過ぎたばかりの頃で、彼の家族が跡を継いで管理人となっていた。その後、2009年2月20日、研究者仲間と聞き取り調査を行ったところ、高田氏の父は済州島出身者であったということから、少なくとも戦後以降、ここは済州島出身者のゆかりの地になっていたということになる。これには、前節で述べた1937年当時の済州島出身者の集住があったということに少なからず関連があったかも知れない。

そもそも、「済州島では先祖は海にいますと考えられており、ここも海とつながるところとして供物などを流す。年中行事は、1月15日は海の神を拝む日で150組くらい来る。旧暦の6月7日、8日は夜通しで海の神を拝む。これには200組くらい。7月7日は七星の日。11月7日、8日も海の神を拝む。ここへ来るボサル（菩薩）、スニム（僧侶）、シンバンは40～50人くらいいる」（飯田2002:179）ということで、龍王宮は主に在日済州島系の「賽神センター」（谷2009:1）である。その詳細については、この後に続く飯田の論考「龍王宮・箱作・済州島一水辺の祭祀一」で述べられるので省略するが、日本社会における「民族差別だけでなく、女性差別にもさらされ、多くは文字も習得できなかった女性たちが『巫俗』という形でカタルシスを得ていた」（塚崎2010:1）場でもある。そして、80年代の全盛期と現在の相違点は、クッの数が減ったこと、室料が2,000円から5,000円になっていること、宗教者、信者の高齢化を継承する形で出現しているニューカマーの宗教者、済州島からの出稼ぎボサルが増加していることなどが挙げられる。

その中でも、2010年2月4日に行ったFボサ

ルの語りから、龍王宮の現状について次章で考察してみたい。

2 宗教的職能者の語りから

1952年生まれ、2010年現在、57歳のFポサルは済州島出身である。18歳の時に両親と渡日し、20歳の時に憑依体験をする。25歳で在日男性と結婚し、26歳で長男を産むが、子どもが病気になったことがきっかけで、占い師（チョムジェンイ）にみてもらうと、「えらい先祖がついている⁸⁾」と言われたそうである。ポサルにならなくてもいいように、霊的力を抑えるクツをしてから44歳まで、経済的にも精神的にもどん底の生活を送ったということだ。その後250万円を人から借りて、1週間拜んでもらったら、あくる日から、お客さんが来て、口コミで広がっていったらしい。龍王宮へは、26歳から1年に2回、拜んでもらうために来ていたという。ポサルになってから、2009年10月までは、龍王宮で2日に1回は拜んでいたが、それ以降は3日に1回、大小合わせて1カ月のうち10日は拜んでいるという。龍王宮を使用するポサルの中でも一番多いということだ。拝みの内容は、親が子どもの非行やノイローゼ等をなんとかしてほしいといったものがほとんどで、在日2世、3世の人や日本人も紹介や口コミで来るという。日本人の場合は、「不動明のお経と般若心経しかないから物足りない」と言ってくるのだそうだ。日本人がクライアントで拜む場合の言語は何かと尋ねると、「朝鮮語で拝み、カミが降りてきたら、日本語で説明してあげる」とFポサルは答えた。また、龍王宮を使用するポサルの中には、済州島出身者だけではなく、韓国本土出身者も含まれているという。

そして、龍王宮についてFポサルは以下のように述べた。「いろんな拝みがあんねん。病気になって拜む人、こっちに来て豚1匹供えて済州島豚祭りする場合もあんねん。せやから、こ

れなくなったら困るわけ。関西空港近く箱作より、こっちの方が徳があんねん。そこも今、龍王（ヨワン）やってるけど遠いし、カネない人はでけへんやんか。車代もいるし。…山で拜むのはまた別や。山神さんと海神さんは別やからね。日本の先祖もきついし、韓国の先祖もきつくて、座り込んでるから、ここに。なくなったらあかんねん。あつてほしいんや。国のもんやからなかなかね。うちたちも悪いは悪いねん。ポサルたちもきれいに使わんときたないやんか。自分の家やおもて使う人おれへんの。うちもよその人も。家賃もらった人も協力してなおしてたら、こんなならんかったかもしれんやん。税金も払ってね」。

Fポサルの世代よりも上の世代では、現在80歳代のTポサル、90歳代のYシンバンがいる。彼らは、龍王宮のことについて、現管理人よりも詳しいということなので、現在、聞き取りが可能なTポサルに交渉中だが、筆者はFポサルの巫儀を通した宗教的实践に着目したい。それは、Fポサルの語りの中にある日本人クライアントへの対応の柔軟さに対してであるが、同時に済州島巫俗に基盤を置きながら、在日社会及び日本社会に対応する宗教に翻訳、転換している点である。在日、日本人に拘わらず、人間が抱える生、老、病、死などの苦悩の解決が主眼であり、ナショナリティは超克されている（宮下2006:229、2009:49-50）。在日の巫俗（シャーマニズム）研究にあたっては、韓国巫俗を基盤としながらも、このような変質、読み替えに、注目していかなければならない（宮下2005:57）。

3 まとめ

龍王宮をめぐるは大きく二つの視点が存在するだろう。一つは龍王宮を宗教的側面に特化したものとして見ようとする視点であり、もう一つは、済州島という括りで見ようとする視点である。しかし、筆者は、ここ研の活動として

龍王宮に関わってきたこの1年間を振り返ってみると、こうした見解それぞれに違和感がある。それは、この原稿を書き進めていくうちに明確になってきた。また、ここ研メンバーが中心となって、大阪市立大学都市研究プラザの建築系の研究員、大学院生の協力のもと、2010年2月、3月に行った、龍王宮の建物の実測に参加したことが大きなきっかけだったようにも思う。定例研究会で使用する見慣れた巫儀の部屋ではなく、かつての再生資源集荷業の従業員の宿舎であった部屋に足を踏み入れた時、朽ちて崩壊寸前の内装の中に、鮮明な生活の軌跡があったのだ。栓の開いていない缶ビール、錠剤の瓶、台所用品、お好みソース、2002年のカレンダー、体温計等。これらを見た時に、上述した違和感の正体の一端がかりうじて認識できたように思う。今まで、何を見てきて、何を見ていなかったのか。

先述したように、大川周辺には1922年頃から水上生活者が出現し、この地域に限っては、朝鮮人たちの職業の中には「屑拾い」はなかったが、いつごろからか、龍王宮や大川周辺の不法占拠居住地の生業は再生資源集荷業となっているところが多い。そして、高度経済成長期には、龍王宮の高田商店の例にあるように、在日が日本人従業員を雇用するという状況を生み出していた。つまり、それまではマジョリティであった日本人とマイノリティであった在日が、雇用、被雇用という関係において、日本社会の中で再配置されたともいえる。また、かつては、済州人の巫俗儀礼の場であった龍王宮も、現在では文脈を変え、ナショナリティさえ超える動向もある。飯田が問うている、龍王宮に関心を持つ「現代的意味」(飯田2009:6)とは、時代に取り残され、形骸化しつつある龍王宮が今なお現存していることの意味と、不法占拠居住地に居を構えねばならなかった社会的弱者やマイノリティの歴史の複合性に、その答えがあるのかも知れない。

注

- 1) こりあんコミュニティ研究会の「こりあん」を平仮名表記にしたのは、片仮名表記の他の研究会との差別化を図るためと、日本語の最も基本的な文字であることから、「在日」という意味付けを意図したためである。
- 2) 「大阪市は水都と称せらるる如く水路が街の縦横に通じ所謂水上生活者と称せらるる世帯・人口も相当数に上っている。例えば昭和10年国勢調査によれば水上生活者世帯数4,353世帯、人口男12,198人、女3,316人、合計15,514人に上り、これは港・大正・此花・西・東淀川の各区を以て9割余を占めている。尚大正9年国勢調査によれば水上生活者世帯数3,666世帯、人口12,154人である。
このうち東淀川区及び北の二区に跨る淀川の兩岸毛馬橋より都島橋に至る数町に群居せる屋形船の姿をした所謂家舟生活者は昭和12年2月21日現在127艘、157世帯、728人に達している。これらの家舟生活者が、水都大阪の水門をなす毛馬閘門の直ぐ下流に存在することは保健上並に保安上より種々なる弊害を招来するため、所謂水上署では再三その立退を命じ、種々なる方策を講じたのであったが、その目的を達することなく今日に至っている。従ってこれらに対する住居施設を提供することにより、当該河川の清掃と保安・衛生上の取締の目的を達成せんことは久しく翹望せられていることである。
本調査はこれらの家舟居住者の生活状態を解明し、これらに対する対策考究の一資料を得んとする目的のために、昭和12年1月20日に行った実地調査の結果を集計せるものである」(大阪市社会部庶務課1937:233)。
- 3) 1937年当時の朝鮮人水上生活者の職業は、砂利採取、手伝い、人夫、土工、硝子工、職工、配達、自動車助手、行商、鋳物工、染工、八百屋、仲仕等(大阪市社会部庶務課1937:257-266)。
- 4) 1948年4月3日、米軍政下の南朝鮮単独政権樹立のための代議員選挙に反対する済州島民衆の蜂起に対して、軍・警察・右翼青年団体は徹底的な武力弾圧に乗り出し、山間の村々は焼き尽くされ、たくさんの残虐事件が引き起こされた。1954年9月21日までに3万人による蜂起が完全に鎮圧され、1957年までには8万人の島民が殺されたとも推測される(宮下2009:41)。
- 5) 「韓国のシャーマニズムを広い意味では巫教と呼び、狭い意味では巫俗と呼んでいる。巫教がその歴史的な展開を包括した総体的な概念であるのに対し、巫

- 俗とは、主に現在見受けられる民間信仰の一部を指した概念として用い」られている（柳 1984:169）。
- 6) 谷富夫によれば、スニム（僧侶）は「賽神（クツ）のなかで、仏に経をあげ、あるいは霊を読経で供養する役目をもつことから、信者や巫女からは『知識・学問のある人』といわれている」が、「巫儀の本質に照らしてみればあくまでボサルが主人公であり、スニムは賽神を仏教によって権威づけるために添えられている」（谷 1985:248）との見解もある。また、谷が「真言宗の（免状をもつ）ボサルと天台宗のスニムとが組んで巫祭をしている、といったようなことがざらにある」と言及しているように、「賽神に臨席する僧侶の宗派性には偏りはない」（谷 1985:248）。
- 7) これについては、宮下 (2005)、(2009) を参照されたい。
- 8) 「えらい先祖」という言葉には、二重の意味があると思われる。一つは偉大であるということ。そして、もう一つには、手に負えない、厄介な先祖という意味である。
- 9) Fボサルにとって、巫俗に関わるということは（ボサルになることは）蔑視の対象になるという認識があり、済州島のきょうだいたちともそれが理由で、縁を切られたという。

参考文献

- 飯田剛史 (2002)、『在日コリアンの宗教と祭り—民族と宗教の社会学—』、世界思想社
- 飯田剛史 (2009)、「水辺のクツ—龍王宮・箱作・済州島—」『龍王宮祝祭—もうひとつの「水都大阪 2009」資料』、龍王宮祝祭準備チーム
- 大阪市社会部庶務課 (1937)、『毛馬・都島両橋間に於ける家舟居住者の生活状況』、社会部報告第 223 号、225-280 頁
- 宗教社会学の会編 (1985)、『生駒の神々—現代都市の民俗宗教』、創元社
- 全 弘奎 (2009)、「桜ノ宮龍王宮の報告—その 3」、『Koco-ken 研究会通信』、第 2 号、4 頁、こりあんコミュニティ研究会
- 塚崎昌之 (2009)、「龍王宮をめぐる歴史—大川・海女・朝鮮寺—」、『こりあんコミュニティ研究会』、第 8 回定例研究会報告
- 塚崎昌之 (2010)、「龍王宮・記録を残せなかつた歴史に光を」、『Koco-ken 研究会通信』、第 5 号、1 頁
- 谷 富夫 (1985)、「Ⅲ朝鮮寺—在日韓国・朝鮮人の巫俗と信仰—1 朝鮮寺と巫俗」『生駒の神々—現代都市の民俗宗教』(宗教社会学の会編)、創元社
- 谷 富夫 (2009)、「Koco-ken 研究会通信」、第 2 号、1 頁
- 原尻英樹 (2000)、『 코리아タウンの民族誌—ハワイ・LA・生野—』、筑摩書房
- 宮下良子 (2000)、「シャーマニズムを媒介とした在日コリアンのアイデンティティ形成に関する一考察」、『日本におけるエスニック・マージナリティ—日本の旧植民地出身者で戦前から日本に在住している人々およびその子孫の日本における民族的他者としての自己意識の形成に関する研究』(研究代表者 浜本まり子 九州共立大学) 平成 10 年度トヨタ財団研究助成 98B1-079
- 宮下良子 (2005)、「越境するシャーマニズム—在日コリアン—世女性の事例分析から—」、『韓国朝鮮の文化と社会』、第 4 号、55-85 頁
- 宮下良子 (2006)、「民俗知の生成—在日コリアンのシャーマニズムの事例から—」、『白山人類学』、第 9 号、213-231 頁
- 宮下良子 (2009a)、「済州スニム（僧侶）のトランスナショナリティ—大阪市生野区の事例を中心に—」、『白山人類学』、第 12 号、35-51 頁
- 宮下良子 (2009b)、「もうひとつの『水都大阪 2009』龍王宮プロジェクト祝祭」、『大阪市立大学都市研究プラザ ニューズレター』、第 5 号、10 頁
- 柳 東植 (1984)、「韓国のシャーマニズム—仏教・儒教・道教との交渉をふまえて」『日本のシャーマニズムとその周辺』(加藤九祚編)、日本放送出版協会

龍王宮・箱作・濟州島—水辺の賽神^{クッ}—

飯田剛史 ◆ 大谷大学

はじめに

在日濟州人社会では、故郷の巫俗伝統に由来するクッ（賽神）が、行われてきた。数時間程度の小規模なものは自宅で、3日以上を要する大規模なものは山の寺（生駒山、信貴山、六甲山に在日の寺、60数ヶ寺を数える）で、1,2日程度の中規模なものは「龍王宮」で行われた。「龍王宮」では個別的な祈祷の他に定例的行事（海の神を祭る旧暦1月15日、6月7, 8日、11月7, 8日と七星を祭る旧暦7月7日）も行われ、街中の祈祷センターとして貴重な存在であった。なお在日の祈祷師として、シンバン（神房：濟州島巫俗の伝統を受け継ぐ男女の巫者）、ポサル（菩薩：経文を読む女性祈祷師）、スニム（僧任：経を読む男性祈祷師）と呼ばれる人々がいる。正規の仏教僧が経を読んでクッに参加することもある。

龍は一般に海の神であり、特に濟州島では漁業など海と密接な性格を送っているため、龍王（海の神さん）を拝むことが多い。巫祭においても「龍王（ヨワン）迎え」は祭事の一部としてしばしば行われる。大阪では故郷濟州島と海・水でつながっている場所でクッが行われるので、建設者が大川端の祀りの場を「龍王宮」と名づけたのも自然の成り行きだったと思われる。龍王宮は戦後のどさくさの時期に作られ、80年代におそらく最盛期を迎えたが、設備更新などほとんどなされないまま、在日の生活変化にも取り残されながら細々と続けられてきた。消え去

ろうという今の時点で、若い研究者の方々が「龍王宮」に関心をもちこのイベント「龍王宮祝祭～もうひとつの「水都大阪2009」～」を企画された。龍王宮は消え去ろうとしているが、その「現代的意味」については主催者の語るところに耳を傾けたい。

水辺のクッは、龍王宮以外では、大川端、箱作海岸、そして濟州島で行われている。ここでは筆者の1980年代の調査ノート、写真を抜き出して、在日コリアン特に濟州出身者にとっての「水辺のクッ」の事例を紹介しその意味を考えてみたい。

龍王宮

1980年代の「龍王宮」については、『生駒の神々—現代都市の民族宗教—』（宗教社会学の会1985:293-296）の記述があるが、詳しい来歴は分っていない。ここでは筆者が1989年に先代の経営者宋吉夫（高田義男）氏に短いインタビューをした記録を、一部修正のうえ掲載させて頂くことにする。

龍王宮 …… 宋吉夫（高田義男）／大阪市都島区中野町4-15-8

[管理者経歴] 1945年大阪生まれ。早稲田大学に合格したが、朝鮮大に入校して入学した。卒業後、朝鮮新報社に勤めていたが、龍王宮の管理者であった父が亡くなったので、1982年から後を継いだ。ここで金属回収業の高田商店の経

営と龍王宮の管理を兼ねている。自分では宗教活動はまったくしない。

〔活動〕ここは、大川（淀川分流）に張り出したクッや祈祷専門の貸会場であり、街中にある在日の祈祷センターである。プレハブ平屋数棟からなり大部屋2、小部屋4を備え、同時に複数の祈祷を行うことができる。定常的な祭壇や仏像などは何もない。毎日祈祷師と客がやってきて部屋を借りる。入場料2000円。祈祷は1～2時間から丸一日かかるものまで（もっと規模の大きな祈祷は生駒山の寺でおこなう）来る人は濟州島出身の女性で、2、3世も来る。先祖祭りや病気治しのために祈祷をしに来る。濟州島では先祖は海にいますと考えられており、ここも海とつながるところとして供物などを流す。年中行事は、1月15日は海の神を拝む日で150組くらい来る。旧暦の6月7日、8日は夜通しで海の神を拝む。これには200組くらい。7月7日は七星の日。11月7日、8日も海の神を拝む。ここへ来るポサル、スニム、シンバンは40～50人くらいいる。

〔創立〕あちこちの川べりで在日の人々が祈祷を始めたのは大正13～4年頃から。次第に便利のよいここ桜の宮に集まるようになった。戦後になってバラックを建てて拝み屋が住みついた。この人が初代。二代目もシンバンで清浦という人。三代目は現経営者宋氏の父（在日）で寄せ場をやるため権利を買取った。ここは河川敷で占拠状態が続いていることになる。先代は橋をかけたり、土地をかさ上げしたりして投資してきた。大阪府から立ち退きと代替地提供の話が何度もきたが条件が折り合わない。韓国人の宗教の場をなくすわけにはいかない、と宋氏という（調査：1989年2月12日、飯田2002:178-9）。



写真1:JR 線鉄橋からみた龍王宮(1989年・本稿の写真は全て筆者撮影)



写真2:この看板は近年大風で吹き飛ばされたという(1989年)

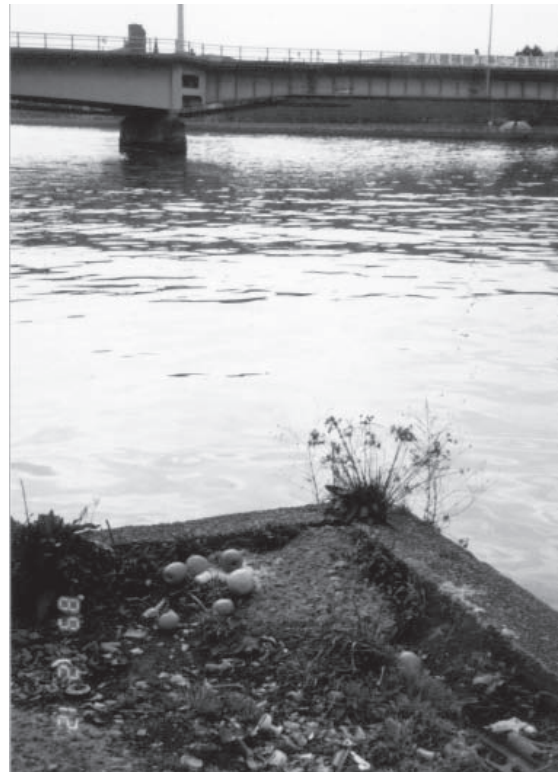


写真3:供物流しのあと(1989年)



写真4: 龍王宮とJR 桜ノ宮鉄橋 (1989年)



写真5: 近辺の古鉄街 (1988年)

もっと詳しくお聞きしておけばよかったと思うが、宋氏は、行事の内容については特に関心は持たず管理者の役割に専念されているようであった。その後「龍王宮」の看板が台風で飛ばされたりしたが、建物、設備は変わることなく、すなわち老朽化するまま今日に及び、在日の祈祷師（シンバン、ポサル、スニム）や依頼者の高齢化、世代交代などで、祈祷の回数もだんだん減少してきたようだ。2009年に宋氏は急逝されご遺族は、大阪府との立ち退き交渉に応じられたとのことである。

私は、ここまで老朽化した龍王宮が消滅するのは時の流れとも思うが、水辺でクツを行う濟州出身者の信仰は無くならないであろうし、この付近でもなんらかの形で復活するのではないかと考えている。

大川端での送神儀礼

ここで紹介する事例は、生駒山の朝鮮寺（大興院）で催された大規模なクツの最終過程の「送神」儀礼が、大川端で舟送りの形で行われたものである（1988年9月2日）。このクツは、シンバン金萬宝氏による大興院の開創儀礼として行われた。巫者であるシンバンが寺を開くことはこれまで例がなかった。同業者（シンバン、ポサル、スニム）、クライアントら150名余りの人々が参加して7日間にわたって盛大に催された。「送神」儀礼は、このクツの最終過程でありかつ長大なソナン（船王）プリの最終過程にもあたる。ソナン（船王）は、家庭でも祀られるが、「船ソナンは2トン以上の、釣船にでも使用される船であれば、どの船でも祀る。」（張 1982:94）といわれるように、漁業と関係の深い濟州島出身の人々には特に身近な神である。ソナンはトチェビともいわれ、人に憑いて富をもたらすこともあれば、急に不幸に突き落とすこともある気まぐれでやっかいな存在である。ソナンプリは、願主に憑いたソナンをもてなしつつ、願主が激しく倒れるまで舞って祓おうとする祀りである。7日目の最終日午後から、最終過程の「送神」が始まった。筆者の記述を引用する。

五時頃、玄金石（ポサル、金萬宝の妻）らが生野区の朝鮮市場で豚肉を買って戻ってくる。儀式用に一匹の豚を四つに切り分け丸ごと煮たもので予め注文しておいたものである。「豚を供えるのは、濟州島旧左面細花里のオガミの習慣。亡くなった私（萬宝）の長兄が細花里の担当シンバンだったので、自分のための儀礼でもこの豚のオガミは必ずする」という。

送神。冥錢を焼き、占う。信貴山の神にも「寺の持ち主が変わりましたので宜しくお願ひします」と祈る。豚肉を細かく切り、たくさんの皿に盛り分けて供える。秦富玉シンバン

が枕鼓を打ちながらうたう。

発泡スチロールの三つの箱を三艘の船に見立て青赤黄の帆を飾り付け、供物を入れる。一つは萬宝の船王、一つは金石の船王、もう一つは萬宝の母が担当シンバンだった兎山里・松堂里の神のためである。供物は、飯、卵、モヤシ、餅、焼き魚、精力ドリンク剤などで、船王の船にはさらに豚肉を入れる。秦シンバンが細花里の神のボンプリ（神話）をうたう。細花里の神は海に浮かばないので船送りはしない。船をミニバンに積み込む。

七時前、金保尹シンバンが小豆を外に撒いて雑鬼にふるまう。これで寺での行事はすべて終了した。お下がりの豚肉をおかず一同食事。

午後八時前、萬宝・金石夫妻とシンバン全員がミニバンに乗り込んで大興院を出発。運転は高眞隆シンバンの日本人の妻。九時前、高層ビル群がそびえる大阪ビジネス・パークの一隅、大阪城を臨む大川のほとりに車を停め、シンバンたちが船を運び出す。萬宝と金石は車から出ない。せっかく祓った船王や諸々の霊鬼たちにまた取り憑かれないためだ。シンバンたちはドラを叩きうたいながら、三艘の「船」を運河に放り込む。赤黄青の帆飾りをつけた「船」は、夜の運河の中をゆっくりと下流に消えていった（飯田 2002:132-133）。

ここでは水辺のクッは、山の寺で行ったクッの最終過程として、ソナン（船王）を祓って送り出すために、水辺の神送りが必然的に要請されたものである。



写真6：大阪ビジネスパーク付近・大川に船を流す（1989年）



写真7：川を流れていく船（1989年）

箱作海岸

(1) 海の家・幸楽センターでのクッ（1988年7月3・4・5日）：幸楽センターは、南海電鉄箱作駅から近い海岸にあって夏は海水浴客の民宿・休憩所となる。昭和38年8月1日に金宗基（金盛良夫）氏（大正14年生野区勝山に生まれた）によって作られ経営されている。同氏は、「無窮正道教」（宗教法人、生野区鶴橋2-12-7）という小さな新宗教の教祖でもある（cf. 飯田2002:170-171）。箱作にはもう一軒「ときわセンター」という民宿兼貸祈祷所がある。これは禅法寺（生野区中川2-25-6）の韓公和さんの所有になっている（cf. 飯田2002:163）。

今回のクッは、3日間にわたって行われた。願主は、Nさん（67歳、女性）その夫の弟のK氏とその妻、姉と妹も参加した。家族の人々の病気や不幸を、先祖と神々を祀って平癒、解決するためにおこなわれる。

クッを担当するのは、金萬宝シンバンとその妻玄金石、李仲春とその妻韓一春両シンバンと鄭玉順ポサル、金井継奠スニムの6名である。Nさんは、かねて親しいポサル鄭玉順さん（63歳）に相談した。鄭さんは大規模なクッはいつも金萬宝氏に頼むので今回は金氏が中心になって仕切ることになった。金萬宝氏はすでに二回この人のためにクッをしている。濟州島の有力なシンバン李仲春夫妻が来阪していたので応援を頼んだ。この時期、大阪の濟州島出身者の間でクッが盛んに行われるので、濟州島からシンバンがしょっちゅう訪れている。

初日は、神々と先祖・死者たちを呼び迎える。このとき不幸の原因となった死者たちの過失、すなわち祀るべきときに祀りをしなかったことがシンバンを通して語られる。二日目はチルチムすなわち十王祭である。死者の霊を地獄の十王の裁判を経てあの世に安らかに送る祀りである。三日目はソナン（船王）の祀りである。ソナンはトチェビ（トッケビ）とも呼ばれ（トッケ



写真8：箱崎・幸楽センター（1988年）



写真9：神霊を迎え入れるシンバン・幸楽センター（1988年）



写真10：踊ってソナンを祓う・幸楽センター（1988年）

ビはソナンの「下卒のような神格」ともいわれる（張 1982:100）、人の運不運にかかわる気まぐれな神である。トッケビに気に入られると大金持ちになるが、その機嫌をそこねるといっぺんに没落する。Nさんは海女をしていてそれが原因となって何度も気の病になったので、ソナンの祀りを特に行う必要がある。そのため今回は山の寺ではなくこの海の家で行われたのである。

(2) 箱作・普賢寺の盆行事（1986年8月26日（旧暦7月15日））：普賢寺は、1968年に大阪市生野区（勝山北5-7-39）に韓国から来た釈泰然師によって創設された寺院で「宗教法人曹溪宗総本山宗務院」の看板を掲げる。韓国の中心宗派である曹溪宗の最初の日本寺院である。在日の人々に韓国仏教を広めるセンターであるとともに韓国から来日する僧侶の滞在所となっている。信者との関係では先祖供養が主で、盆行事は重要な位置を占める。2階本堂の正面右手に先祖壇が設けられ、旧暦4月15日より読経が続けられ旧暦7月15日に紙の位牌と供物を海に流す。この年は新暦で端8月26日にあたる。なお1月15日にも寺では箱作にきて先祖供養を行う。

午前10時ころ50名余りの女性信者が本堂にあつまる。盆行事の意味を説く釈泰然管長の講和があり、先祖壇への読経のあと、先祖壇の紙位牌、飾り、供物が運び出すためにかたづけられる。昼食後、1時過ぎ管長と韓国から来た二人の僧をふくむ約60名が大型バスに乗り込んで出発。3時前、箱作に到着。10メートル幅の砂浜が堤防の前に連なっている。大阪府の海岸で自然の砂浜があるのはここだけという。すぐ海岸に降りる。海岸にごぎを敷いて紙牌、供物を置く。一同海に向かって読経。紙位牌、神仏名を書いた札を焼く。めいめいが海に向かい手を合わせながら、供物（花、餅、果物、菓子など）を海に投げる。4時に再びバスに乗り帰路につく。釈管長によると、盆行事としては、海、山、町で行う儀礼として基本的に変わりはない。ただ信者さんは濟州島出身の人が多く、海で亡くなっ



写真11：箱崎海岸での盆供養（1988年）



写真12：箱崎海岸・盆供養（1988年）



写真13：海に供物を投げ入れる。箱崎海岸の盆供養（1988年）

た人、漁をしていた人、魚への供養の意味もある。また紙牌などを焼く場所が町中では見出しにくいこともある。参加する信者にとって、海は濟州島につながる場所でもあり、望郷の思いを掻き立てられる場所でもあるのだろう。

濟州市チルモリ壇でのヨンドン祭

濟州島では、龍王祭（ヨンワンジェ）が重視されていた。龍は海の神、水の神であり、大抵



写真14：濟州市健入洞ヨンドンクッ。終了時（1983年）



写真15：濟州市健入洞ヨンドンクッ。終了時（1983年）

の漁村の堂（ダン・村の祭祀の場所）で祀られていた。昔は多くの村でおこなわれていたが、1980年代終わりころには、3、4か所くらいでしか行われていない。濟州市健入洞のチルモリ壇で旧暦2月14日に行われるヨンドンクッは無形文化財に指定されている。その最後には、〈船流し〉が行われる。2隻の船に人々が乗って海上に出て、用意された藁船を流す。（cf. 野村1987:169-197）

このように濟州島で広まっていた海の神への祀りの記憶が、濟州島と海でつながる大阪のいくつかの場所で人々が水辺の祀りを行う素地となっているのだろう。

龍王宮は、ゲリラ的に作られてきたものであり、いかなる公的団体の承認、後援を受けたも

のでもなく「民俗文化」として保護されて来たわけでもない。今般、龍王宮が消滅となっても、水辺のクッの必要性が、在日の人々の間にある限りそれは続けられるであろう。大川のほとりでも、祭祀の場はまたゲリラ的に復活する可能性があるだろう。たとえば近辺のホテルや公共施設を借りてまたは臨時のテントを張ってクッを行い、終了時に大川に供物を流すなどの形態もありうるかもしれない。あるいは少し離れた場所でクッを行い車で川辺にやってくる供物を流すことも現に行われていることである。それがどのような形で復活するのか期待を持って見続けたい。

（付記：筆者は、宗教関係者（クライアントを除く）のお名前、宗教施設の所番地を公共化された情報として明記することにしていきます。（迷惑がかかることが予想される場合は差し控えます。）それを歴史の一時期の記録として遺し、何年か何十年かあとの研究者に伝えたいと願うからです。）

参考文献

- 張 壽根（1982）、『韓国の郷土信仰』（松本誠一 訳）、第一書房。
- 玄 容駿（1985）、『濟州島儀礼の研究』、第一書房。
- 飯田剛史（2002）、『在日コリアンの宗教と祭り－民族と宗教の社会学－』、世界思想社。
- 野村伸一（1987）、『韓国の民俗戯－あそびと巫の世界－』、平凡社。
- 宗教社会学の会編（1985）、『生駒の神々－現代都市の民俗宗教－』、創元社。

チェジュサラム 大阪濟州人の祈り

—ある濟州島出身女性の事例から—

コチョンジャ
高正子 ◆ 神戸大学非常勤講師

「『神さんにやるお金はあるのに、子どもにやる金はないのか・・・』息子がいうた言葉が忘れられへんわ」

家族の健康を守るために実践してきた「祈り」¹⁾について語る濟州島出身女性Zの口から、思わず出た言葉である。本稿で取り上げるZ²⁾は、1945年12月に濟州島から日本にやって来た。移住するために日本に来たのではなく、一時的に立ち寄ったのが、そのまま日本で暮らすことになったのだ。本稿の目的は、大阪で暮らす濟州島出身女性が日常生活の中で行ってきた「祈り」の実践とその変遷について考察することにある。そこから、移住者がホスト国の文化と生得的な文化を混淆させながら生活を構築している様相を明らかにしたいと考えている。

在日コリアンの巫俗信仰に関する研究の先駆としては、生駒山周辺で展開されている女性たちの「祈り」の場として「朝鮮寺」の存在を明らかにし、その一覧を提示した『生駒の神々』(宗教社会学の会 1985)がある。この調査に参加していた飯田剛史(2002)は、1985年以降の在日コリアンの宗教活動などから在日コリアンのアイデンティティ形成とネットワークを考察した。濟州島出身の在日コリアン1世の女性たちの信仰については、金良淑(2005)の研究が参考になる。濟州島で行われている巫儀は日本でも踏襲されているが、巫儀を行う1世のシンバン³⁾が少なくなっている。そこで、巫儀を行うシンバンを濟州島から招聘して行われている現状を、金良淑

は明らかにした。宮下良子(2005)は在日コリアン1世のシャーマンが行う巫儀の事例から、これまで「母国文化を基盤」にエスニック・アイデンティティを再生産する傾向にあると見られていた在日コリアン1世が、生活世界の場では民族の境界を越えていることを明らかにした。

本稿のインフォーマントであるZは、巫儀を行うシャーマンではなく、その依頼者である。これまでの研究は巫儀を行う側からのもので、依頼する側の研究はほとんど見られなかった。それは依頼者への調査が困難であり、巫儀すらなかなか見せてもらえないのが実情だからである。その理由を金良淑は二点あげている。一つ、部外者の侵入によって巫儀の神聖さが損なわれること、二つ、「治病や厄祓いなどの儀礼の背景には家族のプライベートな事情」があるためだという(金 2005:15)。そこで本稿では、従来の在日コリアンのシャーマニズム研究では取り上げられなかった依頼者側からの視点を取り入れ、生活世界のなかで繰り広げられる「祈り」の実践を明らかにする。

1. 濟州島から日本への渡航

インフォーマントのZは1925年に濟州市の三陽面東回泉里で生まれた。村ではマンゴン(頭巾)を作る一方で、山間部であるために貴重品であったワカメを海岸の村まで歩いて買いに行き、一日がかりで持ち帰って売るといふ暮らしをしてい

た。夫は朝鮮総督府関係の船の機関長をしていた。解放後、仕事を無くした夫婦は日本に行ってアルミの器を買い濟州島で売ろうと思った。その理由は、当時「アルミの器がなかったので、濟州島で売れば商売になると思って」、とのことだった。Zは夫の船で友人2人と4人で日本に渡ってきた。しかし、玄界灘を渡る中で船が沈没しかけて死にそうになった。この時の経験から、濟州島には戻らず、日本に居座ることになった。

渡日したのは、1945年12月。Zは20歳であった。当時日本では米穀通帳の配布による統制経済の最中で、Zは親族の居住地である大阪の西成に落ち着き、区役所に申請して翌日から米穀通帳をもらって生活した。終戦直後、「一山当てて儲けよう」という話をする人たちがいて、Z夫婦もそのような話に乗って、濟州島出身の人々と一緒に山口県徳山へ行った。その儲け話というのは、空襲などで落ちた「ポツパルタン（爆発弾）」⁴⁾の破片を回収し、破片の鉄を売買することらしいが、その仕事の認可が下りず、この事業に加わった人々は、何ヶ月も許可が下りるのを徳山に滞在しながら待つことになる。そこで、生活の糧としてドブロクや焼酎を作り販売するが、それが密造酒製造として警察に摘発されることで生活は成り立たなくなった。やがて手持ちの金もなくなり、食べることも困難になり、何日間飢えることもあった。ちょうどそのとき、濟州島から日本と一緒に来た友人が徳山に米の買出しに来た。その友人が米を買うために持ってきた金を借りて、大阪への切符を買って帰ってきた。1946年、Zが22歳のときであった。

大阪に戻って西成に落ち着いたZではあったが、生活基盤がないため誰にでもできる買出しの仕事をするようになった。最初は近郊の農家から野菜を買い、それを闇市場に売り渡すという仕事をするが、野菜の売買による利潤は少ないため、より利潤の高い米を求めて近鉄電車を

使い三重の松坂や桑名、宇治山田へと遠出することにした。この時点で、それまでZ夫妻が暮らしていた西成の親族の家を出ることになり、夫の従兄弟が暮らす森町（東成区）に引っ越した。引越しの3日後、夫が高熱を發して、平和病院（在日コリアンの経営）へ入院するが、1ヵ月後に死亡する。この時夫が死亡した理由をZは、「マゲンバン」へ引越ししたためだといった。つまり、西成から森町が当時の夫婦にとっての鬼門の方向、「マゲンバン」への引越しであり、そのため夫が亡くなったとZは考えた。1948年、Zが24歳であった。

一人になったZは森町の違う家に引っ越し、買出しに勤しんだ。買出し中に電車のなかで警察の摘発にあい、米を没収され、刑務所に入れられた経験も何度かあった。濟州島から妹が密航船に乗って日本への渡航を試みるが成功せず、大村収容所に送られ濟州島へ戻るようになった。Zの親族といえば、西成に暮らす父方の叔母の姉さん一人だった。

1952年に再婚をし、小姑の家の2階に新婚生活を始める。しかし、まもなく妊娠したのでZが貯めていたお金を元手に現在の居住地である生野区に家を買って（当時10万円）引っ越した。その15日後、舅が引っ越してきて亡くなるまでの7年間同居した。出産と共にZは買出しを止め、家でできる仕事として内職の「マトメ」をした。「マトメ」は既成品の紳士服の手縫い部分を請負うもので、日本語も話せず文字も書けないZにとって、家にいながらできる最も手取り早い仕事であった。

2. 「祈り」の実践

Zが「祈り」の実践を始めるのは、子どもを出産してからである。ここではZが始めた「祈り」の実践を見ていくことにしよう。

1) サンシン（産神）ハルマンへの祈り

1953年1月に出産したZは、生まれた子どもの具合が悪くなり、朝鮮の出産・育児の神であるサンシンハルマン⁵⁾に、子どもの病気完治を祈ることにした。Zは近所のシンバン（神房：濟州島でのシャーマンを指す言葉）に頼んで、毎月3日に自宅でハルマンサン⁶⁾に祈る。ハルマンサンに供える供物は米・ワカメ3束・碗一杯の水・茶碗3杯の飯だった。このとき、茶碗の飯には箸を立てる。祖先祭祀（チェサ）のときは匙を立てるのだが、ハルマンサンのときは違うのである。このような作法や供物の準備について当初、Zの姑にその方法を尋ねたが、姑は「そんなんしたことないねん」といい、知らないという。そこで、Zは濟州島で実家の母が行っていた様子を思い出しながら準備した。最初の子が2歳になるまでハルマンサンへの「祈り」を続けた。

さて、巫俗儀礼を行うシンバンはどのような人であったのか。Zがタンゴル（専属）としていたシンバンは、姓が「金」といって近所に暮らす濟州島出身の人だった。金シンバンは巫病⁷⁾を患い、シンバンになることによって回復し、他のシンバンに付いて修行を始めた売り出し中だった。Zは知人から「イジェマツナオンシンメ（今、出たばかりなので）」と紹介され、金シンバンに依頼するようになった。以後、Zが巫儀を止めるまで金シンバンと共に祈りの実践を行うのだった。

2) 家族の安寧を祈る堂祭（タンジェ）

毎月の子どもへの祈りと同時にZは、堂祭も必ず行っていた。この堂祭をZは「パダンチェ」といい、また「カキョッティへ行く」ともいった。「パダン」も「カキョッティ」も濟州島の方言で海を意味し、「チェ」とは祭のことである。Zの生まれ育った村は、濟州市の東側に位置する中山間村⁸⁾であり、堂祭の場は村の中にあった。堂祭を行う日時は陰暦の1月14日と決められていて、当日には村の女性たちが巫儀の準備をし

た。堂祭を行うために3人のシンバンが招聘され、儀礼が執り行われる。まず、村の長をはじめとする「ノップンサラム（上の人）」から順番に礼を行い、その後、村の人たちが行く。そのとき、村人たちがお金を供え、礼をするのを幼いときからZは見ていた。

だが、日本に渡って来てからZには共に堂祭を行う村人もなく、一人で堂祭を行った。中山間に育ったZではあったが、日本では大阪の桜ノ宮⁹⁾にある河岸で堂祭を行った。以前から桜ノ宮^{チェジュサラム}では、濟州人たちが巫儀を行う場所があったからだ。その名を「龍王宮⁹⁾」といった。ここは巫儀を行う人たちに提供された場であるが、Zのように堂祭を行う人はこの「龍王宮」を借りるまでもなく、少し離れた同じ河岸にゴザを引いて行った。Zが堂祭をここで行う理由は、ここから流れる川の水が海を伝わって濟州島へ通じているからである。そして、Zには濟州島の神が自分と自分の家族を守ってくれるという信心があった。

堂祭を行う場は川に面した岸で、幅はちょうど3組の儀礼が並んで行う程度の決して広くない場所であった。多いときには後ろで儀礼が終わるのを待っていることもあった。ゴザの上に並べたワラビ・豆もやし・ほうれん草のナムルにゆで卵、飯、前日に作った餅と米を供物として海の神に供えると、シンバンは「姓は〇〇〇^{ソウアンアムカイ}で何歳になる子孫^{ミョサルトエスンチョスン}」^{チョスンドウル}と行って子ども名を一人一人あげ、厄払いの呪文を唱える。終わると、全種類の供物を少しずつ半紙（白紙）に包んで「子孫たち、あんばいしてください」と言いながら、川に流す。堂祭が終わると、シンバンとZは持ってきた供物を食べ（飲福）、謝礼（5千円程度）を渡し、電車に乗って帰る。巫儀の時間はものの30分くらいだ。時には、順番を待っている人の中にシンバンを連れて来なかった人がいると、シンバンが残って儀礼を行うこともあった。

3) 家で行う「祈り」

堂祭をはじめ巫儀を行う日時は、年初に「チェッポヌンハルバン（本を見るおじいさん）」と呼ばれる近所の済州島出身の知識人に今年の運勢を見てもらって決める。Zに言わせると占^{チョムジェンイ}い師とチェッポヌンハルバンは違うという。Zの一年間の祈りの日程は、ほとんどこのチェッポヌンハルバンが決定する。その年の運勢が悪いと、自宅でシンバンを呼んで厄を払う巫儀を行うことを勧め、日程を選ぶ。この家宅の神に対して行う儀礼をZは「プルサする」という。「プルサ」の原形は「プルサダ」で、直訳すると「火を付ける」という意味である。つまり、「火を灯す」というもので、巫儀の行うという隠語である。

日程が決まると、シンバンに予約を入れ、米一升を近所の製粉所に持って行って米を粉にする。儀礼の前日に米粉を練って餅を作り、朝早くからナムルやゆで卵を用意し、夫が仕事に出かけると、時間に合わせてシンバンと助手をする文ボサル¹⁰⁾がやって来て巫儀が始まる。朝8時に出勤した夫は5時になると帰宅するため、Zは夫が帰宅前に片付ける。朝鮮半島では長い間、儒教を国教としていたため巫俗儀礼を「迷信」として、卑しいものと考えた。そのため、儒教的教えの影響を強く受けた男性は、巫儀を好まない傾向があった。しかし、男性のなかには巫儀を目の前で見なければ、知らないことに見逃す人もいて、Zの夫もそのような人であった。そのため、Zは公然の秘密として、夫が仕事に出かけ家にはいない時間内に巫儀を執り行い、何もなかったように夫の帰りを迎えたのである。

また、子どもたちが溝に落ちたときや交通事故にあうなどのびっくりするようなことがあると、済州島では身体から「魂^{ノク シナガダ}がでる」といい、魂が戻ってくるように儀礼を行う。これを「ノットゥリ」という。Zは子どもにこのようなことが起こると、シンバンに頼んで家で「ノットゥリ」を行うが、シンバンが忙しいときなどは、自ら

が子どもの衣服を手に持ち、その子の名前をあげ、魂が戻ってくるようにと済州島の方言で祈りながら、口に水を含ませそれを衣服に吹きかける。こうして水がかけられた衣服を子どもに着せると、子どもの魂が戻ってくると信じていたのだ。

夫が病気ของときには、自らがムンジョンサン（家宅の神）に「祈り」を捧げる行為を100日間、毎日行った。夜中の2時に起床し、沐浴をした後に白いチマ・チョゴリに着替えて、玄関に水を供えて「〇〇の先祖」に、病気を治してほしいと祈ったこともある。

このようにZは、自宅でプロのシンバンによる「祈り」の実践だけではなく、自らが必要に応じて日常的に祈ることで家族の安寧が保たれると信じて実践していた。

4) 「朝鮮寺」へ通う

在日コリアン女性たちの「祈り」の実践の場が、植民地時代から大阪や奈良に至る近鉄電車の沿線に「朝鮮寺¹¹⁾」として多数建立されていたことはよく知られている（宗教社会学の会1985）。Zが「朝鮮寺」に通い始めたのは1965年頃からである。陰暦の1月15日、3月3日、4月8日の釈迦の誕生日、7月7日（七星祭^{チルソンジメ}）の年4回、近鉄の額田駅から山の中腹くらいにあった「朝鮮寺」に通っていた。夏には子どもを連れて「朝鮮寺」に行き、家族の名前をあげてプルゴン（佛供：供養）をする。プルゴンの費用は2千円で、寺でボサルや僧侶と一緒に食事をしたり、滝の水に打たれたりして一日を過ごした。通っていた寺が駅から遠いことや、駅に近い寺の金ボサルの靈感が強いというので、Zはそれまで通っていた寺ではなく、金ボサルのいる寺に通うようになった。

3. 巫儀から新興信仰へ

家内の安寧を祈る巫儀と祖先祭祀といった一

年の「祈り」のサイクルをこなしていたZに転機が訪れた。1976年、一年の運勢を見たとき、今年はとても運勢が悪いので陰暦の1月1日に家で「プルサするように」とチェックポンハルバンから言われた。それで、タンゴルとしている金シンバンに巫儀を依頼した。すると、金シンバンは答えを渋った。金シンバンはZのように謝礼が少ない巫儀を年初に行うと、一年中収入が少なくなると考えたからだ、Zは思った。30年間、ずっと金シンバンと一緒に巫儀を行ななかで親密な関係だと思っていたZにとって、謝礼が少ないという理由でためらった金シンバンの行為が、とても悲しく腹立たしかった。そこで、いつもは一度の巫儀で1万5千円謝礼として渡していたのを、「今回は金シンバンに3万円渡すので、その代わり文ボサル^{うち}を連れてこないでほしい。手伝いは私がするから」と頼んで、金シンバンの了解を得て巫儀を済ませた。

Zは、多くの在日コリアン1世の女性たちと同じように生活力のある女性であった。自宅で既製服をまつる「マトメ」を内職としていたが、内職とはいうもののZの収入は、夫が町工場で得る給料より数倍あった。それはもちろん、彼女一人の労働だけではなく、家族総出で手伝ったためだ。重要なところはZがまつるが、夫はボタン付けをし、子どもたちがポケットや袖などをまつり、また糸取りも行っていた。毎日仕事に追われながら、4人の子どもを育てつつ、家族の安寧を願う儀礼を継続することにZは、少し疲れていたのかもしれない。

このことをきっかけに、Zは金シンバンに巫儀を依頼することを止めた。ちょうどその頃、近所にいる知人から「保険の先生」を紹介された。Zの話では、知人が言うのにある生命保険に入ると販売員の女性が災いから守ってくれるというのだ。ちょうど、巫儀を行うことに疲れていたZは「プルサすることをせんへんでもいいいうたら入るわ」といい、知人に連れられて出か

けて行った。ある喫茶店に行くと「先生」と呼ばれる年配の女性がいて、Zが思いを話すと、その女性は「大丈夫よ」といった。その言葉がなぜかZに安堵感を与えた。以後、息子をはじめとする家族全員の名前の生命保険に入り、毎朝4時に自転車に乗り「保険の先生」の入れてくれたコーヒーを飲み、喫茶店へ通い、代金を払い、心配事を話して、「保険の先生」からの助言をもらって帰ってくるという生活を続けた。Zにとって「保険の先生」へ通うことは、巫儀を行うために費やす物心両面での負担が無くなったことと、Zの悩みを聞いて適切な答えを出してくれる相談者を得たことであった。

10年くらい前に「保険の先生」が亡くなり、現在は喫茶店に通っていないが、以前のような巫俗儀礼が復活することはなかった。このことについてZは「先生の神様が守ってくれるから」といい、「日本の神さんも濟州島の神さんも、神さんは一緒や」という。

4. まとめ

ここまで、一人の在日コリアン1世女性の「祈り」の実践とその変遷を見てきた。島村恭則は生活世界のなかで展開される行為を「生活当事者が自らをとりまく世界に存在するさまざまな事象を選択、運用しながら自らの生活を構築してゆく」（島村2010：279）とし、それを「生きる方法」と定義した。本稿で扱ったZは、子どもの病気などの困難に向き合ったとき、相談する姉妹や親族がいなかった。また日常の生活に追われ、在日コリアンたちによる出身村の親睦会への参加のような同郷ネットワークがなかった。慣れない異郷の地でZは精一杯生きていた。だから、危機的な状況において（子どもの病気など）Zは生まれ故郷の濟州島と結びついた巫俗儀礼によって克服しようとした。身近なシンバンを選択し、濟州島では行わなかった河岸で

の堂祭や時にはシンバンの真似をすることで「祈り」を運用しながら、自らの生活を構築してきた。そして、移住の期間が長くなることによって近代社会のシステムである生命保険制度から発生した「保険の神」への祈りを受容し、自らにとって必要な相談者を得たのだ。他方、済州島に行ったときには夫の村へ行き堂祭を行うなど、生得的な文化と近代的システムから生まれた文化の狭間を行き交いながら、「祈り」のサイクルを日常実践へと変化させていった。Zにとってのく生きる方法>が巫儀の実践や「保険の先生」との交わりのなかから明らかになった。

注

- 1) ここでいう「祈り」とは、極めて個人的な願い事をもって神に祈る行為を指している。
- 2) インフォーマントのZは筆者の母である。前述したように巫儀を依頼する側の調査は難しいため、筆者は幼いとき巫儀に参加した記憶があり、そこから母に対するインタビューを試みた。インタビューは2009年8月13日と2010年4月18日の二回に渡ってZの自宅で行った。
- 3) シンバンは漢字では神房と書き、巫俗儀礼を行うシャーマンを指す。朝鮮半島ではこのようなシャーマンはムーダンと呼ばれているが、済州島ではシンバンと呼んでいる。
- 4) ポッパルトンとZはいった。それが何であるかは本人に聞いてもいまひとつはっきりしないのであるが、空襲などで爆発した残骸を回収する仕事を請け負おうとしたようだ。当時は鉄などが不足したようで、鉄を回収して売れば一儲けできると考えたといっている。Zは結局許可が下りなかったといっていたが、この許可の出どころが日本政府なのか、GHQなのかZ自身が分かっていないようだった。ただ、当時このような儲け話はいろいろあったようだ。
- 5) 出産・産生を扱う神として朝鮮半島ではサムシンハルマン（産神おばあさん）という。サムシンは三神もしくは産神、ハルマンはおばあさんという意味だ。サンシンハルマンは12歳までの子どもを守る神である。
- 6) サンシンハルマンに祈りを捧げるための儀礼をいう。
- 7) 朝鮮半島のシャーマンには2通りある。一つは世襲

制のシャーマンであり、今一つは降神巫である。この降神巫になるときに必ず病にかかるのだが、この病を巫病という。

- 8) 済州島の村は海辺の村と山側の村との間を中山間村といった。
- 9) 龍王宮については、飯田(2002)や金(2005)に詳しい。
- 10) ポサルとは菩薩のことをいい、寺で下働きをする女性信者を指すが、巫俗の中で占いをし、シンバンを補助する役割を担う女性を指すこともある。ここでいう文ポサルも巫儀を行ったり、占いをすることもあったとZはいった。
- 11) 生駒山を中心に仏教と朝鮮の巫俗が習合した寺院が存在する。この何々寺と名乗っているが、中身は仏教的な信仰と巫俗儀礼が共存するものを一部の研究者やマスコミが「朝鮮寺」と呼んでいる。このことについては、宗教社会学の会(1985)に詳しい。
- 12) 七星祭は北斗七星を祀る巫俗儀礼で人間の寿命を司る神であり、済州島では他地域と違って単独の儀礼を行う。電子辞書内の『韓国民族文化大百科事典』の七星祭項目を参照。
- 13) Zは40数年前のことで寺の名前は覚えていないとのことだった。

参考文献

- 飯田剛史(2002)、『在日コリアンの宗教と祭り—民族と宗教の社会学』、世界思想社。
- 宗教社会学の会(1985)、『生駒の神々—現代都市の民俗宗教』、創元社。
- 金良淑(2005)、「済州島出身在日一世女性による巫俗信仰の実践」、『韓国朝鮮の文化と社会第4号』、風響社、14-54頁。
- 島村恭則(2010)、『<生きる方法>の民俗誌—朝鮮系住民集住地域の民俗学的研究』、関西学院大学出版部。
- 宮下良子(2005)、「越境するシャーマニズム—在日コリアン一世女性の事例分析」、『韓国朝鮮の文化と社会第4号』、風響社、55-85頁。

濟州島出身在日一世の習俗の断片¹⁾

ヒョンソニョン

玄善允 ◆ 関西学院大学非常勤講師

1. はじめに

僕の両親は濟州島出身で1940年頃に各々が単身で渡日し、日本全国を行商で周っているうちに青函連絡船(?)で出会い、結ばれたらしい。その後二人は、濟州島時代の地縁・血縁を頼って大阪に居を構え、僕ら4男1女を産み、育て上げた。僕は1950年生まれだから、10年ほど前に亡くなった父とは約50年、そして今も存命している母の場合は60年近く、彼らと共に生きてきたことになる。そんな二世の僕の目に映った彼ら一世の習俗を、儀式に焦点を絞って記したい。但し、様々な理由で僕らは可能な限りそれから目を背けたし、両親も僕らにあまり強要しなかったから、僕の知識やイメージは限られているばかりか歪なものに違いなく、それを在日濟州島人一世総体に敷衍できるはずもない。

さて我が家の民族的習俗を大別すると、二種類の系統がある。一つは儒教的祖先崇拜の系列、言い換えると男中心の「正統的」習俗。いまひとつは、儒教的正統からは貶められながらも、女性たちが執着し、それを支えに生きてきた観のある巫俗的系列の儀式である。

2. 儒教的系列

まずは前者なのだが、それも二つの系列に大別できる。

一つ目がホージである。正式にはチェサと呼ばれるが、両親も含めて僕ら家族はホージと呼んでいた。父の両親のそれであり、年に2回。

どちらも濟州島の宗家、つまりは父の長兄、その長兄が亡くなってからはその長男が執り行っているのだから、三男の父にはその義務はない。しかし、兄弟の中でただ一人日本に住み続けた父(父の両親や兄弟姉妹もその殆どが、植民地時代の1930年代に大阪での数年の出稼ぎ経験があったが、解放前に濟州島に戻っていた)としては、望郷の念と、生き別れのまま死に目にも会えなかった両親に対する思いがすこぶ強く、続けていたらしい。

しかし、その父の一周忌の際に、母はその二つのホージの取りやめの儀式も合わせて行い、それ以後はしなくなった。今や年末も押し迫った12月30日に行う亡父のそれだけである。

昔は、夜中の12時近くになって拝礼が始まり、それが終わるとお供えを全員で飲み食いし、残ったものはお土産として分け合って解散、つまり夜中の1時、2時まで続いたものだったが、今や我らの世代は、翌日の勤務や子どもの学校の事情などを盾に、「しきたりに忤る」としふる母を強引に説き伏せて、儀式は9時頃、解散は遅くとも11時頃となった。参加者も家族兄弟に加えて親戚、知人など多様で数も多かったが、今や僕ら兄弟の家族だけのささやかなものとなった。

二つ目が正月と8月15日の儀式である。正式にはミョンジョルと呼ぶらしいが、ぼくらは濟州島方言のメンジリのほうに馴染みがある。午前中に儀式を終えて、会食となる。時間帯が示唆しているようにホージとは性格が異なるよう

なのだが、やり方は殆ど同じだし、幼い頃の僕らには区別ができるわけもなく、どちらもホージと呼んでいた。これへの参加者も随分少なくなった。近くに住む親戚の家でもその儀式がある場合、互いに時間をずらしあって、関係者が両方に参加できるように工夫をしていたのも随分昔の話となってしまった。

以上の二つの系列はいわゆる儒教に基づくのだろうが、日本で生まれ育った僕らがその伝統的規範なるものを内面化しているとはとうてい言いがたい。生まれてからほぼ60年、毎年繰り返してきたのに、膳に並べるお供えの配列、儀式の手順すら習得していないのである。それにまた、この種の儀式では裏方仕事に忙しい母も、膳の配列はともかく、儀式の手順はうろ覚えなのだから、厄介である。そこで、濟州島から70年代に「密航」で濟州から大阪にやってきて今や晴れて「合法」の身となった従兄たちだけが頼りである。だから、彼が何らかの理由で遅れでもしたら、いらいらしながら待たねばならず、「情けない息子たち」という母の心配と小言を背に受けて、その場しのぎを続けている²⁾。

3. 巫俗的系列

次いでは、巫俗的系列なのだが、これも僕らの目からすれば二種類に大別できた。

まず「ドンドンの神さん」(木魚や鉦などで終日喧しいからそう呼び習わしていた)を招いて我が家で行われていたお祓いの儀式である。毎年、「神さん」に依頼して日取りを選び、1回につき10万円程度の謝礼を支払っていた³⁾。我が家に通っていたのは、石切の朝鮮寺の「スニム(僧侶)」夫婦だった。我が一族の「在日」の先覚者であり最長老格のおばあさんの紹介で始まり、そのまま継続していた⁴⁾。父が亡くなくなからは家で行うことはなくなり、近所の濟州島出身のおばさんたちと共同でその僧侶夫婦を招いて、我が家の近くの神崎川の河川敷で行ったこ

ともあったらしいが、その僧侶が亡くなってからは途絶えた。母たちは、馴染みがないシンバンではその気になれなかったのだそうだ。とりわけ、「在日」でこの種の習俗「クッ」が最盛期であった1980年前後に韓国から次々と来日してきたシンバンたちは、金儲け目的の「偽」という意味を込めて、「ナイロン(化繊の名前)シンバン」と呼んで、忌避していたとのことである。

そしてもうひとつが桜ノ宮の河川敷のバラックでの儀式である。ただし、時には石切の朝鮮寺でもやっていたらしい。その前日になると母はホージの時のようにいろいろと料理の準備に勤しんだ。しかし、なにしろ僕らの知らない別世界で行われていたので、その儀式の内容どころか、母が作っていた料理の内容も殆ど覚えていない。但し、唯一記憶に鮮明なのが、大量のゆで卵。料理の一部は儀式が終わると母が家に持ち帰ってくれて、とりわけゆで卵の大盤振る舞いは当時の僕らには珍しいご馳走で、その記憶だけが突出して他のものは消えてしまったのだろう。

さて、その儀式の現場に僕は長じて後に(大学生の頃、つまり1970年前後)母と料理などを車に乗せて何度か行ったことがあり、現場の断片くらいは目にすることになった。母の命を受けて不承不承ながら、ともかく桜ノ宮駅近くの大川沿いで母を降ろす。そこまではいつも同じなのだが、その後についてはいくつかのバリエーションがある。その一は、長時間待って母を乗せて家に帰る。その二、そのまま母を残して帰宅。その三、料理などの入った風呂敷包みを抱えながら母に従って、龍王宮まで足を踏み入れた。当時はそんな立派な名がついているなんて全く知らなかったのだが。

その三についてはさらに二種類のバージョンに分かれる。河川敷から10メートルほど離れたところに中洲があって、河川敷の水際とその中洲の水際の両方に竿が立てかけられ、竿同士が

紐で結ばれている。河川敷の竿を振ると、中州の竿に伝わり、竿の天辺に付けられた鈴が鳴る。すると舳が迎えにやってくる。母は僕から包みを受け取ってその舳に乗り込み、「もうええから、あんたは帰り」と言って中洲に向かう⁵⁾。

もうひとつのバージョンは、河川敷を歩いて川べりのバラック群の中へ。すると、その昔、我が家の近くの数箇所にあった朝鮮部落（鳥小屋とも呼んだ）が蘇ったような感じで、バラック間の狭くてじめじめとした路地を進み、その薄暗いバラックの一つに足を踏み入れたとたんに、裸電球に照らされて、わいわいがやがやと賑やかなおばさんたちが「やあ、あんたも来たんか、えらいなあ」とにこやかな顔と明るい声で僕を労ってくれた。既にあちこちで見知っていたそのおばさんたちの言葉と視線を受けて、照れ笑いをしながらそそくさと包みを置いて、逃げるように帰った。

以上の二つの巫俗的系列は、妻が夫に反対されながらひそかに、或いは、希には協力を得たりして、続けられていたようである。そして、祭祀も含めてそうした行事に積極的に関わる奇特な二世三世の嫁はよくできた嫁、そうでない場合は、「私の運命（ばるちゃ）や、それでも何であんたらの嫁さんはみんな「偉い」女たちやねん」などと、二世の息子達は、一世の母たちの愚痴や攻撃に立ち往生するというのが一般的なのではなかろうか。

ところで、表の習俗である祭祀（男中心の世界）の場合と、裏の習俗であるこの種の「クッ」（女中心の世界）とでは、その伝承の程度には大きな違いがありそうである。前者は何といても正統というわけで、強制力が強いから引き継ぎが生じやすく、それを引き受けて内面化するのが子どもの務めと思いつる後続世代もあり、あげくは民族的伝統の砦などと称揚されたりすることもあるが、後者の場合は、そもそもが「女」の、しかも「裏」の世界といったわけで、後続世代

の男も女もそれを引き受けるということは殆ど起こらない。やはりこの世は、「男」の、しかも「民族的」伝統なるものがそれなりに幅を効かしているようである。

とはいえ、この女たちの結びつきは、少なくとも彼女達にとっては極めて実際のな効用を保持している。母は一時期、夜間中学へ通っていたのだが、その仲間の多くが龍王宮仲間と重なるし、体調その他の理由で今や家に閉じこめることを余儀なくされている母やその友人たちの介護に訪れるヘルパーさんたちも、龍王宮仲間の娘さんである。といったように、濟州島出身の女達の血縁、地縁関係、それに加えて、殆ど文字の読み書きができないといった知的・社会的資産の同質性が織り成すネットワークは、「クッ」が廃れた今でも生き延びており、彼女たちが生きている限り、不可欠のライフラインとして機能しそうなのである。

4. 混交、或いは総合としての葬儀

以上の二つの流れがあり、それらは対立しながら両立したり、場合によっては、混交しているというのが在日一世の習俗の世界のようのだが、その混交が見事に露呈したのが、我が父の葬儀に関わる一連の行事だった。

両親はずっと以前から、葬儀は家の近くの我が家の「コウバ」の裏手にあるお寺で行うことに決めていたようである。彼らの在日生活の「城」である「コウバ」を「見守ってくれた神さん」に見守られて永遠の眠りに、というわけなのだろうか。ともかく、その日本の仏教寺院での通夜と葬儀の過程の随所で朝鮮式らしきものが混じる。例えば、僕ら遺族は両親がしつらえてくれていた麻のパジ・チョゴリ、チマ・チョゴリ、そして麻の帽子を着用し、仏教式の祭壇の手前に朝鮮式の膳を据えて両方に礼をささげ、霊柩車が発発する際には、濟州出身の父の近し

い友人の指示で、「杯を割る」などの儀式も行った。ついで翌日には、僕は母に従って家の近所の神崎川で、父の遺品その他を焼いて川に流し、札をささげもした。それで終わりかと思いきや、それから程なくして、生駒の朝鮮寺で大掛かりな儀式をする羽目に。僧侶が祭壇の前で、僕なんかにはまがまがしく感じられる踊りを舞ったりの終日の行事で、その昔の「ドンドンの神さん」の儀式を大掛かりにした感じで、費用は100万円を越えたような記憶がある。

その後も折に触れて、骨を預けてあるお寺でお祈りをしてもらい、法話を拝聴し、実家に戻って儒教式の膳の前で拝札を繰り返した。そしてその極めつけが、濟州島のお寺での儀式である。

父は生前、まぶたの故郷である濟州島に土葬されることを強く望んでいた。しかし、母は僕たち子どもに命じて、父には内緒で日本に墓地を確保させた。僕たちの韓国在住の異母姉妹たちとの関係など、後々まで問題を引きずりはしまいかと懸念してのことだった。ところが、一年後に事態が急転した。その間、母は亡夫との対話を続けていたらしい。「昨日も夢でオトちゃんがえらい怒ってた」などと母は僕らに憔悴しきった顔つきでもらすのだった。そしてある時だしぬけに、濟州島に父の墓を作ることに決めたと、母は僕に告げた。「あんだけ濟州島が好き人やってんから」と付け加えもした。

韓国の宗孫である従兄がいつからか仏教に入れ込み、濟州島の山腹の大きな禅寺に通いつめており、そのお寺が大規模な墓地を造成しているという話が、その話を加速させた。というより、そうした情報が母に翻意を促したのかもしれない。ともかく、その墓地に日本式に似せた墓を作ることになった。というわけで、僕ら家族、ならびに親戚などが大挙して父のお骨を抱えて濟州島へ向かった。禅寺での納骨の儀式に参加し、同じ仏教とは言え、日本のそれとは随分異

なる儀式の展開にうろたえ途方にくれたりしながらともかくそれを終え、そのついでに、観光バスを借り切って、濟州観光を共にするという、我が家では珍しい大行事をやったのけた。久しぶりの一族の再会が、そのように母と亡き父との関係プレーで果たされたわけである。

5. まとめに代えて

といったように万々歳なのだが、そのようにすべてを仕切り、「あんたらも入れるように大きな墓にしてもらおう」と言っていた当の母が、今では父のお墓に入る気など失くしてしまっている。「あんたら近くで眠りたい」と母は言う。といったように、伝統的、民族的習俗などと言っても、時代に応じて変化してきたし、同じ一世でも男と女の間には大きな差異や軋轢があり、とりわけ、一世と二世との間には更に大きな軋轢と争闘があつて、僕ら二世は彼ら一世の心のうちなど、とりわけ「因習的な上に無知で物言わぬ女たち」のそれなどは全く分からないままに、というか、分かつとせずに生きて来たようである。当事者たる女たちの「祈り」と生活の絡み合いを拾い上げる作業はどのようにすれば可能なのだろうか。それを明かす糸口はある。彼女らが植民地下の濟州島で学校教育を介さずに、家庭や村落の関係と労働によって形作った心的世界、そしてそれが異郷たる大阪の生活で被った変容とを丹念に跡づけることによってその輪郭を垣間見る事ができるに違いない。僕も遅まきながら、その作業に着手し始めている。

注

- 1) 青丘文庫研究会月報(2009年7月)および龍王宮祝祭(2009年8月)の際に配布された拙文(玄2009a、2009b)と重複している部分については本文では簡略化しているので、関心をお持ちの方はそちらも合わせて読んでいただきたい。
- 2) 「在日」の祭祀(チェサ)については民族主義的伝

- 統の伝承の時空として高く評価する向きがあるのだが、そうした捉え方に対する違和感、及び反論を以下で詳しく記しているのので、参照いただきたい（飯田 2003、玄 2003）。
- 3) 子供の目に映ったその行事の「奇怪」な模様については、拙著、『在日の言葉』（同時代社）で詳細に記述しているので、そちらを参照いただきたい（玄 2002:93-95）。
 - 4) 祖父の妹で、1920 年代初頭に単身で大阪に来て、その後、我が一族の成員が大阪で滞在する際の基地の役割を果たしていた。我が家の近くに住み、頻繁に我が家を訪れ、僕ら子どもたちを監視し、叱正するなど、君臨していた。僕らはハマニ（お祖母さん）と呼んでいた。
 - 5) この中州は現存しないので、記憶違いなのかと危ぶんでいたのだが、塚崎昌之氏が探し出してくださった当時の地図には紛れもなくその小島があった（塚崎 2009）。河川敷から見て龍王宮の右側にある公園地帯は、河川敷とかつての小島との間を埋め立ててできたものである。記して塚崎氏に感謝したい。なお、その小島のバラックに居住し、「クッ」の会場として賃貸し、「渡し船」商売も兼ねていたのは年配の日本人男性で、市の要求に応じて逸早く立ち退きしたらしい、との僕の母は言っている。
 - 6) 例えば、玄（2009c）を参照。
- 玄善允（2009b）、「在日二世から見た、濟州島出身在日一世の習俗の断片－大川端の「竜王宮」にまつわる記憶の断片－」、『龍王宮祝祭資料』（2009 年 8 月 22 日）。
- 玄善允（2009c）、「植民地地域交流史研究に関する一考察－ある濟州島人一族にとっての大阪と教育－」、『植民地期東アジアの近代化と教育の展開－1930 年代～1950 年代－』、2006～2008 年度科学研究費補助金基盤（B）（研究代表者 磯田一雄 課題番号 18330174）、263-290 頁。

参考文献

- 飯田剛史（2003）、「玄善允氏の書評に就いて」、『アジア・フォーラム』、第 26 号、27 頁。
- 塚崎昌之（2009）、「龍王宮をめぐる歴史－大川・海女・朝鮮寺－」、こりあんコミュニティ研究会第 7 回定例研究会報告資料
- 玄善允（2002）、『「在日」の言葉』、同時代社。
- 玄善允（2003）、「書評、飯田剛史著『在日コリアンの宗教と祭り－民族と宗教の社会学－』」、『アジア・フォーラム』、第 26 号、24－26 頁。
- 玄善允（2009a）、「二世から見た、濟州島出身在日一世の習俗の断片－大川端の「竜王宮」にまつわる記憶の断片－」、『青丘文庫月報』、第 234 号。

桜ノ宮龍王宮の最後のクツ

『Platform』 (24) 2010

全ウンフィ

사쿠라노미야 용왕궁의 마지막 곳

전은희



그렇게 또 하나의 이야기가 사라졌다. 2010년 7월 19일, 긴 장마가 끝나고 기온은 32도까지 치솟았다. 그날 밤의 달은 대기의 먼지들이 씻겨 내려간 듯 흰색으로 빛났다. 오사카(大阪) 시내를 순환하는 오사카환상선의 작은 역 사쿠라노미야(桜ノ宮) 철교 아래, 그곳에서의 마지막 접신은 그렇게 끝났다.

오사카환상선을 이용하며 주의 깊게 관찰해온 사람들에게는 하나의 수수께끼나 다름없던 그곳의 이름은 용왕궁이다. 그곳의 풍경을 아름답게 수식할 생각은 없다. 사쿠라노미야 역 바로 아래 위치한 그곳은 오카와(大川) 변에서 운동하는 사람들이 애용하는 자판기 너머에 있다. 대충 둘러친 담장의 간이문을 열고 들어가면 기이한 풍경이 눈앞에 펼쳐진다. 함께 갔던 오사카 친구는 몇 번이고 여기가 정말 오사카가 맞냐며 되묻기도 했다. 무성한 잡초와 연대를 알 수 없는 폐품들, 플라스틱 재활용품부터 가구와 가전까지 '방치되었다'라는 표현이 어울릴만한 잡동사니들이 사방에 뭉뚱그려져 있다. 폐품과 잡초더미를 지나 철교 밑을 통과하면 슬레이트와 합판, 그리고 어디선가 주워온 듯한 문짝들로 기워진 임시건물이 늘어서 있다. 일명 판잣집, 풍경이



라는 이름과는 한없이 동떨어진 곳이다.

그런 용왕궁에서 마지막 곳이 열렸다. 그곳의 곳은 1920년대부터 열려왔으며, 1970~1980년대에는 한 회에 서른 번 정도의 곳이 한꺼번에 열릴 정도로 성황을 이루었다고 한다. 물론 이때의 곳이란 우리가 아는 그 곳이다. 그리고 그 의례의 주체는 오사카의 재일한국인 밀집지역 이쿠노구(生野区)의 대다수를 차지하는 제주도 출신들, 그중에서도 여성들이었다.

그동안 재일한국인 여성들에 대한 연구는 그들의 생애나 직업에 관한 연구를 통해 조금씩 밝혀져 왔지만, 정작 사적인 부분에 해당하는 그들의 삶이나 가정의 애환은 그들 안에서 존재하다 사라져 가는 것이 보통이었다. 용왕궁은 그러한 사적인 이야기가 수없이 되풀이되던 공(共)적인 공간이었다. 물론 그곳을 통해 여성뿐만 아니라 가정의 구성원들도 소위 이러한 무속신앙을 인정하고 기꺼이 그 의례를 계속 관철해왔던 점을 관찰할 수 있다. 그러나 그러한 뜻을 전달하여 의례를 준비하고

신방무당의 제주도식 표현과 긴밀하게 연락을 취해 실제 의례에서 전달자 역할을 하는 사람은 가정 내 여성이었다. 무속을 통해 가정의 애환과 그녀들의 근심이 해결되었는지는 모르겠으나, 우리는 그곳에서의 무속의례가 여성들의 이야기를 통해 전해지는 어떤 애환과 가정사 속에서 존재했음을 이해할 필요가 있었다.

하지만 얼마 후 그곳은 스러져가고 있었다. 기온이 36도를 넘나들던 8월 초, 해체작업을 시작한 인부들은 극심한 더위에 호스로 물을 뿌리고 사무실을 부수기 시작했다. 그곳과 오십여 년 동안 연을 맺어온 여신방은 가루와 고철과 먼지가 날리는 공사현장의 한쪽에서 용왕궁과의 마지막 인사를 나누고 있었다. 지난 날 그곳에서 한국어로 신과 읊조리고 의뢰자에게 일본어로 그것을 다시 전하는 삼중의 통역을 행해오던 그녀였다.

용왕궁이 언제부터 제주도 출신 재일한국인들의 성지로 자리 잡았는지는 정확하지 않다. 근 대화와 전쟁 사이에서 일자리를 찾아 오사카로 떠



철거되는 용왕궁(좌) / 철거된 용왕궁 터(우)

나온 지방 혹은 조선인들은 도시공간의 빈 곳에 설 자리를 만들었고, 그중에서도 강변이자 교통이 편리한 그곳에서 1920년대부터 암암리에 한두 명씩 의식을 행해왔다. 그것이 이어져 패전 이후에는 아예 곳을 위한 장소로 자리 잡기 시작했다. 1974년에는 재일한국인인 T씨가 판잣집과 토지권리를 사들여 곳을 위한 공간을 대여하는 한편, 고물수거업재일한국인의 주된 업종 중 하나을 위한 작업장을 만들고 그곳에서 일하는 인부들의 함바(飯場)정주가 없는 일용노동자들을 위한 일종의 기숙사를 만들기도 했는데 이것이 용왕궁의 탄생이었다. 앞서 언급했듯 그곳에서 1970~1980년대의 가전제품들을 볼 수 있었던 것도 또한 이와 무관하지 않을 것이다. 이후 일본사회의 급격한 경제발전과 함께 고물수거업도 큰 변화를 맞이하게 되었으며, 인부들의 기숙사는 서서히 곳의 장소로 흡수되어 갔다. 새로운 사용자들에 의해 부적이 붙여지고 낫그릇과 촛불이 놓이기 시작했으며, 아침식사를 배달해 주는 가장 가까운 카페의 전화번호가 암호처럼 쓰이기도 했다. 하여 고물을 수거하던 곳이자 신들을 접하는 공간이라는 암묵의 룰 아래 모든 것들이 현대기술의 손길이 닿지 않은 채 그대로 남겨질 수밖에 없었다. 도무지 현대의 도시 오사카에 있다고 믿겨지지 않는 불법점거지역이자 폐기물 불법투하지역, 위생적이지 않고 논리적

이지 않은 용왕궁은 이렇게 퇴적되어 왔다.

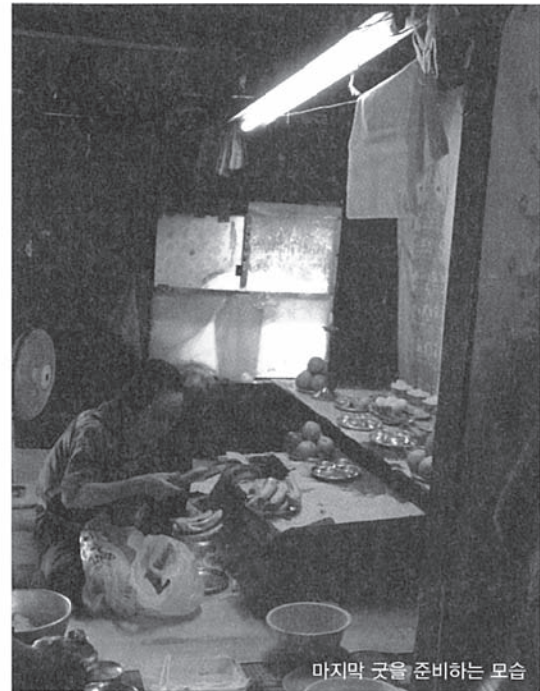
그리하여 용왕궁은 오사카의 명물인 7월의 텐진마츠리(天神祭)일본의 대표적인 마츠리 중 하나로 마츠리란 신에게 제사를 지내는 의식을 의미를 구경할 수 있는 숨은 명당인 동시에 오사카 시의 입장에서는 불법점거물이자 오키와를 관할하는 오사카 부(府)의 골칫거리가 되기도 했다. 그러나 점거나 철거냐를 두고 수십년간 팽팽하게 버텨온 실이 끊어진 것은 작년 1월, 관리자인 재일한국인 T씨의 아들이 갑작스러운 죽음을 맞이하면서였다. 일 년여 동안 관할부서의 강압적인 태도에 맞서왔던 유족들은 결국 강제철거보다는 차라리 '재일한국인'으로서 스스로 용왕궁을 부수는 선택을 하는 수밖에 없었다. 하여 일주일에 한두 번 끌로 열려온 곳과 그 이야기들은 이제 다른 장소를 찾을 수밖에 없게 되었으니, 용왕궁과 그 기억들은 어디로 가야할 것인가.

한편 텐진마츠리 날인 7월 25일, 용왕궁의 실체를 마지막으로 확인하기 위해 오십여 명의 사람들이 스러져가는 건물로 들어섰다. 다다미 위에는 비 오듯 흐르는 땀과 열기를 날려버리기엔 너무도 낡은 선풍기 세 대가 힘없이 돌고 있었다. 그러한 가운데 용왕궁에서의 마지막 축제가 열렸다. 그 조악한 불법점거지역에서 축제는 이름의 모임을 기획하고 지역신문 등에 홍보를 도맡아 온 사람

들은 다름 아닌 대학 관계자들로 구성된 코리안커뮤니티연구회였다. 그들은 작년 2월 우연히 용왕궁과 조우해 용왕궁프로젝트라는 이름으로 그곳을 기억하기 위한 활동을 천천히 벌여왔다. 대학의 학자로서 할 수 있는 작업들은 물론 다큐멘터리 활동가와 인권운동가, 재일한국인운동가, 이주민 방송관계자, 전문연구자 등의 다양한 배경을 가진 사람들을 대상으로 하여 용왕궁을 기억하기 위한 자발적인 집단을 만들어온 것이다. 물론 연구회 자체는 대학 관계자가 중심이지만 그 자신을 용왕궁을 정의하는 전문가로 칭하기 보다는 다방면의 전문가들을 한 데 묶음으로써 의미를 만들어내려 한다는 점은 특기할만한 하다. 진실을 밝히는 권위로서의 대학이 아닌, 네트워크의 연결고리처럼 다층적인 지(知)의 접합점이라는 이야기다.

더불어 또 하나의 축은 역시 용왕궁일 수밖에 없다. 용왕궁이라는 장소 자체가 물리적 흔적으로서 모든 사건을 가시화하여 기억한다. 그리고 아이러니컬하게도 그 장소가 사라질 위기에 처하면서 다층의 지식들이 위기를 인식하고 시선을 모으게 된 것이다. 분야의 차이는 용왕궁의 위기 앞에서 의미를 가지지 않는다. 이때 용왕궁은 하나의 접합점이 된다. 그러니까 그 접합점으로 향한 시선들을 하나로 묶는 집단이 때마침 나타난 것이다. 그리하여 용왕궁의 모든 의례와 역사는 다양한 전문가들에 의해 자발적으로 기록되기 시작했다. 예술가들^{첫 축제인 작년과 올해 모두 예술가들이 참여 또한 용왕궁에 모여 되풀이 되어온 그 이야기들을 전하며 위로하곤 했다.}

25일 밤 아홉 시쯤 날씨는 여전히 후덥지근했다. 텐진마츠리와 용왕궁, 두 축제는 끝이 났고 참가자들은 현실세계로, 위생적이며 합리적이고 합법적인 세계로 돌아갔다. 자전거와 조깅하는 사람들이 주변을 달리고 매년 7월의 셋째 주 일요일마다 하나비(はなび)^{불꽃축제}가 열리며, 연인들과 가족



마지막 곳을 준비하는 모습

들과 타코야키 노점상들이 즐겁게 떠도는 세계로.

그러나 이후 용왕궁은 세 차례의 해체작업을 거쳐 8월 19일 완전히 해체되고 말았다. 그 날 현장에서는 오사카 부 관계자 및 T씨의 유족 간의 현장 확인 및 양도가 진행되었다. 그것을 끝으로 법적으로 존재하지 않던 장소는 이제 물리적으로도 존재하지 않는 장소가 된 셈이다. 하지만 나와 용왕궁축제의 참가자들은 그곳의 마지막 곳을 기억한다. 그리고 이렇게 각자의 지식으로서나마 그 마지막 곳을 전하거나 기록할 것이다. 현대의 생활에서는 이미 존재하지 않는 듯 보이는 비위생적이고 비합리적이며 비합법적인 것이 사실은 실체로서 존재해왔고 또 몰래 부서져가고 있다는 것을. 또한 그것은 어딘가에 다시 생겨나 또 다른 이야기들로 드러나게 되리라는 것을. ♪

이미지 제공_ 코리안커뮤니티연구회 용왕궁프로젝트

金璽輝 1982년 부산생. 오사카시립대 문학연구과 아시아도시문화학 석사과정. 최근 글로 「초국적 지역문화 복지공간」, 「술모없기에 아름다운 것」 등. diolima31@naver.com

日本語訳

そしてまた、一つの物語が消えていった。2010年7月19日、長かった梅雨は終わりをづけ、気温は32度まで急上昇した。大気のはこりが雨に洗い流され、月は白い光を降り注いでいた。その日、大阪市内を循環する大阪環状線の小さな駅、「桜ノ宮」の鉄橋の下では、おそらくそこでの最後の降臨がいつものように普通に始まり、そして終わった。

大阪環状線を利用する注意深い観察者にとって一つの謎であった「あの場所」の名前は龍王宮である。ここの風景を美しく修飾するつもりはない。駅の高架下の空間である龍王宮は、大川河川敷のランナーたちが一息をつく自動販売機の向こう側に位置する。適当に張られたフェンスの扉を押して中へ入ると、不思議な光景が目の前に広がる。同行した大阪のともだちは「ここが本当に大阪なの」と何回も聞きなおした。繁茂した雑草から年代不明の廃品、プラスチックのリサイクルゴミ、家具、家電まで、「放置された」と書いてもいまいようなガラクタが山々に積まれている。廃品と雑草の山を後にして鉄橋の下を通り抜けると、トタン葺のバラックが2列に並んでいる。風景という表現とも、龍王宮という名称とも離れたミスマッチがその場所にはある。

この龍王宮で最後のクツが行われた。1920年代のある日から2010年の7月まで、この地ではクツが行われてきた。1970～80年代は一回で30組のクツが同時に行われたというぐらい盛況だったらしい。もちろん「クツ」とは我々になじみの深いあの「クツ」のことだ。そしてその儀礼の主体は大阪に住んでいる在日朝鮮人である。その中でも、在日朝鮮人の密集地域である生野区の大多数を占める済州島出身の人たち、特に女性である。近年在日朝鮮人女性に関しては、彼女たちのライフヒストリーや職種に関する研究などを通して少しずつ光が当てられている。しかしその一番私的な部分、彼女たちの生活、彼女たちが守ろうと骨を折っていた家庭内の哀歎の物語は、陽の目を見ることなく彼（女）らの間をぐるぐる回り、何事も無く消えてゆく。

龍王宮はその私的な物語が数え切れないほど語られてきた共的な空間でもある。この場所の存在は女

性を含む家庭の構成員がいわば民間信仰を認め、自ら儀礼の継続を願い、その意志を貫徹してきたことを示す証でもある。しかしそれだけではない。その意志を伝え、儀礼の支度をし、シンパンやムダンの済州島方言で緊密に連絡を取り合い、実際の儀礼における伝達者の役割を果たしていたのは家庭内の女性であった。民間信仰を通じて実際家庭の哀歎と悩みが解決できたかどうかは我々にはわかりようがない。一定の期間、この場所で民間信仰の儀礼行為が、ある哀歎と家庭史をもって存在していたことを理解する、それが我々に任されたものだ。しかしこの文を書いている今（2010年8月4日）、ここは壊されてゆく。

気温は36度。解体作業を始めた人夫たちは蒸し暑さの中、水を巻きながらかつての事務室を壊していった。この場所と50年以上を付き合い、クツをしていなければどうかなりそうに衰弱したポサルは粉と鋼鉄と埃が舞い上がる工事現場の片隅で龍王宮と最後の挨拶を交わした。過去の彼女は、韓国語で神と吟ずってそれを依頼者に日本語で伝える、3重の通訳を何回もここでやってきた。

いつから龍王宮が済州島出身在日朝鮮人の聖地になったかは明確ではない。朝鮮人もしくは地方の人たちは近代化と戦争の狭間で仕事先を求め、生まれた村を立ち去って大都会大阪へ向かった。河川敷に象徴される都市空間の隙間は、彼・彼女の休むところとして見つけ出された。その中でも交通の便がいいこの空間で、1920年代から一人二人が暗々裏に儀式を行いはじめた。それが戦後、クツのための場所、占屋に転化した。1974年、在日朝鮮人のT氏はこのバラック小屋の土地の権利を買い取り、寄せ屋の作業場とそこの人夫の飯場を設けた。龍王宮の誕生である。その後、日本社会の急速な経済発展とともに古物業自体も変化を余儀なくされ、労働者の宿舎は拡大する儀礼の場所へ吸収された。いたるところに70～80年代の家電が見当たるのはそのためである。かつての簡易宿舎には新しい使用者により護符が貼られ、鉄皿と蝋燭がおかれ、モーニングを運んでくれる最寄りのカフェの電話番号が暗号のように

書かれた。もともと古物屋である上、神が付いている空間という暗黙のルールが加わり、全てのものは現代技術の手のつかないありのままの姿で残された。現代都市大阪とは信じられない、不法廃棄物投下地域の、バラック小屋の、非衛生的な、非論理的な、龍王宮はこのように堆積されてきた。

水都大阪、夏の風物詩天神祭りの隠れ鑑賞スポットである龍王宮は、同時に大阪市の土地の不法占拠物であって、大川を管轄する大阪府にとっては厄介者でもあった。占拠か撤去か、数十年間にわたる平行線が一方に傾いたのは昨年1月、管理者T氏（上述のT氏の息子）が突然の死を迎えて以来のことである。遺族は1年以上続く大阪府の強圧的な態度に耐え切れず、結局「在日朝鮮人として」、強制立ち退きされるなら自分で壊す選択肢を選ぶことになった。週1、2回行われてきたクツとその物語は他の場所を探さないといけない。それならば、龍王宮とその記憶はどこへ向かっていくのだろうか。

2010年7月25日、天神祭。50名を超える人々が龍王宮の実体を最後に確認するため、滅びかけている建物の中の古びた畳の上に座った。部屋をみずばらしく回る古い扇風機の風は、真夏の蒸し暑さを吹き飛ばすには貧弱極まりない。その中で「最後の龍王宮祝祭」が行われた。この劣悪な不法占拠地域で祝祭という集いを企画し、地域紙にも掲載できるよう電話とメールとプリンターを働かせていたのは大学の人であった。

その人たち、こりあんコミュニティ研究会は2009年2月龍王宮と遭遇し、ここを記憶するための活動を龍王宮プロジェクトという名称を持ってゆっくり、そして少しずつおこなってきた。研究者はもちろん、ドキュメンタリスト、人権運動家、在日朝鮮人運動家など、多様な背景を持つ人々が、消えてゆく龍王宮を記憶するための「仕事」を自発的に継続させてきた。もちろん研究会自体は大学関係者が中心となるのだが、団体の活動は知識を持って龍王宮を定義する専門家としてというより、多方面の専門家たちをたばねてゆく中間者として参与しているところが大きい。真理を掘り起こす権威としての大学より、ネットワークの

かすがい、多層の知の接合点として龍王宮とそのコンテクストにかかわっている。

そしてもう一つの軸はやはり「龍王宮」だ。「龍王宮」という場所が物理的な痕跡としてすべての事象を可視化させながら記憶している。そして一アイロニカルだが—その場所が無くなる危機に置かれたときにこそ多層の知が危機を認識し、その場所に目移った。分野の違いはその危機の前では意味を持たない。その瞬間、龍王宮は接合点となり、そこに集まった複数の視線をくくりあげる団体が運よくも現れた。今、龍王宮の儀礼と歴史は多様な専門家により自発的に記録されはじめている。アーティストたちは龍王宮に集い、繰り返されてきた物語たちをなぐさめ、芸術の言語で語りなおす。

7月25日9時、気温が27度に達する蒸し暑い熱帯夜の夏、二つの祝祭は終了し、参加者は現実世界に戻った。衛生的で合理的で合法的な世界へ。自転車とランナーが周辺を走り、毎年7月の3週目の日曜日は花火が行われる、恋人と家族とたこ焼きの匂いが楽しく漂う世界に。しかし私は、参加者は、最後のクツを覚えている。そして筆者は本誌に、そして他の人は各自の知を持って龍王宮の最後のクツを伝える。現代的生活世界ではすでに存在しないように見える、非衛生的・非合理的・非合法的なものが実は実体として存在してきて、こっそり壊されていって、そしてそれはどこかでよみがえり、また別の物語が交わされるようになるという事実を、自分のできる方法で記録してみるのだ。

追伸：8月4月から18日までの間、龍王宮の解体作業が進み、8月19日の午後、綺麗に整理された現場で大阪府関係者と管理者（T氏の遺族）間の現場確認および権利譲渡の手続きが行われた。これを最後に、法的に存在しなかった場所は物理的にも存在しない場所に帰した。

参考文献

- こりあんコミュニティ研究会、『コリアンコミュニティ研究（1）』、2010
- こりあんコミュニティ研究会、『龍王宮祝祭』（パンフレット）、2009



定例研究会報告

編集委員会

■第14回定例研究会(参加者16名)

5月29日に桜之宮龍王宮で開催された。島村恭則氏(関西学院大学)の方から、「引揚者が生み出した戦後日本の社会空間と文化」というタイトルで報告が行われた。『〈生きる方法〉の民俗誌—朝鮮系住民集住地域の民俗学的研究—』(関西学院大学出版会、2010年)にまとめられているように、島村氏はこれまで民俗学の立場から在日コリアン集住地域の調査・研究を行ってきたが、今回は、戦後、日本に留まることになった在日コリアンの一方で、満州や樺太、朝鮮半島などから日本に戻ってきた人々の生活実践を明らかにするものであった。引揚者については、引揚げ体験や抑留体験、旧植民地時代の生活についての研究がある一方で、引揚げ後に各地で展開された生活実践(民俗)についての研究はほとんど行われておらず、今回の報告はパイオニア的な研究であると思われる。報告では、氏の軽快なフットワークでこなしたフィールドワークを通して、戦後の引揚者向け住宅が集まった「引揚者のまち」や開拓地域の現状、そして引揚者たちが独自に生み出した食文化や起業家精神などが説明された。これまで個別に語られていた引揚者の状況をつないでいくことで、引揚者が生み出した社会空間や文化の意味を明らかにしていった。報告に対しては、引揚者の出身地について、引揚者の文化やコミュニティの引き継がれ方、在日コリアン集住地域と引揚者の集住地域との関連性などの質疑があり、さらには公営住宅政策や社会福祉法人の成り立ちを考える上で「引揚者」に注目する意義などが提起された。

■最後の龍王宮祝祭・速報

7月25日(日)に「最後の龍王宮祝祭-もうひとつの水都大阪2010-」が開催された。当日は関西圏以外からの方も含めて60名をこえる参加者があった。まず開会の挨拶のあと、龍王宮の最後を記念して、朴明子氏に一人芝居「柳行李(やなぎごうり)の秘密」を演じていただいた。続いて、この間の「龍王宮プロジェクト」によるフィールドワークや聞き取りでわかった事実も含めて、塚崎昌之氏が龍王宮や大川近辺の歴史を解説し、また、龍王宮に関連する映像として、NHK特集「済州島-母なる島への帰郷-」(1982)やNHKドラマ「李君の明日」(1990)、そして2010年7月19日に行われた、龍王宮最後のクッの映像(金稔万さん撮影)も流された。その後、管理人の韓秀子さんの挨拶のあと、参加者全員で龍王宮について語り合った。祝祭の最後として、川沿いのテラスで祝宴を行ない、天神祭の「奉納花火」や大川での船渡御を見ながら、龍王宮の最後を見送った。



一人芝居「柳行李」の様子



天神祭を見ながら龍王宮の最後を見送る

「龍王宮」の最期

——形はなくなっても未来の記憶に生きる——

- 「立入禁止!」 ●豊かな生態系
- まだまだわからない「龍王宮」の歴史 ●実際のクツにふれて
- 緊急企画「最後の龍王宮祝祭——もうひとつの水都大阪二〇〇九——」
- 「龍王宮」での最後のクツ ●いよいよ解体・撤去工事
- 未来の記憶に生きる

藤井 幸之助

「韓国強制併合」一〇〇年を迎えた今年、大阪に暮らす済州島出身の在日朝鮮人にもつわる文化遺産が八〇年以上の歴史に幕を閉じた。

本誌二二三号に「済州島出身の女たちの祈りの場・桜ノ宮「龍王宮」——遠からず姿を消す在日朝鮮人の心の拠りどころ——」というタイトルで紹介した桜ノ宮「龍王宮」である。ほんとうに姿を消してしまった。

本稿では、昨年八月の「龍王宮祝祭——もうひとつの水都大阪二〇〇九——」以降の取り組みと実際に見ることのできたクツ、そして、「龍王宮」解体のプロセスを紹介する。

「立入禁止!」

八月一九日、撤去・整地が終了した「龍王宮」跡地で、「龍王宮」管理人の韓秀子さんと大阪府西大阪治水事務所との間で引き渡しが行われた。筆者は行けなかったが、こりあんコミュニテイ研究会のメンバー二人も立ち会った。「不法占拠」をめぐる問題はこれで終止符を打ったが、まだまだわからないことが多い。

「龍王宮」とは何だったのか?という問題はこれからだ。また、かつて在日朝鮮人の寄せ屋が軒を連ねた「龍王宮」の南の堤防ののり面に位置する二軒の再生資源集荷業者



【写真2】「龍王宮」を西側から鳥瞰する。左はJR環状線橋、右は源八橋。(8月9日撮影)



【写真1】すっかり更地になった「龍王宮」の引き渡し。(8月20日、本岡拓哉さん撮影)

についてはこれから立ち退き宣言をされる可能性が高い。

「立入禁止!」ここは大阪府西大阪治水事務所
の管理地です。
許可なく敷地内に入ることを禁止します。大阪府西大阪治水事務所 電話〇六一六五四一一七七二

こんな札が掛けられた柵で囲われてしまつて、もう「龍王宮」の敷地内には入れない(ただし、外からでも中はよく見える)。敷地自体は他の公園部分より少

し低くなつているので、護岸工事をしたうえで、毛馬桜ノ宮公園に編入される。その際、「源八渡し」の船着き場の桟橋跡の石・コンクリート製のステップや木製の杭(かつて大阪にたくさんあった渡しのあった場所で現存しているものはほとんどない)も失われてしまうだろう。大阪府も大阪市も保存をまったく考えていない。

大阪歴史博物館では九月一八日から一月にわたつて、特別展「新淀川一〇〇年 水都大阪と淀川」を開催する。開催趣旨もふろつている。

「淀川は、古来より都市大阪の形成と発展にとつて、切つても切れない大きな役割を果たしてきました。本展示では、その淀川について、とくに江戸時代以降の歴史的な変遷を追いながら、人びとの生産・流通・消費の場であつた川と周辺住民との関わりについて、絵図・地図や古文書、絵画資料などを通して迫つていきます。さらに、都市大阪と淀川の関係を念頭に置きながら、同様の環境にある都市として江戸(東京)・新潟・徳島も取り上げます。本展が、今後の淀川と人びととの豊かな関係を築く手がかりとなれば幸いです。」(大阪歴史博物館ホームページより)
ここには「龍王宮」は出てこないだろう。新聞各紙に「龍王宮祝祭」の取り組みが紹介されても、どの行政機

関からも問い合わせがなかったことからわかる。残念ながら大阪の発展に大きく貢献した在日朝鮮人と濟州島をつなぐ水辺という発想はなきやうだ。経済の面でも、地盤沈下がいわれて久しい大阪は韓国・中国などからの外国人観光客を誘致しようと躍起になっているが、空回りしているように思う。観光資源にもなりえる「龍王宮」になぜ目を向けなかったのか？

豊かな生態系

去年の春から「龍王宮」に通うようになって、ここに

は実はいろんな動物がいて、植物があつて、四季折々の様相があることに気づかされた。整備された公園に比べるとはるかに豊かな生態系を見せている。はやりの言葉でいえば生物多様性だ。

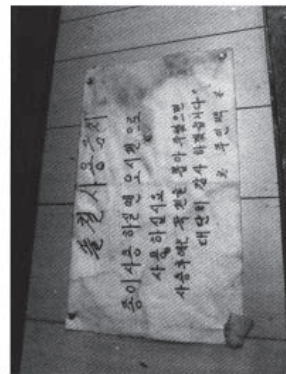
敷地内は落葉樹が多いので、夏はうつそうと茂つていて見えないが、冬は葉を落とした後、「龍王宮」の建物はその姿をあらわにする。春はメジロがウメの枝にとまり、モモの花が咲き、続いてソメイヨシノが咲き誇り、夏はアレハブの後ろにムクゲが次々に咲く。入口付近の柵にはカラスウリがからまる。濟州島のクツには欠かせ



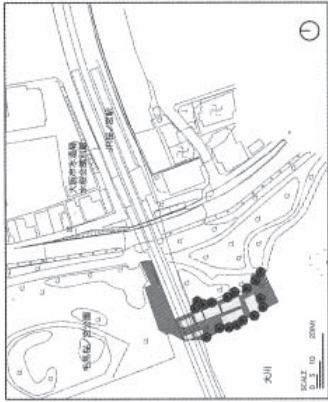
【写真4】環状線の車窓から「龍王宮」の全景が望める。(3月28日)



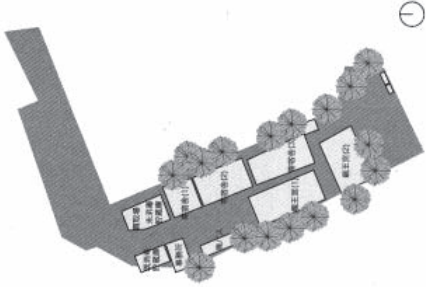
【写真5】両側と突き当りの建物にクツに使う部屋がある。(7月28日)



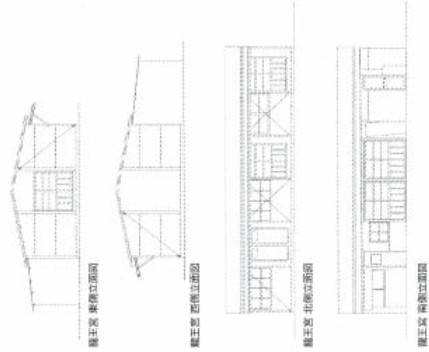
【写真6】室内の「ノリ使用禁止」の貼り紙「紙を使用される時は押しピンで使用するください。使用後には必ずピンを抜いてくだされば大変ありがたいです。主人白」とある。



【図1】龍王宮の立地



【図2】龍王宮の配置図



【図3】龍王宮の立面図

【図1～3】黒木宏一・平川隆彦(いずれも大阪市立大学都市研究プラザ)・深田智恵子(大阪市立住まいのミュージアム)・増田亜樹(大阪人間科学大学)の各氏が作成。



【写真3】環状線鉄橋下の高田商店の右奥が龍王宮。(7月28日)

ない笹竹はだれかが植えたのか、勝手に生えてきたのか。また、おそらく供物の中にあつた夏ミカンの種が落ちて育つたのだろう。立派な夏ミカンの木になり、たわわに実を実らせている。秋はナツツタが色とりどりに染まる。ほかにもまだまだある。

どこに棲みかがあるのか、いつも水面を悠然と泳ぐ一匹のヌートリア。また、大小のクサガメが岸から水面に垂れた木の枝でのんびり甲羅干しをしているが、人の気配を感じると、一瞬にして水の中へ逃げてしまう。だれがカメはのるまな動物だと言つたのか。ここに住み着いているネコの親子が屋根の上でのんびりと日向ぼっこをしている。普段は水辺の護岸付近にいるクロベンケイガニは子ガニも親ガニも雨降りの後、待つてましたとばかり建物の間の通路に大量に出てくる。

クツが終わった後に、供物として段ボール箱で作つた船。いろいろな食べ物をいれて、川へ流すので、あるいは「龍王宮」周辺に暮らす生き物たちのかつこうの餌になっていたのかもしれない。

当たり前のことだが、「龍王宮」のプレハブ造りの建物にはエアコンはなく、夏は暑く、冬は寒い。どちらにも欠かせないのが、扇風機・蚊取線香・石油ストーブ。季節に関係なく部屋の中に常備されている。特に今年の

夏はヒトスシマカの襲来に辟易した。七月末に韓国人の学生グループのフィールドワークで案内したが、ノースリーブでホットパンツの女の子たち数人が絶好の餌食になっていた。大都市の中にはっきりとできた異空間。しかし、これも一世の人たちに思いを寄せるための貴重な体験となつただらう。

まだまだわからない「龍王宮」の歴史

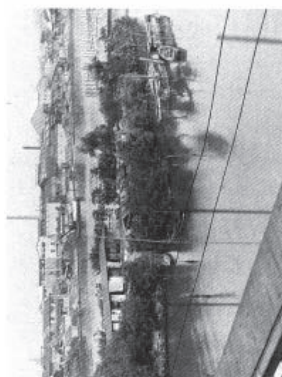
「龍王宮」のある天満付近は一九二〇年代ころから紡績工場やガラス工場などが集中し、朝鮮人が多く働いた。そんな中、大川沿いのいろんな所で、周辺に住んでいた朝鮮人が「クツ」を始めたと言われている。建物のなかつた当初は川べりにゴザを敷いて各自行つていたようである。その後、環状線鉄橋北側の、渡し船を廃棄した船頭家族の住む中州にあつた建物を利用した。南側の場所でもクツが行われた。済州島出身者が多く住む生野区の鶴橋や桃谷から電車に乗ると、ものの十数分で行くことができる水辺のある桜ノ宮はうつつけの場所となつた。

解放後（戦後）、初代経営者となるシンバン（神房）が住みついたことで、「龍王宮」が始まつたようである。いつのことかはつきりしない。その後、経営者が代わり、また周辺の理め立て・公園整備や橋の工事等で工事関係

者の宿舍となつてきたバラックが払い下けられて、クツチャンに利用されたようだ。一九八二年に済州島出身の両親を持つ、シンバンではない宋吉洙（高田義男）さんが経営者になり、再生資源集荷業の高田商店の経営と従業員（そのほとんどが日本人で、多いときで十数人いたという）の宿舍の運営、祈祷専門の貸し部屋の管理が行われてきた。「祈りの場」の機能のほかに、「宿舍」「仕事場」という二つの機能を兼ね備えていたことになる。二〇〇九年一月に宋さんが病で急逝して以降は、家族が管理を引き継いだ。

この間の調査の中で、一九七〇年代に、一世の母親について「龍王宮」に行つたことのある二世の玄善（高正）さんや高正子さんの、オモニたちは小島に船で渡つたという証言を裏付ける写真が発見された。高仁風さんの写真コレクションの中にそれはあつた。働きながら学ぶ大学生だつた仁風さんは環状線の車窓から見事にそれをとらえていた。文字資料がほとんど見当たらない中、大変貴重なものだ。

最近の新聞検索で、高田商店から火が出て、環状線が一時不通になるという記事が見つかった。



【写真7】クツに利用された小島と小屋。環状線の鉄橋から北側を向いて。(1963年5月、高仁風さん撮影)



【写真8】鉄橋の北側に意型の中州が見える。南側には環八渡しの鉄橋跡も見える。(空中写真 1961年 国土地理院)

「J-R鉄橋下で火事 大阪環状線二時間不通、九万八〇〇〇人影響」『読売新聞』二〇〇七年二月八日付

七日午後五時三十分ごろ、大阪市都島区中野町五のJ-R大阪環状線桜ノ宮駅西側に架かる鉄橋下の河川敷の廃材置き場から出火。廃車四台などが燃えたと見え、線路の枕木約四〇本に延焼し約二時間二〇分後に消えた。けが人はなかった。

環状線が約二時間、全線不通となり、大阪―天満間で約五五〇人が

乗った電車が約四五分間立ち往生したほか、九一本が運休、四〇本が大幅に遅れ約九万八〇〇〇人に影響。振り替え輸送されたが帰宅ラッシュと重なり、一時混乱した。都島署は、廃材置き場にあつた石油ストーブの火を燃え移らせた失火容疑で、現場にいた廃品回収作業員〇〇〇容疑者(三九)を逮捕した。」(筆者注：〇〇〇部分は実名。姓名からみると在日朝鮮人と思われる。)

しかし、まだまだ「龍王宮」の詳しい歴史はわからない。これからの聞き取り作業がとりわけ重要だ。

実際のクツにふれて

今年に入つて幸いなことに、実際のクツを何度か見せていただくことができた。家族の病気の回復を願つたり、きわめて個人的な内容を扱うわけだが、快く協力いただき、シンパン(神房)・ポサル(菩薩)・スニム(僧任)や依頼者のみなさんに感謝の言葉もない。ポサル(菩薩)のMさんにはとりわけお世話になった。ある時など、事前に許可をいただいていたものの、大勢で押し掛けたにもかかわらず、クツを始める前に、近くの喫茶店(「龍王宮」の壁の何ヶ所かにこの店の電話番号がメモされていた)に電話してモーニングを人数分取つてくださり、「にいちや

んら、コーヒ飲みや」と勧めてくださったこともあつた。

一九八〇年代ごろの最盛期には、日常的なクツのほか、年三回行われる「海を拜む日」には一〇〇組以上の人々が「龍王宮」を訪ねたようだ。一世の女性たちが生活に若干の余裕ができ、自由に使えるお金をもてたことも関係しているだろう。

しかし、最近利用者はぐつと減つていた。理由として考えられるのは、①一世の女性の高齢化(次世代への継承がおこなわれていない)、②従来からある迷信という否定的なとらえ方、③「龍王宮」の老朽化(いつ立ち退

きになるかわからないところに改修費用はかけられない)などであろうか。

大阪市立大学都市研究プラザの特別研究員の黒木宏(くろきひろ)さんを中心としたメンバーは「龍王宮」の実測を見事にやってくれた。また、近畿大学理工学部建築学



【写真9】「龍王宮」での「クツ」を取材・記録するこりあんコミュニティ研究会のメンバーと近畿大学都市計画研究室の学生たち。(4月29日)



【写真10】朴明子さんによる一人芝居「柳行李の秘密」の熱のこもった演技に参加者は引き込まれた。(7月25日)



【写真11】「龍王宮」を閉めるにあたって、最後のあいさつをする韓秀子さん。(7月25日)



【写真12】「龍王宮」南側の源八橋を望む場所、サムギョクス「龍王宮」に舌鼓を打ちながら、天神祭のクライマックス「船渡御」に手を振ったり、写真を撮る参加者たち。暗くなつてからは間近に「奉納花火」を満喫した。(7月25日)

科都市計画研究室の学生たちはクツの進行を逐一詳細に記録してくれた。調査・研究は絶え続いたばかりである。済州島で行われているクツとの比較研究など、これからやるべきことは多い。

緊急企画「最後の龍王宮祝祭

—もうひとつの水都大阪二〇一〇—

「龍王宮」の存続について、かつて「龍王宮」にオモ

法的には勝ち目はないときっぱり言われていた。そのため、大阪府西大阪治水事務所との交渉は「不法占拠」という弱い立場で思うようには進まなかった。在日朝鮮人の女たちにとって大切な「祈りの場」であることなどお構いなしの行政職員に、管理人の韓秀子さんも怒りをぐつとこらえた。断続的な交渉の結果、そんな行政によって解体されるよりはと、高田商店の方で自主的に解体業者を依頼して、自費で解体を行うことになった(もちろん補償や立ち退き料など出ていない)。こういった

職員はあまりにも一方的で、拘り定規で、なんとも申し訳ない話である（また、近隣のある特定の住民が消防署・警察署・区役所などへ頻繁に苦情を言っていたことも秀子さんの悩みの種となっていた）。

「龍王宮」の撤去が決まり、コリアン・マイノリティ研究会とこりあんコミュニティ研究会は高田商店の協力のもと、急遽、七月二十五日、天神祭本宮の日におつけて、緊急企画「最後の龍王宮祝祭——もうひとつの水都大阪二〇一〇——」を企画した。急な企画だったにもかかわらず、関東や中国地方など遠方からの人も含めて、子どもから大人まで七〇名近くの人が参加して下さった。

プログラムは、二部構成にし、第一部として、塚崎昌之さんの解説による見学会・関連映像上映、パネル展示（黒木宏一・平川隆啓・深田智恵子・増田亜樹「龍王宮の記憶」・近畿大学理工学部建築学科都市計画研究室「龍王宮における儀礼時の空間利用」・朴明子さんの一人芝居「柳行李（やなぎごうり）の秘密」・リレートーク、第二部として、祝宴（サムキョプサル）・天神祭「船渡御」「奉納花火」観賞など、非常に盛りだくさんであった。

管理人の韓秀子さんは最後のあいさつの中で、「ここは大阪を底辺から支えてきた在日朝鮮人二世の女性たちにとって癒しの場であり、エネルギーを与えられる貴重な

な場所でした。時代の流れの中でなくなるのは残念ですが、「龍王宮プロジェクト」による映像や記録、そしてモノが残り、今日ここに集まってくださった多くの方々の体験として記憶に残ると思います。私自身にとっても愛着のある場所なので、みなさんとともに、にぎやかな雰囲気の中で最期をしつかり看取りたいです」と話された。

「龍王宮」での最後のクツ

「最後の龍王宮祝祭」から六日後の七月三十一日、韓国人の学生グループ

の案内をして龍王宮を訪れた時、いつものMボサル（菩提）が依頼者の在日二世の母と三世の息子のクツを行っているところに遭遇した。たまたま早朝に来ていたこりあんコミュニティ研究会のメンバーでドキュメンタリストの金松万さん



【写真13】菩提（算盤・天文・算盤）を使って、占いをする。（7月31日）



【写真15】段ボール箱を船に見立ててつくり、中に供物からの苦情を気にして、早く沈むように、いつもより余分に底に穴をあけた。（7月31日）



【写真16】お祝いに使った布・白紙などを燃やす。依頼者の息子は熱さで額をぬぐった。（7月31日）



【写真14】布に包んだご飯を川に流す。（7月31日）

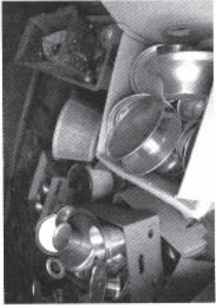
はすでにビデオを回していた。濟州方言を聞き取れない依頼者に対して、Mさんは要所要所を日本語で説明した。朝八時ごろから始まったクツは昼休みをはさんで、午後四時ごろまで続いた。この日が正真正正「龍王宮」での最後のクツとなった。筆者らはお供えに

使った食べ物のお下がりがまていただいた。野菜をふんだんに使ったさまざまなナムルがおいしかった。

Mさんは言った。「ここがなくなったら不便になるなあ」。

いよいよ解体・撤去工事

「最後の龍王宮祝祭」開催の前から、「龍王宮プロジェクト」の一環として、高田商店の許可を得て、部屋に残されていたさまざまなモノの中から、これはというものを少しずつ回収していた。クツに使う屏風・香炉・燭台・祭器・チャング・プク・チンなどの打楽器・仏像・仏画・神図などがたくさんあった。これらは美術品としての価値というよりも、実際に「龍王宮」で使われた品々であ



【写真17】段ボール箱に詰められ、大量に残されたアルミ製の祭器類。(7月17日)



【写真18】クッチャンで使われた扉風。(7月17日)



【写真19】解体初日の「龍王宮」。(8月4日)



【写真20】エンボを使ってあってという間に解体していく。(8月6日)

ということに意味があり、重要である。いつかどこかのミュージアムで「龍王宮」に関してまとまった展示することができればと考えている。とくに生野区のとこかで展示することが大切だ。

解体作業は八月四日から始まった。こりあんコミュニティ研究会のメンバーが解体の過程もビデオに収めるべく、日をおかずに現場に通った。解体業者が驚いていたのは、宿舍スペースに残されていた「ゴミ」(元従業員たちの生活道具類一式)の量の多さだった。普段は大型機械を使って、鉄筋コンクリートの巨大な建造物の解体をしているのだが、「龍王宮」は勝手が違ったようだ。その道四〇年のベテラン作業員はエンボを使って、燃え

るゴミと燃えないゴミを巧みに分別していた。彼によると一番大きな棟の北側の開かずの間の部分を解体した時に大量のチヨゴリが出てきたということだったが、残念ながらこれらは解体したゴミといっしょくたになってしまいい回収できなかった。

未来の記憶に生きる

「龍王宮」はその役割を終え、八月一九日に建物はすべて解体・撤去され、大阪府に返還された。これまでどれだけ多くの一世の女たちのハン(恨)を解いてきた場所だったかを考えると、あまりにもあつげなかつた。しかし、この場所の景観が変わつたとしても、「龍王宮」



【写真21】環状線の車窓から見た解体中の「龍王宮」。(8月6日)



【写真22】半分以上解体された「龍王宮」。(8月7日)



【写真23】南側の最後の建物が取り壊される瞬間。(8月10日)

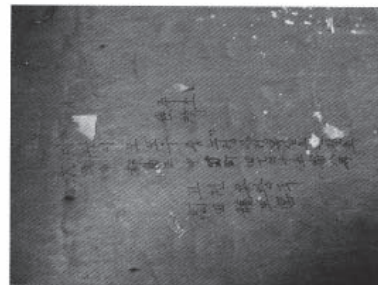


【写真25】すっかり更地になつた「龍王宮」。(8月20日)

がここにあつたということは紛れもない事実である。また、一世の女たちは「龍王宮」に代わるものを求めていくだろう。それはそのまま大川の水辺であるかもしれないし、他の場所かもしれない。

「龍王宮プロジェクト」としてはこれからも継続して「龍王宮」の記憶の記録をしていく予定である。形はなくなつても「龍王宮」を知つた私たちは未来の記憶に生きる「龍王宮」を探し続けていきたい。

具体的には、①関係者への聞き取りをする、②報告書・写真集・DVDなどの作成する、③行政と交渉をして、現地で何らかの銘板の設置したい、④回収したクツで使われたモノたちの整理し、何らかの形で展示をする



【写真24】最後に解体された建物の壁の貼り紙の下から見つかった朝鮮語・日本語併記した「龍王宮」の住所。「高田龍王宮」とあり、宋吉珠さんによるものか？(8月9日)

などが集められる。今年度末までには中間報告を挙げたい。

【参考文献】発行年順

- 宗教社会学の会編（一九八五）『生駒の神々―現代都市の民族宗教―』創元社
- 金秀男（一九九三）『写真集 濟州島 3 『信仰と祭りの世界』 国書刊行会（濟州島でのクッの詳細を写真で紹介した）
- 飯田剛史（二〇〇二）『在日コリアンの宗教と祭り―民族と宗教の社会学―』世界思想社
- 金良淑（二〇〇五）「濟州島出身在日二世女性による巫俗信仰の実践」『韓国朝鮮の文化と社会』第四号、韓国朝鮮文化研究会
- 金良淑（二〇〇六）「日本で営まれる濟州島の「クッ」―世界のコリアン―」鶴誠出版
- 龍王宮祝祭準備チーム（二〇〇九）『龍王宮祝祭―もうひとつの「水都大阪二〇〇九」―』（八月二二日配布資料）
- 藤井幸之助（二〇〇九）「濟州島出身の女たちの祈りの場・核ノ宮「龍王宮」―魂から姿を消す在日朝鮮人の心の拠りどころ―」『書評』一三二号、関西大学生協同組合『書評』編集委員会
- 金良淑（二〇一〇）「大阪に生まれた濟州島の聖地「龍王宮」―まはら No.六三、旅の文化研究所

- 宮下良子（二〇一〇）「龍王宮の空音が語るもの」
- 飯田剛史（二〇一〇）「龍王宮・箱作・濟州島―水辺の養神―」
- 高正子（二〇一〇）「大阪濟州人の祈り―濟州島出身孝女性の事例から―」
- 玄善允（二〇一〇）「濟州島出身在日二世の習俗の断片」
- 以上、四点は『コリアンコミュニティ研究 vol.1（こりあんコミュニティ研究会）所収
- 琴恭徹（二〇一〇）「ルポ・現場発 龍王宮：また姿を消した在日同胞の「場」濟州島女性たちのクッ臺」『月刊イオ』九月号
- 【映像資料】次の二点は「龍王宮」でのクッの様子が写されている。非常に貴重な映像である。
- NHK特集「濟州島―母なる島への帰郷―」（制作：NHK山口放送局、一九八二年一月一日放送）
- NHKスペシャルドラマ『孝女の明日』（原作：元秀一、脚本：田中晶子、制作：大阪放送局、九〇分、一九九〇年五月放映）
- 名前の記載のない写真はすべて筆者が撮影したものである。（ふじい こうのすけ・「コリアン・マイノリティ研究会」世話人）

居住福祉評論

桜ノ宮「龍王宮」

—在阪済州島出身女性たちの祈りの場—

本岡拓哉(日本学術振興会特別研究員)

I はじめに

都市におけるエスニックマイノリティの集住には、マジョリティ集団の外圧(民族排外主義・排他的締め出し)に対する防衛的機能やコミュニティ内部の相互支援体制の構築とともに、固有の文化的アイデンティティを維持・継承させるという機能がある。

大阪におけるエスニックマイノリティである在日コリアンも、同胞で集住するということで、民族固有の文化(出身地域によって違いはあるものの)を保持し、またそれに伴う景観を様々な歴史的経緯を通じて創り上げてきた。

大阪市都島区の大川(旧淀川)左岸の河川敷に存在する「龍王宮^{りゅうおうきゅう}」という施設は、まさに在日朝鮮人の文化的アイデンティティを保持・継承する場所の一つと考えられる。この「龍王宮」は済州島の巫俗伝統に由来するシャーマニズムである「クツ」(巫儀・巫祭)が行われる場所として、戦前(解放前)から大阪に暮らす済州島出身者女性たちの心の拠り所^{チェヂュド}になってきた(写真1,2)。長年にわたり、河川敷の「不法占拠」という理由で行政から立ち退き勧告を受けてきたが、2010年夏、経営者自身によって建物が撤去され、その歴史を終える。

筆者は「こりあんコミュニティ研究会」(水内俊雄・中山徹共同代表)のメンバーとして、2009年春からこの「龍王宮」と関わりを持ってきた。本稿では、桜ノ宮「龍王宮」がどのような場所・施設であったかを明らかにし、そして、この場所をめぐる「こりあんコミュニティ研究会」による「龍王宮」の記憶を記録するプロジェクト(リーダー:藤井幸之助)の取り組みについて報告したい。

II 済州島出身女性たちの祈りの場「龍王宮」

「龍王宮」はJR環状線桜ノ宮駅の大阪寄りホームの西側、大川(旧淀川)にか



写真1 龍王宮南から



写真2 龍王宮通路

かる鉄橋の下に当たる河川敷(大阪市ゆとりと緑振興局の管理する毛馬桜之宮公園内・1938年に南側に源八橋が完成したことで廃止になった「源八渡し」の船着き場につながっている)に立地している(図1)。敷地内には在日朝鮮人の経営する高田商店という再生資源集荷業が併設されており、入口付近の事務所の前に鉄くず・アルミ缶などの再生資源が積み上げられている。入口を抜けて、左手に

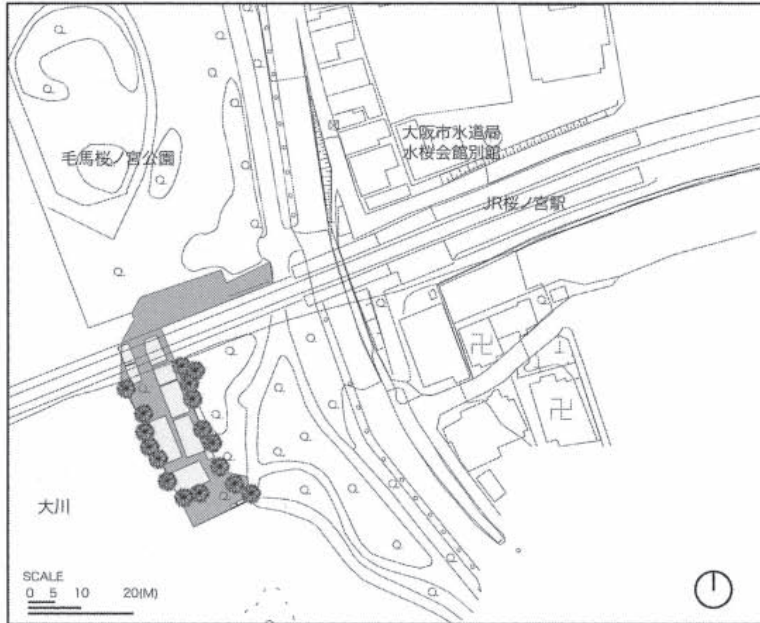


図1 龍王宮立地

はかつて10人以上の日本人従業員が寝泊まりしていた宿舎と炊事場の建物がある。そしてその奥の左右・突き当りに「龍王宮」と呼ばれる、儀礼をおこなうためのプレハブ小屋が3棟存在する。これらのプレハブ小屋は貸室として利用されているが、基本的には室内には何もなく、利用者たちが「クツ」をする際に自身で飾り付けをし、祭神を置く。このように、この場所は「祈りの場」「宿舎」「仕事場」といった、在日の人々のくらしのベースとなる場が集約されている(図2、3)。

では、この「龍王宮」はいつから成立したのだろうか。まずは「龍王宮」の側を流れる大川周辺に朝鮮人が集住した契機を見ていくと、大阪の在日朝鮮人史に詳しい塚崎昌之氏によれば、1920年代以降、大川周辺の京橋および天神橋界限にガラス工場や製紙工場、染工場などが集中しており、そうした工場に労働者として朝鮮人(多くが済州島出身者)が雇われていたという。また、大川では朝鮮人の水上生活者(慶尚道出身者が多かったようだ)も多く存在し、主にかれらは砂利の荷揚げ作業に関わっていたとのことである。

このように現在の「龍王宮」がある周辺に戦前から朝鮮人が集住する中、大川沿いで朝鮮人たちが「クツ」を始めたのは、1920年代初頭と言われている。ただ当初は川べりにゴザを敷いて各自が宗教的行為を行っていたようである。その後、環状線鉄橋北側の、渡し船を廃業した船頭家族の住む中州にあった建物

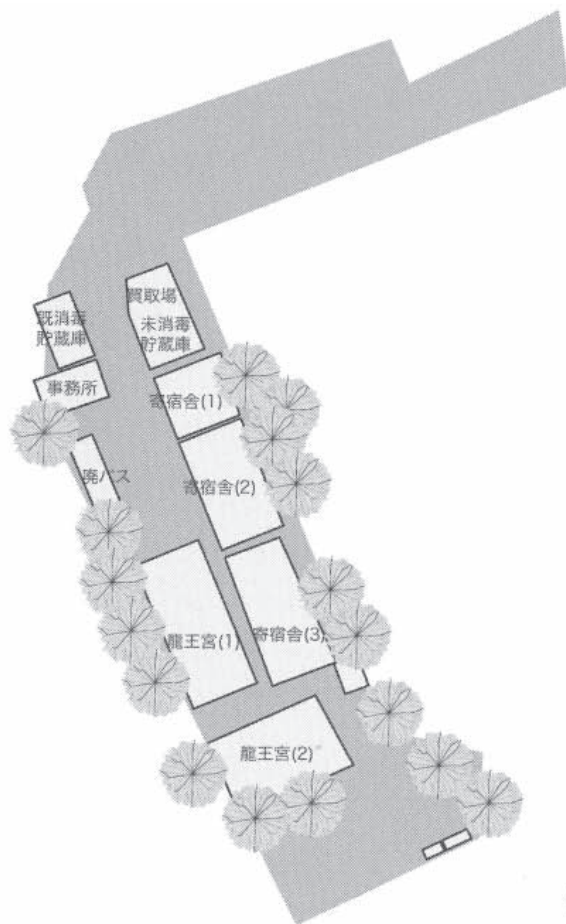


図2 龍王宮配置図

を利用したり、便利のよい桜ノ宮の河川敷に、「龍王宮」の初代経営者であるシンバンが住み始めたことで、「祈りの場」の経営が始まったようである(写真3)。その後、経営者が何人か代わり、また周辺の埋め立て・公園整備などの影響で工事関係者の宿舎となっていたバラックを払い下げられて、利用された。のちに済州島出身の両親を持つ高田義男(宋吉洙)^{ソングルス}氏が経営者になり、再生資源集荷業の経営とその従業員の宿舎、祈祷専門の貸し会場の管理が行われてきた。そして2009年1月に高田氏が急逝して以降は、家族が管理を引き継いだ。

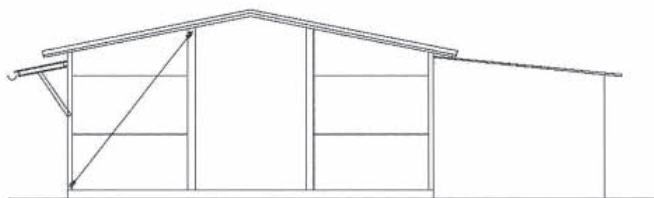
Ⅲ 立ち退きとなる「龍王宮」

1982年に管理人を継いだ高田氏は、国有地の「不法占拠」ということで、これまで断続的に河川敷を管理する大阪府西大阪治水事務所から立ち退きを言われてきたが、代替地の提供などの条件が合わず、行政との交渉に応じてこなかった。しかし、2009年1月に高田氏が亡くなったことで、大阪府は遺族に対して再度立ち退きを迫ってきた。高田氏は生前、家族には「龍王宮」についてあまり語らなかったため、残された家族は事情がよくわからない状態であったが、歴史ある宗教施設だけに、あっさり立ち退きに応じられない立場を維持してきた。

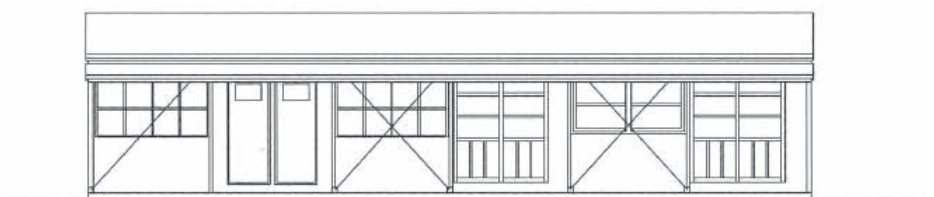
行政による大川周辺の立ち退き事業は1982年にまで遡ることができる。この年、大阪市・大阪府・建設省は共同事業として「大川不法占拠対策」を掲げ、



龍王宮 東側立面図



龍王宮 西側立面図



龍王宮 北側立面図



龍王宮 南側立面図

図3 龍王宮立面図

現在にいたるまで事業を行っている。治水事務所の担当者によれば、1982年当時、大川沿いにはおよそ500人が居住していたようであるが、立ち退きはほぼ完了した。現在は「龍王宮」を含めて数戸が残存しているだけである。大川沿い「不法占拠」家屋の撤去事業において、住民との団体交渉のようなものは存在せず、個別交渉をもって事業は進められてきた。また、行政としては基本的に自主撤去を促進しており、その際には、公営住宅および民間賃貸住宅に関する情報提供などがおこなわれ、あくまで「不法占拠」ということから、移転補償金は存在せず、見舞金の支給はおこなわれてきたようである。なお、これまで立



写真3 1963年龍王宮：高仁鳳氏撮影

ち退き問題に関して、数件の(現在係争中のものを含め)裁判がおこなわれてきたが、すべて行政側が勝訴してきたようである。

2009年以降、高田氏の遺族は治水事務所担当者との交渉を断続的に行ってきた。また、「龍王宮」および再生資源集荷業の営業を続けることを第一に考え、弁護士に法律相談するなどして来た。しかし、これまでの多くの経緯・実績を示して行政の立ち退き交渉をする中、再び法律上「不法占拠」であるということが大きな壁となり、遺族は2010年夏に立ち退くという苦渋の決心をすることになった。ただ、誠意の見られない行政の手による撤去は拒み、最後は自分たち手で終わらせるということで、費用はかかるものの、自主撤去を選択することになった。

IV 「龍王宮」でおこなわれていたこと

およそ100年の歴史を持つ在日朝鮮人は日本社会から異民族、日本国籍を持たない者として排除されてきたが、在日朝鮮人社会では女性たちは家の中心を担う男性たちから疎外されてきた。儒教的祖先崇拜のチェサ[祭祀]が男性の文化だとすれば、クツ(巫儀・巫祭)は女性の文化とされている。女性たちは、高額な費用や夫や子どもの反対にもかかわらず、自らはもとより家族の身にふりかかる不幸やハン[恨]をクツで晴らそうとした(藤井2009)。

生野区に行くと立ち並ぶ民家のそこここに卍(まんじ)のマークを掲げたところがある。そこには朝鮮シャーマニズムと仏教・修験道などが習合した韓寺(朝鮮寺)があり、お祓い・占いをしてくれるシンバン[神房](濟州島での巫女の呼び方。半島部ではムダン[巫堂]という)がいる。お祓いをしたい者はシンバンに依頼し、自宅か韓寺か、あるいはそれ以外の場所でクツをおこなってもら。短いもので数時間、長いものになると泊りがけで一週間以上にわたって行われることもある。

こうした中、「龍王宮」が多くの人々に利用されてきた理由は、まず JR 環状線桜ノ宮駅のすぐ近くという、立地上便利なことである(大阪府南部の箱作海岸にも施設はあるが、通うには遠いという難点がある)。二つ目の理由は、「龍王宮」は公園内および高架下にあるということから、打楽器など音が大きく発せられる儀礼を行っても、さほど周囲の迷惑になることはないということである。そして、三つ目の理由としては、水辺にあるということである。すなわち、「龍王宮」の側を流れる大川は故郷の濟州島の海にも繋がっていると考えられ、「龍王宮」での「クツ」を終えた後、お供え物を燃やしたり、水に流したりする場所としても「龍王宮」は最適なのである。

「龍王宮」はプレハブ平屋建て3棟からなり、大部屋2、小部屋7を備えており、同時に複数のクツをおこなうことができる。前述したように、定時的な祭壇や仏像などはなく、シンバンと依頼主がやってきて部屋を借り、自らで儀礼のための飾り付けを行う。依頼主は主に先祖祭りや病気治しなどのために祈祷をしに来るが、その内容は様々で、時間も短いものから長いものまでである。高正子氏は自身の母親が「龍王宮」で行っていた堂祭(濟州島の地域ごとに行われる家族の安寧を祈るまつり)について、次のように回想している。

堂祭を行う場は川に面した岸で、幅はちょうど3組の儀礼が並んで行う程度の決して広くない場所であった。多いときには後ろで儀礼が終わるのを待っていることもあった。ゴザの上に並べたワラビ・豆もやし・ほうれん草のナムルにゆで卵、飯、前日に作った餅と米を供物として海の神に供えると、シンバンは「姓は○○○で何歳になる子孫」といって子ども名を一人一人あげ、厄払いの呪文を唱える。終わると、全種類の供物を少しずつ半紙白紙に包んで「子孫たち、あんばいしてください」と言いながら、川に流す。堂祭が終わると、シンバンとZは持ってきた供物を食べ(飲福)、謝礼(5

千円程度)を渡し、電車に乗って帰る。巫儀の時間はものの30分くらいだ。時には、順番を待っている人の中にシンバンを連れて来なかった人がいると、シンバンが残って儀礼を行うこともあった(高正子 2010: 17 頁)。

このように個人的な宗教的行為のほか、「龍王宮」では年中行事も行われる。太陰暦の1月15日、6月7・8日、11月7・8日が「海の神を拝む日」(濟州島では沿岸漁業の一つとして素潜りの海女による漁が盛んに行われていた)に設定されており、また太陰暦7月7日は「七星の日」とされ、これらの日には大勢の人たちで賑わったようである。宗教社会学の会編(1985)『生駒の神々』によれば、1980年代初頭には、年4回の年中行事には100組以上が「龍王宮」を訪れたとのことである(NHK 特集「濟州島～母なる島への帰郷～」1982年10月18日放映でその当時の「龍王宮」の様子が生き生きと映し出されている)。

このように「龍王宮」は「クツ」を行なうための重要な場であるいえるが、この場所は単に祈祷という行為だけではなく、人々のネットワークが構築されていたことも見逃せない。かつて1970年前後に、母親を車で送っていくため「龍王宮」に何度か行ったことのある玄善允^{ヒョンソニョン}氏は次のように指摘している。

「母は一時期、夜間学校へ通っていたのだが、その仲間の多くが龍王宮仲間と重なるし、体調その他の理由で今や家に閉じこもることを余儀なくされている母やその友人たちの介護に訪れるヘルパーさんたちも、龍王宮仲間の娘さんである。といったように、濟州島出身の女達の血縁、地縁関係、それに加えて、殆ど文字の読み書きができないといった知的・社会的資産の同質性が織り成すネットワークは、「クツ」が廃れた今でも生き延びており、彼女たちが生きていく限り、不可欠のライフラインとして機能しそうなのである(玄善允 2010: 33 頁)。

この叙述からもわかるように、「龍王宮」はアジール(避難所)やコミュニティとしての側面も有していたのであり、まさにこのことは本誌が主題とする「居住福祉資源」であるとも言えるのかもしれない。

V ほとんど知られてこなかった「龍王宮」

2009年3月に、大阪市立大学都市研究プラザの教員・研究員・大学院生を中心として、「こりあんコミュニティ研究会」が結成された。結成の目的は「こりあんコミュニティにおける生活と文化への理解を高めつつ、当該地域コミュニ

ティの再生のあり方について議論しながら、日本国内に限らず共同調査及び研究を行っていく」としている。

これまで京阪神を中心に様々な地域での調査を行ってきたが、その過程で知ることになった「龍王宮」の調査・研究がやはり主軸と言っても過言ではなく、多くの会員・非会員がこの場所に関わってきた。その関わり方の一つとして中でも、「龍王宮」を管理する高田商店の協力を得て、2009年4月から定例研究会を毎月、「龍王宮」を会場に、だれでも参加できる研究会として開催してきた。

これまで「龍王宮」については、地元都島区の郷土史はもとより、在日朝鮮人史の中でもほとんど記録されずにきた。幾つかの貴重なものとしては、たとえば大阪市東淀川区在住の作家元秀一^{ウオンスイ}が小説『猪飼野物語—濟州島からきた女たち—』(1987年、草風館)の中で、「龍王宮」を登場させており、またこの小説を原作として、NHK大阪放送局が1990年5月に放映したスペシャルドラマ『李くんの明日』(脚本：田中晶子、90分)がある。そこでは、オモニ役の李礼仙^{りれいせん}(現在は麗仙)が息子のことで「龍王宮」で「クツ」を挙げてもらうシーンが出てくる。また、大阪市生野区出身の梁石日^{ヤンソギル}は『魂の流れゆく果て』(2001年、光文社)の中で、若い頃、オモニのお供で「龍王宮」へ行ったことを書いている。学術研究では、宗教社会学の会編『生駒の神々—現代都市の民族宗教—』(1985年、創元社)が最初だろう。蓄積はまだ少ない。

VI 「龍王宮」の記憶を記録するプロジェクト

「淀川改良工事竣工100年」を迎えた2009年夏に大阪府・大阪市・在阪企業は「川と生きる都市・大阪」をテーマにして、9億円の費用を使って、「水都大阪2009」という一連のイベントをおこなった。しかし残念なことに、大川沿いにある「龍王宮」、そして在日朝鮮人の生活や文化への視線はまったく抜け落ちていた。一方で、大阪市は多文化共生社会の構築を目指している。しかし、多民族による多文化共生社会を実現するためには、日本人にとって「都合のいい」「明るい」部分だけをとって不十分である。

2009年8月22日、こりあんコミュニティ研究会はコリアン・マイノリティ研究会との共催で、官製のイベントを意識して、『龍王宮祝祭—もうひとつの「水都大阪2009」』と題して、大阪リバーサイドホテルと「龍王宮」・毛馬桜之宮公園を会場に、リレートークやフィールドワーク、野外ライブといった三部構成

の催しを行った(写真4)。これをきっかけにして、「龍王宮」の記憶を記録するプロジェクト(龍王宮プロジェクト)」が立ち上げられた。ここでは、宗教学・歴史学・社会学・地理学・文化人類学・建築学・言語学など、学際的な知だけではなく、映像作家や「龍王宮」に関心をもつ市民を結集して、「龍王宮」の歴史を正確に把握し、そしてこの場所に関わった人々の記憶を多くの人に伝えていくことも目的にしている。すでに、大阪コミュニティ財団の助成金を活用し、「龍王宮」の施設の実測調査や記録・資料収集、シンバンや依頼者に聞き取りを行ったり、また、実際の「クツ」を撮影したりする中で、「龍王宮」について新たな事実が判明することもあった。調査結果の一部については本論でも紹介しているが、これからも調査を継続し、またメンバー間で議論していく中で、より体系的な形で調査結果をまとめて、最終的には写真・映像も盛り込んだ報告集の作成も計画している。

「龍王宮」をめぐるのは、これまである特定の近隣住民から区役所・消防署・警察署などに「ごみを捨てている」「火を焚いている」「悪臭がする」「きたない」「危ない」といった苦情が寄せられることが多かったようである。すなわち「龍王宮」が「迷惑施設」のように捉えられているのである。こうした理由は、これ



写真4 リレートーク

まで近隣住民との交流がほとんどなかったことや「龍王宮」がどのような施設であるかを知らずにいることとも関係していると思われるが、「龍王宮プロジェクト」を遂行するうえで、こうした理解をできるだけ是正することも目的として考えてきた。

「龍王宮プロジェクト」のメインとなる作業は、「龍王宮」に関わってきた人々への聞き取り調査となる。前述したように、「龍王宮」についての研究はあまり行われてこなかったが、その理由としては、絶対的な歴史的資料が不足していることがあげられる。これについては行政文書や地図・空中写真などの資料を発掘・収集はしているが、限界がある。それを埋め合わせるためには、やはり人々の記憶や体験・語りを資料とする必要がある。

ところで、当事者たちはこの場所を「桜ノ宮」と地名で言うことが多く、「龍王宮」と言っても通じないことが多々ある。ここからもわかるように、この場所は外からの見え方と内(利用者)からの見え方には差異があるようである。それはまた、「龍王宮」が「祈りの場」や「抛り所」ということについても、この場所の使い方やそれへの思いは、利用者によって千差万別でもあり、この場所を「龍王宮」＝「祈りの場」「心の抛り所」とだけ画一的に、または一枚岩的に捉えることは、多くの人々の思いや記憶をそぎ落としてしまうことにもなりかねない。この意味でも、「龍王宮プロジェクト」は、より多くの人々に聞き取り調査を実行し、多様な見方が可能となる成果をあげていきたいと考えている。

「龍王宮プロジェクト」では、「龍王宮」を媒介にして、在阪済州島出身女性たちの生活や思いにアプローチしていく。「龍王宮」の記憶を記録する意味は、ホストである日本社会が、これまでまったく聞こうとしなかったマイノリティの記憶や経験に配慮することで、より懐の深い社会形成に資することができると考えている。

また、在日朝鮮人社会における文化の継承にも「龍王宮プロジェクト」が関与していきたい。実際、「龍王宮」にまつわる在日1世の記憶やその生活体験は、日本で生まれ育った次の世代に必ずしも伝わっているとは言えず、むしろ否定すべきものとして捉えられる傾向もある。実際、ここ数年において、「龍王宮」に通う人々が減ってきたのも（「龍王宮」以外の朝鮮寺の利用者も年々減少しているという）、高齢化の問題のほかに、そうした理由があるのかもしれない。しかし、だからといって、それをなかったもの（なくすべきもの）とすることで



写真5 龍王宮撤去

はない。まずは「龍王宮」および、そこに関わった人々の話に耳を傾け、多くの在日済州島出身女性たちがこの場所に関わった背景をきちんと把握することで、ようやくそれを評価するスタートラインに立つことが可能となるのではないだろうか。その中では、「龍王宮」が本国とは違う形で継承される、大阪における済州島出身の在日朝鮮人の有形・無形の文化財・文化遺産として「龍王宮」を捉えることも可能になるだろう。

「龍王宮」の撤去が決まり、急遽、今年7月25日、天神祭本宮の日に、緊急企画「最後の龍王宮祝祭—もうひとつの水都大阪2010—」を企画した。70名近くの人が参加し、「龍王宮」の見納めをするとともに、これからのことを話し合った。

「龍王宮」はその役割を終え、8月に建物はすべて撤去された(写真5)。今後この場所はおそらく毛馬桜之宮公園の一部として公園整備されることだろう。たとえ、この場所の景観が変わったとしても、ここに「龍王宮」がなかったことにできない。「龍王宮プロジェクト」はこれからも継続していくことになる。前述したように、本プロジェクトは、多様な分野の研究者、および様々な市民から構成されており、こうしたメンバーで議論を継続的に起こすことで、より開かれた、懐の深い「龍王宮」の記憶の記録を目指していきたい。

付 記

本稿で使用した図は、「龍王宮プロジェクト」にも関わっている黒木宏一・平川隆啓（いずれも大阪市立大学都市研究プラザ）・深田智恵子（大阪市立住まいのミュージアム）・増田亜樹（大阪人間科学大学）の各氏が作成したものである。

参考文献

飯田剛史(2002)『在日コリアンの宗教と祭り—民族と宗教の社会学—』世界思想社

高正子(2010)「大阪濟州人の祈り」『コリアンコミュニティ研究』vol.1、15-20頁。

宗教社会学の会編(1985)『生駒の神々—現代都市の民族宗教—』創元社

玄善允(2010)「濟州島出身在日一世の習俗の断片」『コリアンコミュニティ研究』vol.1、31-35頁。

藤井幸之助(2009)「濟州島出身の女たちの祈りの場・桜ノ宮「龍王宮」—遠からず姿を消す在日朝鮮人の心の拠りどころ—」『書評』132号、関西大学生生活協同組合『書評』編集委員会、126-135頁

乃木・現場発

「へは、本報記者に事の経緯を尋ねると、
「甲入る者道」に知らぬ者道にあらざる
あるも、秋の日のあざやかに（理美・
ひび） 九州島原の歴史を語り継ぐ女
の伝承）キナル（海軍・五洲） 資料を
読めば歴史が読め」 といふ（龍王「口」
読まぬ歴史が読め） といはれる人々の
である。折敷を眺めしつゝ人々ははな
べりな女を、歴史のしるしを手にし
たらしめた女たちの心の歴史を語り
たい。この本、龍王宮の歴史を語り
たい。この本、龍王宮の歴史を語り
たい。この本、龍王宮の歴史を語り

「龍王宮の歴史を語り継ぐ女
の伝承）キナル（海軍・五洲） 資料を
読めば歴史が読め」 といふ（龍王「口」
読まぬ歴史が読め） といはれる人々の
である。折敷を眺めしつゝ人々ははな
べりな女を、歴史のしるしを手にし
たらしめた女たちの心の歴史を語り
たい。この本、龍王宮の歴史を語り
たい。この本、龍王宮の歴史を語り

「龍王宮の歴史を語り継ぐ女
の伝承）キナル（海軍・五洲） 資料を
読めば歴史が読め」 といふ（龍王「口」
読まぬ歴史が読め） といはれる人々の
である。折敷を眺めしつゝ人々ははな
べりな女を、歴史のしるしを手にし
たらしめた女たちの心の歴史を語り
たい。この本、龍王宮の歴史を語り
たい。この本、龍王宮の歴史を語り

「龍王宮の歴史を語り継ぐ女
の伝承）キナル（海軍・五洲） 資料を
読めば歴史が読め」 といふ（龍王「口」
読まぬ歴史が読め） といはれる人々の
である。折敷を眺めしつゝ人々ははな
べりな女を、歴史のしるしを手にし
たらしめた女たちの心の歴史を語り
たい。この本、龍王宮の歴史を語り
たい。この本、龍王宮の歴史を語り

朝鮮人女性たちのコノコトの
場たつた龍王宮



9月19日、龍王宮の歴史のついで、おこなわれた
「龍王宮の歴史を語り継ぐ女」の歴史を語り継ぐ
ついで、おこなわれた「龍王宮の歴史を語り継ぐ
女」の歴史を語り継ぐついで、おこなわれた

龍王宮



龍王宮の歴史を語り継ぐ女、おこなわれた
「龍王宮の歴史を語り継ぐ女」の歴史を語り継ぐ
ついで、おこなわれた「龍王宮の歴史を語り継ぐ
女」の歴史を語り継ぐついで、おこなわれた



「龍王宮の歴史を語り継ぐ女」の歴史を語り継ぐ
ついで、おこなわれた「龍王宮の歴史を語り継ぐ
女」の歴史を語り継ぐついで、おこなわれた

「龍王宮の歴史を語り継ぐ女」の歴史を語り継ぐ
ついで、おこなわれた「龍王宮の歴史を語り継ぐ
女」の歴史を語り継ぐついで、おこなわれた

「龍王宮の歴史を語り継ぐ女」の歴史を語り継ぐ
ついで、おこなわれた「龍王宮の歴史を語り継ぐ
女」の歴史を語り継ぐついで、おこなわれた

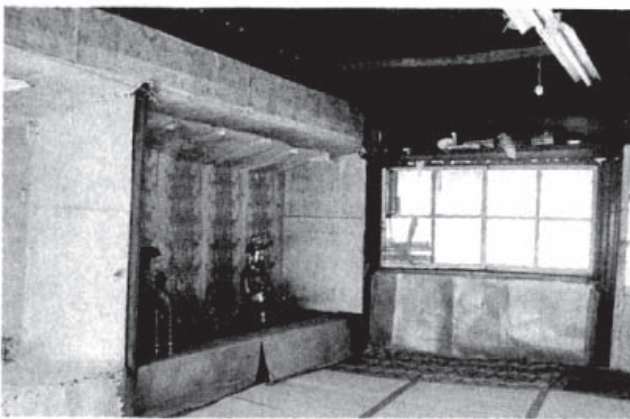
「龍王宮の歴史を語り継ぐ女」の歴史を語り継ぐ
ついで、おこなわれた「龍王宮の歴史を語り継ぐ
女」の歴史を語り継ぐついで、おこなわれた

民団新聞 2009年7月29日

退去迫られる 在日祈りの場

「桜ノ宮龍王宮」

「貴重な文化遺産」惜しむ声も



いまも月数回はクッ（巫祭）が行われる「龍王宮」

【大阪】民間のシャーマニズム信仰に根ざした在日の祈りの場「桜ノ宮龍王宮」が「不法占拠」を理由に行政から立ち退きを迫られている。研究者からは「貴重な文化遺産をなんらかの形で残せないか」という声が上がっている。

龍王宮のある敷地は、

JR環状線桜宮駅の高架下から大川の河川敷に広がっている。高架下の路地を入ると廃品回収の買取場や事務所、炊飯場、寄宿舎が木々に囲まれ軒を連ねている。狭い路地をさらに進むと、大川の水辺に面していちばん奥に建っている。

いまでも鶴橋や奈良県生駒からホサル（菩薩）を呼び、月数回はクッ（巫祭）が行われる。恨を祓う連の儀式は数日にわたって続くことも珍しくない。郷土文化研究者で生駒・宝塚の「韓寺」事情に詳しい曹奎通さんは「日本社会での複雑な立場や、ままならぬ生活上の不安が在日韓国・朝鮮人を現世利益を願うクッに走らせてきた」と分析している。

行政からの退去命令が出たのは家屋を管理してきた在日同胞がなくなってきた今年1月。低所得層地域のまちづくりに関する実践的な研究が専門の金泓奎さん（大阪市立大学都市研究プラザ・准教授）は、「龍王宮には済州道につながる在日同胞の文化、歴史、宗教があり、生活があった」と惜しむ。「行政と折衝して、済州島を思わせる石垣や韓国風の開放的な東屋をつくるとかいような方面からの知恵と協力が求められている」といった声も上がっている。

濟州島出身の在日コリアン祈りの場

「龍王宮」であす祝祭

来春取り壊し
バラック小屋 研究者ら「最後の機会」

都島・旧淀川



旧淀川の水辺に建つ「龍王宮」(手前右) 一大阪市都島区で

大阪の在日コリアン社会をつくった韓国済州島出身者らが故郷を思っ祈りをささげた旧淀川左岸河川敷のバラック小屋「龍王宮」(大阪市都島区)が来春にも取り壊される。民俗信仰の習慣が廃れて利用が減り、1世らの死で忘れられた存在になる小屋に、若手の都市研究者らが注目。「歴史を掘り起こす最後の機会」と22日、龍王宮で「祝祭」と称した催しを開く。

主催する「こりあんコミュニティ研究会」によると、龍王宮はJR桜ノ宮駅高架下の旧集落にある。主に女性が生計をやりくりして巫女を頼み、泊まり込みで現世利益を願う占い「グッ」を行った。

同様の施設は大阪・生野などにもあるが、水辺にあるため「故郷につながる場所」と重宝されたらしい。龍王宮に関する研究がほとんどない中、在

1月2日の管理人男性が1月に急逝。遺族の相談をきっかけに、大阪市の研究員ら約50人が、同島出身の詩人、金時鐘さんらのリレートークや在日歌手の聞き取りなどを決めた。祝祭は午後1時半から、同島出身の詩人、金時鐘さんらのリレートークや在日歌手の聞き取りなどを決めた。祝祭は午後1時半から、同島出身の詩人、金時鐘さんらのリレー

【武井澄人】

毎日新聞 2009年8月21日

なにわ アカデミー

53

こりあんコミュニティ研究会

っている。

敵な名前とは裏腹に建物は 静かに消える運命だった
バラック小屋。河川敷を不 バラックに注目したのが、
法占有する状態が続く中で 大阪市立大都市研究プラザ

アコースティックギター
をかき鳴らして歌う在日コ
リアン2世のシンガーソ
ングライター、朴保さんのブ
ルースには、伴奏する朝鮮
の打楽器チャンゴのリズム
がよく似合った。8月22日、
大阪・桜ノ宮のホテルで開
かれた「龍王宮祝祭」の一
場面。この日の「主役」は、
眼下の森の中にひっそり建
っている。

在日コリアン社会の成り立ちなどの説明を受ける「龍
王宮祝祭」の参加者一部。扇区の旧淀川左岸河川敷で



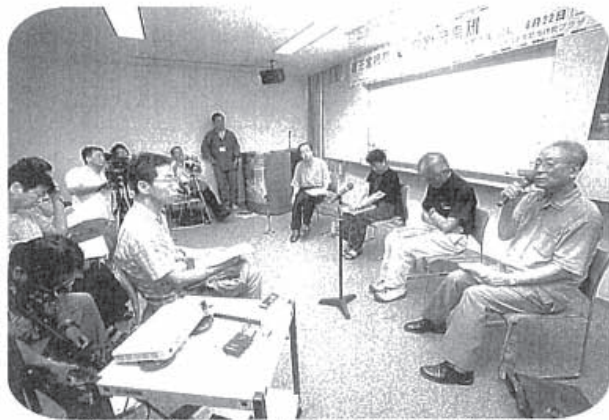
旧淀川河川敷のバラック小屋

龍王宮は、主に韓国・済
州島から大阪に渡り、在日
社会を形成してきた1世の
女性らが現世利益を願う占
い「クック」の場所として使
ってきたという。だが、狂
管理してきた在日2世の男
性が亡くなり、来年2月末
以降に立ち退くことが決ま
り、研究会（この研）。「消
えていく記憶を記録に残そ
う」

「龍王宮」記録に残そう

在日1世女性らの癒やしの場

は、濟州島出身の詩人、金
時鐘さんら4人がマイク
を握った。80年代に在日社
会の民俗信仰を調べた宗教
社会学者の飯田剛史・大谷



「龍王宮祝祭」のリレートークに臨む金時鐘さん(右端)ら

存在を多くの人に知っても
らおうと企画したのが祝祭
だった。

大教授は、箱作海岸(阪南
市)などの水辺で行われた
クックを紹介。「龍王宮の建
物は既に限界がきている。
利用も少なくなり、存在意
義は消滅しつつある」と述
べた。

自分の母が同島からの流
民という2世研究者、関西
学院大非常勤講師の玄善
允さんは「在日1世の女
性には、神様より、龍王宮
で確かめ合える人間同士の
ネットワークが大切だった
のではないかと指摘。神
戸大非常勤講師の高正子
さんも「頼れる親族もなく、
同じ出身地の人々と同じ儀
礼で不安を払い、生きる力
を得た。異国で言葉も通じ
ない中で癒やしの場だっ
たのだと思う」との考えを
述べた。

祝祭は、府や市などが実
行委員会に加わる「水都大
阪2009」の開催日と重
なった。大規模で華やかな
イベントと対照的な手作り
の催しだったが、この研共
同代表の水内俊雄・大阪市
立大教授は冒頭、集まった
約90人に力強く言った。
「龍王宮は水辺の空間を
豊かに使っていた事例の一
つとも言える。新しいビル
を建てて、きれいな景観を
つくるだけがまちづくりじ
ゃない」。「祝祭」につけ
られた副題「もうひとつの
水都大阪」は、開発や少数
者の排除に偏りがちな、行
政のまちづくり思想に対す
るアンチテーゼでもあっ
た。

【武井澄人】

濟州島出身の在日コリアン女性祈りの場

龍王宮の「残し方」模索

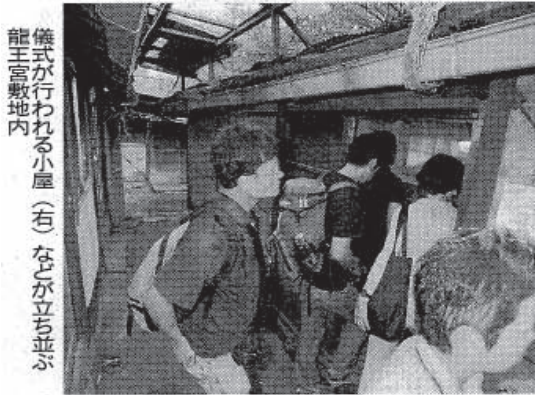
有識者らがプロジェクト

大阪市内を流れる大川流域に、韓国・濟州島出身の在日朝鮮人の女性が祈りをささげてきた施設「龍王宮」(大阪市都島区)がひっそりとたたずむ。「在日の心よりどろどろ」(菅理人)となっていたが、法的には不法占拠で来年以降に取り壊される予定。そこで、この場所の歴史や実態を記録し、さまざまな「残し方」を模索しながら最後を見届けようとする有識者や市民らが集まってプロジェクトを進めている。

■心休まる場所 室。祈祷師らが、ときどきJR環状線桜ノ宮駅に激しく鳴り物を響かそうべを垂れる。同島の高架下で、水辺に沿って占いや厄よけの儀の伝統習俗を踏まえ、つて立ち並ぶ小屋の一式を行い、その前で済州島出身の女性たちが



大川(左)に隣接して設置されている龍王宮(背後の建物)



儀式が行われる小屋(右)などが立ち並ぶ龍王宮敷地内

1990年代半ばまで定期的に通っていた在日1世のKさん(87)「大阪在住」は「私たちが心休まる場所だった」と振り返る。

施設は貸室で、祈祷師らを連れてきた利用者が料金を払って使用。70～80年代の全盛期には、週数十回、今でも週2、3回利用されているという。

同島出身の家系で在日朝鮮人2世の女善允(関西学院大非常勤講師)58は「故郷の伝統のつながりを感じながら、家の平安を祈る場であると同時に、

読み書きができない在日1世コリアン女性にとって得がたい情報ネットワークができていた」と指摘する。

■何らかの痕跡を 龍王宮は来年2月末以降、河川敷管理者の大阪府に撤去される予定。法的には不法占拠のため、管理人だった

在日2世の男性が今年1月に急逝した後、立ち退きの勧告があった。撤去後は、隣接する公園とともに大阪府が管理する。

現在は娘の宋良恵さん(29)が管理人。「私たちにあって、先代の歴史を語り継ぐことが、社会に交わって生きるための大きな力になる。龍王宮がなくなっても何らかの痕跡を残せれば」と思いを込めている。

■記録と発信

こうした現状の中、撤去の話聞いた有識者らが龍王宮について記録し、発信するプロジェクトを展開。歴史をはじめ、宗教学や建築学など多彩な観点から調査を進めている。大阪市立大都市研究プラザの研究員らでつくる「こりあんコミュニティ研究会」を中心に、在日朝鮮人関係に詳しい関係者らが聞き取りや実地調査を実施。8月には啓発イベント「龍王宮祝祭」を開き、施設見学や野外ライブなどを行った。

見学会では、在日朝鮮人史に詳しい塚崎昌之(53)が「府立茨木西高教諭」が「1910年代後半から職探しなどで来日した朝鮮人が船上生活していた時期もあり、祈りの場として組織的に利用され始めたのは45年以降という。在日朝鮮人にとってなじみ深く、供物を流すのにも便利な場所だった」と(塚崎教諭)。

撤去をめぐり、関係者から「記念碑などを建てられないか」との意見がある一方、近隣住民からは、鳴り物の音や供物を燃やす煙が「迷惑だった」と歓迎する声もあるという。市の担当者は「公園整備については地元で説明し、法律の許す中でその内容について協議する場合もあろう」としている。

在日の儀式の場 「龍王宮」を紹介
 きよぶる部島でイベント
 大阪市都島区にある毛織職人・龍王宮と呼ばれる建物を、龍王宮・済州島出身の在日コリアンの女性たちが運営する「龍王宮」が、7月17日（土）に同地区の龍王宮で、在日コリアン・タイ研究会（JICA）の協賛で「龍王宮」を紹介するイベントを開催した。当日は午後一時から都島区中野町5丁目の大阪リパサントホテルで、特人の金時純さんらによる「大阪の済州人」龍王宮と題したトークショーや、龍王宮のワイヤードラックや、ワイヤードラックの製作過程を、参加費1000円、問い合わせは「龍王宮」事務局（TEL:06-6509-1100）に問い合わせる。

辺りワイヤードラックやワイヤードラックの製作過程が、在日コリアンの女性たちが運営する「龍王宮」が、7月17日（土）に同地区の龍王宮で、在日コリアン・タイ研究会（JICA）の協賛で「龍王宮」を紹介するイベントを開催した。当日は午後一時から都島区中野町5丁目の大阪リパサントホテルで、特人の金時純さんらによる「大阪の済州人」龍王宮と題したトークショーや、龍王宮のワイヤードラックや、ワイヤードラックの製作過程を、参加費1000円、問い合わせは「龍王宮」事務局（TEL:06-6509-1100）に問い合わせる。

読売新聞 夕刊 2011年5月12日付



龍王宮は、JICA大阪環状線・桜ノ宮駅近くの大川河川敷にあった。大阪市立大・都市研究ラサ（大阪市住吉区）に事務局を置く「こりあんコミュニティ研究会」によれば、建物は1960年代に近くの工事現場の作業員宿舎として建てたとみられる。その後、廃品回収業者が在日コリアンの男性が建物を所有し、依頼者や祈り師らに貸していたという。

龍王宮は、JICA大阪環状線・桜ノ宮駅近くの大川河川敷にあった。大阪市立大・都市研究ラサ（大阪市住吉区）に事務局を置く「こりあんコミュニティ研究会」によれば、建物は1960年代に近くの工事現場の作業員宿舎として建てたとみられる。その後、廃品回収業者が在日コリアンの男性が建物を所有し、依頼者や祈り師らに貸していたという。

在日女性 祈り半世紀

●在日コリアン女性の祈りの場だった龍王宮（1960年、大阪市都島区）
 ●阪田剛史・大谷大教授提供
 ●勉強会で龍王宮の映像を映し出す「こりあんコミュニティ研究会」のメンバーら（2月、大阪市北区）



「龍王宮」後世に

住み、淀川流域では920年代からクツという祭儀

が営まれていたという。クツは、在日1、2世の女性を中心とする信仰文化で、司祭者「シンパン」らが太鼓と鐘を鳴らして読経し、家内安全や無病息災などを願う依頼者に占いやおはらいをした。祭儀の後は、済州島の海につながる川へ

と、供物を流していた。龍王宮の最盛期は80年代前半で、1日約150組が利用した。とあるという。小説『血と母』の著者、梁石日さん(74)もフォト・エッセー集『魂の流れゆく果て』で、幼少時代に母親に何度か連れてこられた記

ドキュメンタリー制作

40年以上通ったという生野区のパート従業員で在日2世の申玉子さん(76)は、「人生の困難にぶつかった時、家族の将来がうまくいくよう龍王宮で祈れば、心が安らいだ。自分を何度か救ってくれたかけがえのない場所がなくなり、とてもさみしい」と振り返った。

ドキュメンタリーが完成後、上映会を開いてさらに情報提供を求める予定だという。研究会共同代表の水内俊雄・大阪市立大教授（都市社会地理学）は「正史から外れたマイノリティの歴史を語り継ぐことは重要な」と話している。

鐘をつづっている。しかし、河川敷を管理する府から不法占拠として再三立ち退きを求められ、所有者の男性が亡くなった後、遺族が自主撤去した。

龍王宮に関する文献はほとんどない。同研究会は取り壊し前に建物を実測して図面を作成。祭器や神図、びょうぶなどの備品を保存し、クツの様子をビデオカメラで撮影。司祭者からも、龍王宮の歴史や儀式の意義などについて証言を集めている。

龍王宮プロジェクト活動日誌 (敬称略)

2009年

- 2月4日 龍王宮訪問 (全泓奎・宮下良子・本岡拓哉)
- 2月20日 龍王宮管理人へのインタビュー (全泓奎・宮下良子・本岡拓哉・福本拓・全ウンフィ)
龍王宮実測調査 (黒木宏一・全昌美)
- 3月11日 こりあんコミュニティ研究会結成。第1回定例研究会(於:西成プラザ、報告:宮下良子・本岡拓哉・全泓奎・柴田剛)
- 3月17日 西大阪治水事務所訪問 (全泓奎・本岡拓哉)
- 4月12日 第2回定例研究会 (於:龍王宮 報告:宮木謙吉「大阪に残る日朝交流史の源流をたどるフィールドワーク:大川・朝鮮通信使・竜王宮を中心に」)
- 6月20日 第3・4回定例研究会(於:龍王宮 報告①:高野昭雄「戦前京都の都市形成と在日朝鮮人」、報告②:本岡拓哉「コリアンコミュニティのタイポロジー」)
- 7月19日 第5回定例研究会 (於:龍王宮、報告:斎藤正樹「ウトロのまちづくり」)
- 8月22日 「龍王宮祝祭—もうひとつの「水都大阪2009」—」(参加者約100名)
- 9月11日 誠願寺(生野区)訪問(藤井幸之助・本岡拓哉・原尻英樹・金明美・宋良恵)
- 9月26日 第6回定例研究会 (於:龍王宮、上映:金稔万撮影「「移住」の視点から見る韓国・濟州島スタディツアー」、報告①:宋良恵「移住」の視点から見る韓国・濟州島スタディツアーに参加して、報告②:藤井幸之助「なくなる朝鮮人飯場街—東淀川区西淡路チロリン村—」)
- 9月30日 コリアン・マイノリティ研究会第84回月例研究会で、安世鴻写真展「海巫—Heamu—「韓国の豊漁祭」見学
- 10月13日 特別研究会 (於:龍王宮、報告:Jin Nye Na「イギリスの移民政策:在英、韓国人コミュニティを中心として」)
- 10月24日 第7回定例研究会 (於:龍王宮、報告:塚崎昌之「龍王宮をめぐる歴史—大川・海女・朝鮮寺—」)
- 11月21日 第8回定例研究会 (於:龍王宮、報告:柴田剛・本岡拓哉・藤井幸之助・全ウンフィ「市街地化に伴う在日コリアン養豚業の廃業過程と場所のポリテクス—和歌山県紀南地方を事例に—」)

2010年

- 2月27日 第11回定例研究会 (於:龍王宮、報告森類臣「宋建鎬のジャーナリズム論と『ハンギョレ新聞』—「民主言論」「民族言論」概念を中心に—)
- 2月~3月 龍王宮実測調査 (黒木宏一・平川隆啓・深田智恵子・増田亜樹)
- 3月9日 「龍王宮の記憶を記録するプロジェクト」大阪コミュニティ財団助成決定
- 3月23日 桜ノ宮廃品回収業者(金沢商店)インタビュー(藤井幸之助・塚崎昌之・韓秀子・本岡拓哉)
- 4月24日 第13回定例研究会 (於:龍王宮、報告:高敬一「在日コリアン多住地域での生活支援および啓発活動」)
- 4月29日 龍王宮クッ見学(藤井幸之助・宮下良子・本岡拓哉・金稔万・近畿大学脇田研究室数名…)
- 5月29日 第14回定例研究会 (於:龍王宮、報告:島村恭則「引揚者が生み出した戦後日本の社会空間と文化」)
- 6月27日 こりあんコミュニティ研究会大会スタディツアー(龍王宮・西成)
- 7月19日 龍王宮クッ見学(中山徹・金稔万・本岡拓哉・平川隆啓・西中誠一郎・宋実成・金美善…)
- 7月22日 池田市立呉服小学校校内研修(案内:塚崎昌之・藤井幸之助)
- 7月24日 都島区中野町町会長インタビュー(塚崎昌之)
- 7月25日 「最後の龍王宮祝祭—もうひとつの水都大阪2010—」(参加者:約70名)
- 7月31日 クッ見学(藤井幸之助・金稔万)、在日コリアン青年連合+韓国学生フィールドワーク(ガイド:藤井幸之助)

-
- 7月～8月 龍王宮備品搬入作業（藤井幸之助・本岡拓哉・協力：大淀プラザ）
8月4日～19日 龍王宮解体工事記録（ビデオ撮影：金稔万・本岡拓哉、スチール撮影：藤井幸之助）
8月23日 龍王宮プロジェクト検討会議（於：大淀プラザ、藤井幸之助・本岡拓哉・水内俊雄・塚崎昌之・黒木宏一・岡本友晴）
9月17日 龍王宮備品整理作業（於：大淀プラザ、藤井幸之助・本岡拓哉・岡本友晴・羅基台〔在日韓人歴史資料館〕・李美愛〔在日韓人歴史資料館〕）
12月3日 金沢商店聞き取り（藤井幸之助）

2011年

- 1月15日 『龍王宮の記憶（仮）』映像編集会議（藤井幸之助・本岡拓哉・金稔万）
1月29日 第20回定例研究会（「龍王宮の記憶（仮）」試写会（於：大阪市大高原記念館）
3月5日 日本と韓国・朝鮮の歴史を学ぶ現地学習会「伊丹市旧中村地区・桜ノ宮「龍王宮」跡・大阪人権博物館」（主催：和泉市人権啓発推進協議会多文化共生部会、ガイド：藤井幸之助）
3月21日 第22回定例研究会「生駒山麓に朝鮮人の足跡をたどる―旧生駒トンネル・朝鮮寺・額田の針金―」（案内：塚崎昌之 共催：在日コリアン青年連合（key））

龍王宮に関する文献・映像リスト

【龍王宮プロジェクト関連】

- こりあんコミュニティ研究会編（2009）『龍王宮祝祭—もう一つの「水都大阪 2009」—資料集』
- 藤井幸之助（2009）「済州島出身の女たちの祈りの場・桜ノ宮「龍王宮」—遠からず姿を消す在日朝鮮人の心の拠りどころ—」『書評』132号、関西大学生協同組合『書評』編集委員会、126-135頁。
- 全泓奎（2009）「桜ノ宮龍王宮の現状（1）」『Koco-ken 研究会通信』第1号、4頁。
- 黒木宏一（2009）「桜ノ宮龍王宮の現状（2）」『Koco-ken 研究会通信』第1号、5頁。
- 全泓奎（2009）「桜ノ宮龍王宮の報告その3」『Koco-ken 研究会通信』第2号、4頁。
- 谷富夫（2009）「龍王宮の研究に期待する」『Koco-ken 研究会通信』第2号、4頁。
- 龍王宮祝祭準備チーム（2009）「龍王宮祝祭開催」『Koco-ken 研究会通信』第3号、1頁。
- 中川真・武井澄人・藤井幸之助（2009）「様々な立場から見る龍王宮祝祭プロジェクト」『Koco-ken 研究会通信』第3号、2-3頁。
- 塚崎昌之（2009）「龍王宮をめぐる歴史—大川・海女・朝鮮寺—」こりあんコミュニティ研究会第8回定例研究会報告資料
- 塚崎昌之（2010）「龍王宮・記録を残せなかった歴史に光を」『Koco-ken 研究会通信』第5号、1頁
- 黒木宏一（2010）「龍王宮実測調査報告」『Koco-ken 研究会通信』第5号、5頁
- 宮下良子（2010）「龍王宮の空間が語るもの」『コリアンコミュニティ研究』vol.1、15-20頁
- 飯田剛史（2010）「龍王宮・箱作・済州島」『コリアンコミュニティ研究』vol.1、15-20頁
- 高正子（2010）「大阪済州人の祈り」『コリアンコミュニティ研究』vol.1、15-20頁
- 玄善允（2010）「済州島出身在日一世の習俗の断片」『コリアンコミュニティ研究』vol.1、31-35
- 塚崎昌之（2010）「資料：済州島女性の祈りの場「龍王宮」と大川周辺の朝鮮人」
- 전은휘（全ウンフィ）（2010）「마지막 굿이 열리던 날 : 사쿠라노미야 용왕궁 이야기」『플랫폼』（「桜ノ宮龍王宮の最後のクツ」『Platform』）24,86-89頁。
- こりあんコミュニティ研究会ニューズレター編集委員会「最後の龍王宮祝祭・速報」『Koco-ken 研究会通信』第6号、7頁。
- 藤井幸之助（2010）「「龍王宮」の最期—形はなくなっても未来の記憶に生きる—」『書評』134号、関西大学生協同組合『書評』編集委員会、157-169頁。
- 本岡拓哉（2010）「桜ノ宮「龍王宮」—在阪済州島出身女性たちの祈りの場—」『居住福祉研究』10、84-96頁。

【パネル作成】

- 黒木宏一・平川隆啓・深田智恵子・増田亜樹（2010）「龍王宮」の記憶
- 近畿大学理工学部建築学科脇田研究室（2010）「龍王宮における儀礼時の空間利用」

【解放前新聞記事スクラップ】

龍王宮近辺 収集：塚崎昌之

【写真】

- 龍王宮（1963年5月、撮影：高仁鳳）
- 龍王宮・箱作（1989年2月12日、撮影：飯田剛史）

【新聞報道】

- 「JR鉄橋下で火事 大阪環状線2時間不通、9万8000人影響」『読売新聞』2007年2月8日付。
- 「退去迫られる在日祈りの場「桜ノ宮龍王宮」」『民団新聞』2009年7月29日付。

「済州島出身の在日コリアン祈りの場「龍王宮」であす祝祭」『毎日新聞』2009年8月21日付。
「なにわアカデミー 53 こりあんコミュニティ研究会「龍王宮」記録に残そう」『毎日新聞』2009年9月11日付。
「済州島出身の在日コリアン女性祈りの場 龍王宮の「残し方」模索 有識者らがプロジェクト」『大阪日日新聞』
2009年9月25日付。
「最後の龍王宮祝祭—もうひとつの水都大阪2010—」『朝日新聞』2010年7月23日付。
「最後の龍王宮祝祭：韓国・済州島出身女性らの祈りの場、最後のイベント」『毎日新聞』2010年7月24日付。
「在日女性祈り半世紀 「龍王宮」後世に ドキュメンタリー製作」『読売新聞』2011年5月12日付。

参考【龍王宮プロジェクト関連以外】

石井靖彦（1984）「長い歴史を閉じつつある……朝鮮部落訪問記」『朝鮮・韓国を知る本』別冊宝島
39、JICC 出版社、160-163 頁（龍王宮の写真あり）
宗教社会学の会編（1985）『生駒の神々—現代都市の民族宗教—』創元社
元秀一（1987）『猪飼野物語—済州島からきた女たち—』草風館
加藤敬・写真・文（1990）『万神—韓国のシャーマニズム—』平河出版社
金秀男・写真、文武兼・文（1993）『写真集済州島3—信仰と祭りの世界—』国書刊行会
梁石日・写真：裴昭（1999：2001）『魂の流れゆく果て』光文社文庫
飯田剛史（2002）『在日コリアンの宗教と祭り—民族と宗教の社会学—』世界思想社
藤本巧（2006）『韓くに、風と人の記録』フィルムアート社
金良淑（2005）「済州島出身在日1世女性による巫俗信仰の実践」『韓国朝鮮の文化と社会』第4号、風響社
金良淑（2006）「日本で営まれる済州島の「クツ」」『世界のコリアン』勉誠出版、134-147 頁
金良淑（2010）「大阪に生まれた済州島の聖地「龍王宮」」『まほら』No.63、旅の文化研究所、46-47 頁
琴基徹（2010）「ルポ・現場発 龍王宮：また姿を消した在日同胞の「場」済州島女性たちのクツ堂」『月刊イオ』
9月号、33-35 頁
安世鴻（2010）『海巫—Heamu—「韓国の豊漁祭」安世鴻写真展』
金良淑（2010）「クツ」「シンバン（神房）」「龍王宮」『在日コリアン辞典』明石書店
高祐二（2011）「消えゆく在日文化遺産 桜ノ宮龍王宮を訪ねて」『兵朝研（兵庫朝鮮関係研究会）』147号、
9-12 頁。
藤井幸之助（掲載予定）「龍王宮」『日本民俗学大辞典』朝倉書店
★済州島四・三事件関連の文献は多数。

【テレビ放送】

NHK 特集『済州島—母なる島への帰郷—』（1982年10月18日放送、制作：NHK 山口放送局）
NHK スペシャルドラマ『李君の明日』（1990年5月3日放送、原作：元秀一、脚本：田中晶子、制作：
NHK 大阪放送局）

【関連サイト】

こりあんコミュニティ研究会ブログ <http://kocoken2009.blog68.fc2.com/>
コリアン・マイノリティ研究会 <http://white.ap.teacup.com/korminor/>
高仁鳳さんのホームページ <http://www.inbong.com/>
猪飼野公民館 <http://kouminkan.ikaino.com/>

執筆者・資料提供者（掲載順）

- 藤井幸之助（神戸女学院大学・非常勤講師）
本岡 拓哉（同志社大学人文科学研究所）
水内 俊雄（大阪市立大学都市研究プラザ）
高 仁 鳳（ケイビーエス株式会社（KBS CO.,LTD.）会長）
飯田 剛史（大谷大学）
塚崎 昌之（大阪府立千里青雲高校）
黒木 宏一（大阪市立大学都市研究プラザ）
平川 隆啓（大阪市立大学・院生）
深田智恵子（大阪くらしの今昔館）
増田 亜樹（大阪人間科学大学）
近畿大学理工学部建築学科都市計画研究室
玄 善 允（大阪経済法科大学アジア研究所）
全 泓 奎（大阪市立大学都市研究プラザ）
谷 富夫（甲南大学）
中川 真（大阪市立大学）
武井 澄人（毎日新聞社）
宮下 良子（大阪市立大学都市研究プラザ）
高 正 子（神戸大学・非常勤講師）
全ウンフィ（大阪市立大学・院生）
琴 基 徹（月刊イオ編集長）

謝 辞

本報告書の作成および「龍王宮」の記憶を記録するプロジェクト」の遂行においては、龍王宮を管理していた高田商店の韓秀子さん・宋良恵さん、新たに原稿を書いてくださった塚崎昌之さん・玄善允さん、文章の転載を許可してくださった筆者や媒体のみなさん、こりあんコミュニティ研究会会員の方々をはじめ、数えきれないほど多くの方々にご協力を頂きました。なお、本報告書刊行に当たっては、大阪コミュニティ財団2010年度助成金、2010年度科学研究費（特別研究員奨励費）「東アジア都市における「不法占拠」地区消滅後の持続的コミュニティに関する研究」（代表：本岡拓哉 研究課題番号：10J10007）、ならびに2010年度科学研究費（新学術領域研究（研究課題提案型））「ITACOによる新しい地誌学の創生と地域の人縁生成に関する試行研究」（代表：若松司 研究課題番号：21200024）の研究助成金を使用しました。また、本報告書の編集では、（有）地域・研究アシスト事務所に大変お世話になりました。ここに記して謝意を表したいと思います。

こりあんコミュニティ研究会
「龍王宮」の記憶を記録するプロジェクト
代表：藤井幸之助・本岡拓哉

発行日 2011年8月31日発行

発行 ©こりあんコミュニティ研究会
〒558-8585 大阪市住吉区杉本 33138
大阪市立大学都市研究プラザ
Tel/Fax: 06-6605-3448
E-mail: kocoken2009@gmail.com

編集協力 (有) 地域・研究アシスト事務所
〒545-0011 大阪市阿倍野区昭和町
2丁目19番28号 青葉グランドビル 402
Tel: 06-6624-1127
Fax: 06-6624-0027
E-mail: info@cr-assist.co.jp

印刷 ホウユウ(株)
〒590-0982 大阪府堺市堺区海山町 1-8-4
Tel: 072-227-8231
Fax: 072-224-1466
<http://www.for-you.co.jp/>

※本レポートは文部科学省グローバルCOEプログラム「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」の成果の一部として発行したものである。



こりあんコミュニティ研究会「『龍王宮』の記憶を記録するプロジェクト」

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138
大阪市立大学都市研究プラザ気付
Tel&Fax : 06-6605-3448
E-mail : korean.community.studies@gmail.com
homepage: <http://kocoken2009.blog68.fc2.com/>



URP GC0E Report Series No.18 2011

